ば、直ちに屈服頓挫し、又は之れを嫌厭し、遂に何事も成し遂ぐる能はず、斯の如き人は畢竟奮然氣力を發揮し事に當るの勇なき者にして、終生向上すること能はざるべく、況や克己心あらんや。

第五には意志の弱き人は、其の行爲常に不規律にして精神快活ならず、隨つて自己の情慾を制して勤儉貯蓄を爲すの勇無し。之れを要するに勤儉貯蓄實行の骨髓は自己の情慾を抑制し己れに克つにあり、斯くて勤儉貯蓄を實行するは人生の必要事項にして、又成功の一手段なり。云々と、安田善次郎氏は此の一小冊子に於て成功の秘訣と云ふことを悉されて居るのである。今我々が茲に是れ以外に於て特に述べる所の必要は無からうと想はれるのである。要するに成功の秘訣と云ふて特別に敎ふる譯ではない、飽迄善事に強かれと云ふの外はないのである。各種の誘惑に打負けない、艱難にも耐へ忍ぶと云ふので、極めて善事に強い者が立派なる成功を爲すと云ふの外は無いのである。本章は各種の場合に於ての秘訣を說いて居るが、要するに不正なる事をして自己の一身を立てやうと

善事に強かれ

云ふ考へでは、自分の生涯を悉しても到底其の身の立つものでは無いと云ふ事を能く考へなければならぬのである。

第十八章　富の維持法

成功の結果

人生と富とは朝露の如し

前章に於ては專ら成功の秘訣と云ふことを述べたのであるが、其の成功の結果として何を得られるものであらうかと云へば、夫は名譽であるか或は富であるか孰れにか歸さなければならぬ。然るに此の富と云ふものは誠に浮雲の如きものである。人も朝露の如しと云はれた其の朝露の如き人間が作る所の富であれば、是れ亦朝露の如き者である、併し人は自己の生活及び子孫の爲めに營々として其の富を作ることを皆計つて居るのである。學者と雖も眞に之れを興味として研究すると云ふよりも學問をして或る地位を得たい、得ると同時に子孫の計を爲さうと云ふ事を考へるのである。英雄豪傑と雖も矢張り同樣であらうと思ふ。尤も個人的

個人的の計と國家的の計

一家の計を爲さうと云ふ考へでなくして、國家的の計を爲さうと云ふ人も古來より無い譯ではない。例へば近世に於ては西郷隆盛の如き殆ど其の終身を國家國民の爲めに、又皇室の爲めに費した者と云ふて差支ない、西郷の時に我家遺法人知否不爲子孫買美田と云ふのがある、夫を見ても南洲は個人の富の爲めには何等の考へも持たなかつたのである。併し大いなる富卽ち國家の計と云ふ上に於ては非常に苦心せられて居つたのである。個人の富は考へなくとも何等か國民の利益になることであれば、自然に其の人の身には名譽の月桂冠を戴かせられ、又相當なる富と云ふものは與へられる者である。學者は財寶と云ふものを卑しむやうに考へるけれども亦決してさうではない、學者と雖も子孫はあるのである、矢張り其の子孫の爲めに又自分一身の生活の爲めには、相當の收益あらん事を常に望んで居る。實際其の學問の效果として國民に相當なる神益を與ふれば、國民も亦之れに報ゆるに相當なる報酬と云ふものを以てするのである。今日の場合に於ては學者も亦相當の富を爲して居る。富に

成功の結果と名譽

成功の結果と富

子孫の愛護

も色々ある、自分一代が安穩に生活が出來ると云ふのもあるし、或は大いなる富で子孫に至る迄も遊んで生活の出來ると云ふ程のもある。要するに富は自己の生活以上の場合に於ては必ず子孫の安全に世の中に生活し得るやうにしたいと云ふ目的から作り出すものと云はなければならない。自然に出來た抔と云ふ人があるけれど、夫は必ずしも自然と云ふ譯ではないので、人の前に向つては立派な事を言ふて居りながら、營營苦心して其の富の爲めに働いて居ると云ふ事は今日普通一般である。世の中に成功の結果として富める者は隨分あるが、其の富める者も之れを永久ならしめる方法と云ふものが立たなければ、巨萬の富でも僅の間に費消して仕舞ふことが來るのである。富を得た者に限りて如何にかして之れを子孫に傳へたいと云ふ念慮を起して來る、之れは當然の事であらうと思ふ。紀國屋文左衛門の如き自分が作り出した富であるから自分は之れを自在に使用して仕舞ふ、子孫は又勝手に富を作り出すが宜いと云ふことは聊か豪放に失する傾きがある。我々が富の入用と云ふものは、

富の必要

今日の生活と夫から次代のものがどうにか安全に生活して行けるやうにと云ふことが其の目的である。子孫はどうでも宜しいと云ふことは到底穩當なる考へとは思はれない、寧ろ負け惜みの言葉として聽くべきものであらう。縱令子孫に遺すだけの富がなくても其の子を敎育するだけの事は我々は働かなければならんのである。其の敎育するは何が爲めかと云へば、どうか夫に依つて相當なる收益を得て、生活に差支へないやうにと云ふ考へから起るので、親として子の爲めに計るは至當のことである。況や巨萬の富を作り得た者は、矢張り其の子孫も亦我の如く巨萬の富を有して、世の中に何不自由なく生活を爲させたいと云ふことが心に無ければならぬ、夫は又有るべきことである。然らば其の作り出した富は如何なる方法を以て、長く之れを失はないで子孫が永遠に其の惠みに依つて生活して行けるかと云ふことの研究が、其所に起つて來るのである。夫には二つの仕方がある。消極的の方面から言へば、夫を使はないやうにと云ふ方法である。積極的の方面から言ふと、夫を使はないのみ

富の持續

消極的維持法

積極的維持法

ならず更に殖して行くと云ふ仕方である。さりながら折角之れを增殖しても、一方に之れを費消する者があれば是れ亦仕方がない事であるから、使はないやうにして之れを殖やすと云ふことが何より良い方法であるに相違ない。自ら其の富を作り出す位の成功者は、必ず積極的に勤勉であつて夫を增殖した者であるし、消極的の方面から言へば、極めて儉約をして使はないやうにしたものであると云ふことは明かである。併しながら子孫が幸に其の富を作り出すが如き者であつてくれれば宜しいけれども、若しさうでなかつたならば、誠に詰らぬもので折角築き上げた所のものも、直ぐに之れが崩れて仕舞ふと云ふことになるのである。

夫故に富をして永久的ならしめやうと云ふのには、卽ち子々孫々をして飽迄も勤儉を以て立つやうな人を造らなければならないのである。之れは却々口には容易に言へることであつて、容易に行はれないことである。或は又幸に其の子孫が勤儉であつて見ても、元來富と云ふものは或る人が之れを永久に占有すると云ふことになると、他の富を得ない者は之れ

子孫をして勤儉たらしむべし

富の占有と人の妬み

に對して羨み妬みと云ふものを持つものである。

神が此の世に人類を降したのは誰に幸あれ誰に禍あれと降したものではないのである。皆孰れも同じやうに神の惠みの下に安らかに平和に生活することを希望して居るものと看なければならない。決して始めて此の世に人類を造り出す時に、誰は幸あれ誰は不幸あれ、誰は尊くして誰は卑しき者であるとして定めて降したものでは無からうと云ふことは何人も認める所であらうと思ふ。然るに世には巨萬の富を有する者がある、又一方には赤貧洗ふが如く其の日の飯さへ食ふ事の出來ない者が澤山にあるといふは如何にも不公平である。併し乍ら生存狀態の結果として實際世間には健康なる者あり不健康なる者あり、勤儉なる者あり遊惰なる者あり、智者あり愚者あり實に各種の境遇に依つて色々と相違が起つて來る。其所で富を占有する人と終日汗水を流して勞働する人と云ふやうな階段が出來て來たのである。故に富める者は人類の世の中に發生した所の根本に遡つて考へて、さうして其の大意に適ふやうにして行かなけ

人類は元と平等なり

不平等は生存狀態の結果なり

人類に對する富者のつとめ

れば、自分も其の富を永久に維持することが出來なくなるのである。今日の所は幸に國家に法律があり總ての秩序が整頓して居るから、富める者も其の富を維持して行くことが出來るけれども、若し是等の保護制裁と云ふものが無かつたならば、富める者は富まざるものゝ爲めに遂には破壞され若くは奪ひ去られなければならぬやうな事に立到るのである。縱令法律があつて保護されて見た所で、富める人は天意と人意とに適ふやうに其の富を使用して行かなければならぬと云ふことを考へなければならぬ。單に子孫をして勤儉ならしめんとするだけでは行けないのである。勤儉ならしめると同時に積みたる財寶は、之れを有益なることに散ずると云ふ途も示さなければ、折角の富も亦大いに價値を減ずるものである。其所で子孫をして永久に其の富を保たせて行くには、如何にしたならば宜しいかと云ふ大問題が起つて來るのである。

富の持續方法

日本の國家と云ふものを見ると、實に世界に稀なる所の長い歷史を有して居る、しかも三千年に近き今日迄皇統一系連綿として續いて、さうし

て倍〻隆盛に倍〻安泰に進みつゝあるのである。夫で富を維持してゆかうとするものも之れが國柄を手本として、丁度國家の爲し居る所の方針と同じやうなる方針を採らなければならぬのである。固より家と云ふものも國があつてのもので、國亡ぶれば總てのものは一時は悉く破壞されて仕舞ふものと看なければならぬのである。そこで國の制度と一家の制度と云ふものは同じやうであつたならば、其の一家は其の國のあらん限り繼續するものと云はなければならぬ。

家憲の必要

現在日本の國は如何なる組織になつて居るかと云ふと、問ふ迄もなく立憲政體と云ふものになつて居るのである。即ち欽定憲法に基いて出來て居る此の憲法は上御一人を始め下萬民に至る迄何人も之れに背くと云ふことは出來ないと云ふことの規定に依つて成立つて居るものである。一家を長く維持するにも矢張り同樣なる憲法を定めて、それに基いてやらなければならないものである。さうして子々孫々が其の憲法に定めた所に從つて其の一家を愛重し何所迄も其の家憲を實行して行くと云ふやう

家憲には如何なる條件を定むべきか

尊系心の必要

にしなければ、無限に存在されると云ふことは難ひのである。然らば其の一家の憲法たる家憲となるものには如何なる事を制定しなければならぬかと云ふ問題が起つて來るのである。從來日本に於ける有名なる富豪名門には皆夫々に家憲と云ふものが規定されて居る、其の家憲の運用宜しきを得て今日迄に至つて居る家が大分あるのである。夫等に就いて取調べて見ると云ふと、家憲には大要左に掲げるだけの條件を具へて居らなければならぬと云ふことがわかるのである。

一　尊系心に關する事　國民教育に歷史と云ふものは何で必要であるかと云へば、其の國の由來幷に其の國を今日まで維持し來つた所の各種の事蹟と云ふものを知つて、さうして其の國を愛する念慮を養ふと云ふのが主である。日本には斯う云ふ經歷と云ふものがある、我々の祖先は斯の如き偉大なる働きを爲したものである、我々の祖先は斯の如く君に對して忠義を盡したものであると云ふ事に依つて、夫故に我々は斯くせねば祖先に對しても恥づべきであると云ふ觀念を喚起して忠君愛國の精

祖先の功勞

神を養ふのである。其所で其の一家を維持する上に於ても、丁度國家の歴史の必要なると同樣に、家庭教育に於て其の家の祖先の功勞と云ふものを說いて、今日自分等が斯くも安全に何事も不自由なく、斯うして此の世に生活して居られると云ふものは皆自分の先祖の賜である、其の先祖の御恩を忘れてはならないと云ふ念慮を養つて行かなければならないのである。又夫と同時に祖先は始めて其の家を興す時に實に斯う云ふ艱難苦勞をしたと云ふ其の事蹟を詳かに語つて、さうして子孫たる者が其の祖先の行ふた所を欽慕すると云ふやうに遺つて行かなければならないのである。

祖先の祭祀を怠るなかれ

夫には祖先の祭祀を怠つてはならない、祖先の歴史と云ふものを常に其の子弟に語り聽かせると云ふこと、其の他吉凶何事に依らず總て之れを執行ふと云ふやうな場合には、先づ第一に祖先の靈を招き之れに告白すると云ふ事を爲なければならない。さう云ふ風に祖先を重んじ祖先を慕ふと云ふやうにあつてこそ、始めて祖先の有り難いことや、祖先に對して濟ぬと云ふ感じなどが起るので、祖先の賜は飽迄も之れを

毀傷しないやうにしなければならぬと云ふ感じも其所に起つて來るのである。之れは誠に結構なる事で、我が日本の國は祖先崇拜と云ふ觀念に依つて、開闢以來今日まで善美なる統一を有して、皇統一系の下に君主たり臣民たりで來つたのであるから、時に國家重大の事があれば天皇は之れを皇祖皇宗に告白し、又其の事が終局を告ぐれば矢張り之れを皇祖皇宗に告白する、三大節に於ても先づ第一に賢所を參拜し、各皇祖皇宗の靈に御祝儀を申上げて、然る後に文武百官に宴を賜はると云ふやうになさる。それ故一家に於ても極めて祖先を重んじ何事も第一に祖先に之れを告げて後に實行すると云ふやうな風にして行かなければ、其の家は長く永久に繼續すると云ふことは出來ないものである。其の一例を言へば、日本の大地主として名高い所の山形縣酒田の本間家である。本間家が今日に至るまで一人の放蕩兒を出さない、一人の家憲違犯者を見ないと云ふのは、詰り此の尊系の精神を鼓吹する所の家憲の效果に依らなければならぬのである。一家全體に關することは必ず先づ祖先の靈に告げ

日本は祖先崇拜の國なり

本間家の尊系

て然る後に其の實行に着手するといふ本間家は、日清戰爭の際に五萬圓の獻金をした、其の折りにも主人は齋戒沐浴して恭く宣戰の詔勅を佛前に捧げて、さうして祖先の靈に告白を爲し親族一同の者を佛間に集めて其の詔勅を拜讀して後に、其の手續きを終つたと云ふ事である。其の他本間家に於ては慣例として、以前は毎年正月に舊藩主の所へ年始に趨く、其の時にも先づ第一に祖先を拜したる後に家人を伴れて玄關から出て行くと云ふやうな工合に家憲と云ふものは嚴格に定めてあると云ふことを聞き及んで居る。此の他夫々名家の家憲を見ると云ふと、何れも此の祖先を崇拜すると云ふことは明かである、誠に此の祖先崇拜の念慮卽ち尊系の事と云ふものは、家憲に於て第一に特筆しなければならんものであらうと思ふ。

敬虔心の必要

二　敬虔心に關する事　近時の青年には此の敬虔の念慮と云ふものが缺乏して居るのは歎かはしい次第である。之れは明治維新の際に西洋の物質的文明を輸入することに忙はしく、その爲めに精神界の方面は一時

理學思想權利思想の輸入

敬虔心の破壞

全く忘却されて仕舞つた、殊に新たに理學思想權利思想の輸入の影響と云ふものは、全く此の敬虔心と云ふものを破壞し去つて仕舞つて、只さう云ふ理窟はないさう云ふ道理はないと云ふて、一にも二にも總て理化學の教ふる所に依つて判斷を下して仕舞つたのである。夫が爲めに國家は新たに茲に物質的建設の爲めに忙しいので神社佛閣も之れを破壞に任せる、神は無い佛は無い幽靈は無いと云ふやうな工合に、何所までも科學的物質的に行つたのである。其の結果として今日も尙ほ青年の思想中に神佛に對する所の敬虔の念慮と云ふものが乏しくなつて居るのである。之れは其の社會が未だ秩序の立たぬ時、卽ち更に破壞して建設すると云ふ場合には止むを得ぬことであるけれども、既に相當の秩序が立つて來た以上は當年破壞的の人も漸く相當なる經歷を經て生存競爭場裡に衣食をせねばならぬと云ふやうになつて來るので、そこで大いにこの敬虔の念慮と云ふものの必要も感じてくるのである。此の敬虔の念慮と云ふものは道義とか風教とか云ふものを維持する上に非常なる力のあるものでの

ある。世の中と云ふものは之れを物質的に考へて見ると何事も人間の力で爲し得るやうに考へられるが、之れは甚だ淺薄なる考へであつて、實際世に立つて總ての事を處理して行く上に於ては、却々以て自分の力のみでは行かない事が年と共に認められて來るのである、然るに今日の處では既に敬虔心は破壞されて居るのであるから青年者は殆んど他力の何者たるを知らない。多年世の中に奮闘した者でなければ夫を認めることが難いのである。多年の經驗閲歴を積んで見ると、そこで始めて今迄自己の力で以て何事も出來るものであると考へた者が、案外にも自己の力では之れを支へることが出來ないやうな場合に遭遇することがいくらも起つてくるのである、此の時に當つて人は始めて人間の力以外に何等かの偉大なる絶對的の勢力と云ふものがあつて、此の世を支配して居るものであると云ふことを認めるのである。之れは科學者と雖も其の研究を深く積めば積む程、何物かゞ人知を以て測り知る可らざる所の法則と云ふものを定めてさうして此の世を支配するものであると云ふことを認め

他力の認識

傲慢は何時か罰を受く

るやうになつて來るのである。所謂さう云ふ理窟は無いとか我の力で何事でも爲し得るとか云ふ、強情、我慢、我儘の時代と云ふものはなほ半化の時代であつて、眞に深い經歴、奮闘、研究と云ふことを積まない者の淺い考へであると云はなければならない。天文學者ですらも毎夜〳〵天文臺に登つて星の觀測をしてゆけば其所で終に到底人力の測り知るべからざる所の偉大なる恐るべき勢力のあることを發見するといふことである。夫は何であるかと云へば此の宇宙に於ける所の星が毎夜空に輝いて居るが、幾億千萬測り知るべからざる所のものである、夫が皆夫々一定の軌道と云ふものを有して何所に一つの衝突もなく、又それ〴〵春夏秋冬の節序と云ふものも立つて、さうして秩序整然として萬古不易であると云ふことを知ると同時に、何物が之れを支配して斯くも整然たる秩序の下に萬古不易なる動作を與へて居るかと云ふことを思ひやらねばならぬ。また何物が斯る幾億千萬の星や月や太陽などと云ふものを造り出したものであるかと云ふことに考へ及ぶと、其所に眞に恐るべき尊むべ

き偉大なる勢力と云ふものが存在して居る、即ち絶對的なる何物かゞ存在して斯くも世の秩序を立てゝ行くものであると云ふことを認識する、そこで知らず識らず敬虔の念慮が起つて襟を正しうし頭を低れなければならんと云ふ事を聽いたことがあるが、誠に世の中と云ふものは自分の思ふ通りには行くものではない、或る所までは我が意の如くになる、我が意の如くになると同時に人は慢心して何事も我意に依つて爲し得るものであると考へるのが夫が大いなる間違ひである。漸く奮闘生活に入りて自力の果なさを知るやうになると、漸く敬虔の念慮と云ふものが起つて來る、其所に無限なる勢力、眼に見えない所に偉大なる支配者のあると云ふことを悟つて來るのであります。或は幾多氣隨我儘な事を行ふて、さうして文武盛りに神祟りなしで威張つて居つても、何事か災厄が起ると何時かしら我が心に嗟之れは自分が今迄犯した罪の報いであらう神が見るに見かねて教訓を與へてくれるのであらうと云ふ考へを持つ時代が來るのである。其の報いであらうと云ふ事は一體何物かゞ處罰を加へる

敬虔心の發作

災厄と敬虔心

と云ふことになるのである、其の主宰者は口では何にも言はない、眼には見えない眞に寛大なる者ではあるが、餘り我儘の振舞をすると遂に見るに見兼て本人をして自ら悔い改めよとの制裁を下だす、即ち災害來つて始めて主宰者たる何物かの聲を心に聽くのである。之れは世の文化の如何に拘はらず、社會の上下時代の古今を通じて、文明國より野蠻國に至るまで、凡そ人間として此の世に出て居る所の者は皆其の偉大なる絶對無限の何物かゞ總ての事柄を支配すると云ふことを認めて居るのである。併し乍ら其の何物かの全體を全く見た者は無いと云ふて宜しいのである。恰も盲目者が象を探つて、其の尾に觸れた者は象は箒のやうだと云ひ、其の足に觸れた者は之れを桶のやうだと云ふ、所謂群盲象を評すると云ふのと同じ事である。人は其の精神作用の發達程度に依つて、或は火を見て之れが即ち我々の運命我々の善惡の裁判するものであるとして崇め尊ぶ者もある、或は背中に火を負ふて手に繩と劍とを持つて居るやうな物が我々を支配して我々の運命善惡の裁判を爲すものであらうと

し、或は其の絶對の力を佛陀と稱し、此の佛陀なるものが我々を慰安して呉れ我々を救濟して呉れるものである、我々が惡事を爲せば此の佛陀に見はなされて難儀を見る、又例へ惡いことをしても悔いて佛陀の救ひを求むれば、大慈大悲を以てゆるされ善い往生を遂ぐるとして居る者もある。其の他白い象が其の化身であると認め、或は太陽が其の物であると信じて居る者もある。個人々々の思想の如何に依つて異なる所はあるけれども、兎に角他に我々の力以上のものがあつて、我々を支配して居ると云ふことを心に認めない人類は先づ無いのである。

所謂無神論者

世に所謂無神論者であると云ふ者もあるけれども、夫等の人も亦全く無いものとして良心より排斥してゐるとも思はれないのである。能く人が言ふ神に願を懸けて酒を廢したら宜からうと云ふと、何も無い神に誓ふ必要はない、自分で止めやうと思へば何時でも罷められると云ふけれども、自己の裁斷の下卽ち自力によりて罷めたものは、又自己の裁斷の下に飲まうと思へば何時でも飲めるので、何時でも自己が其所に理窟をつ

神明の威嚴

け判斷を下して、其の約を放棄することが出來るのである。一人の約は相互の約束より甚だよわいものである。又左樣に他力を信じないならば果して神佛がないかあるかの驗めしに、或は八幡なり或は明神なりの神前に對して罷めると云ふ事を誓つたならば、宜いではないかと云ふと、それは飽まで拒絶するのである。之れを一方より觀れば、峻拒するだけそれだけ、何處にか神明の威嚴に觸るゝを避くる精神が存在して居るので卽ち神明を認めて居るのであらう。若し夫を認めぬと云ふならば神をないものとして假りにでも誓ふ事が出來ないと云ふことはない。神は無いとする者ならば其の無い者に向つて誓ふたからとて、何等他日迷惑のあるべき筈がないのであるから、誓ひをしてもよささうなものであるが、其所を誓はぬ所を以て見ても、無神論者自らが神明に對して誓ひを立てるを避けるだけ、夫だけ神明の威嚴と云ふものゝ尊いことは知らず識らずの內に、自らが其の威稜に打たれて良心に一つの感象が起つて居るものと云はなければならない。如何なる山村僻邑に行つても其所に神社の

無い所は無い其所に佛閣の無い所はない、夫を見ても決して今日人間の考へ出した僅かなる理化學上の理窟や論理上の理窟、即ち物質的の淺薄なる考へで以て神を無視すると云ふことは出來ない事である。

物質的なる淺薄なる者は曰く、今日如何なる物でも分析して分らぬと云ふことはない、研究して知れぬと云ふことはないと云ふ、夫が即ち人間を以て萬能なるものとする所の誤りである。彼に犬を一疋造れと云ふても夫が出來るや否や決して出來得るものではない。人間の研究して分かると稱する所の事柄は、眞に宇宙の森羅萬象に對しての幾億兆分の一位なものである。何事に向つても其の研究の終局の所に到れば所謂知る可らずと云ふこと議す可らずと云ふこと、詰り不可知不可思議と云ふことに陷るのである。夫を以て見ても世の中の事は今日の人間の淺薄なる力を以て知り得べき事柄ではないのである。眞に總ての物は人がこれを支配するのではなくして、何物かゝ支配して秩序正しく順序正しく、總てが其の時を得て花を開き其の時を得て實を結び、其の時を得て輝き其の

神の配劑は人間の知力によりて分析し得るものにあらず

時を得て運ると云はなければならないのである。此の敬虔の念を起させると云ふことが害があるかと云へば、聊かも害は無いことである、何もこれに向つて排斥を加へ攻擊を加ふべきものではない。

要するに此の世の中の宗教と云ふものは何の爲めに出來て居るかと云へば、道義風教を維持すると同時に人に大いなる安心をさせる爲めに出來て居る者であつて、人をして罪惡を犯させ或は殺し或は盜み或は姦淫せしむる爲めに出來て居るものではないのである。敬虔の念に乏しいものは傲慢にして謙讓の心なく、罪惡を犯し人の大切にする物をも破壞し誠に慘酷なる行爲をも敢てするのである、固より人の人たる道に外れた事をも敢てすると云ふやうな事になるのである。さう云ふ者に向つては神明の加護と云ふことも無ければ人の和合と云ふことも出來ないのである。かゝる人は他の人間が之れに制裁を加へんでも何物かゝ之れに制裁を加へ、所謂天罰と云ふものを受けるのである。さう云ふ者は既に祖先の遺靈と云ふ者に對しては何等の恐れる所が無い者になつて來て、祖先に對

神明の加護と人の和合

して濟ぬと云ふ考へも持たなくなつて來るのである。祖先に對して濟ぬとか祖先を祭るとか云ふことは、目には見えぬが祖先の靈卽ち或る力と云ふ者を認めて居るから爲すのである。其の祖先を旣に認めない者ならば祖先が折角永久的の富を遺しても、それを持續して行くべく之れを尊重しない者と云はなければならないので、矢張り其の家は永久に持續することが出來ないのである。故に此の敬虔の心と云ふものを充分に養ふだけの家憲を設けなければならないのである。神社佛閣の壯嚴なると云ふものは人をして敬虔の念慮を起させる爲めのものである、其の敬虔の念慮と云ふものを起させるのは、卽ち人に安心を與へ道義風敎と云ふものを維持する上に於て非常に利益があるからの事である。

本間家敬虔心の一例

從來名家富豪にして此の祖先崇拜の念慮や、神佛に對する敬虔の念慮の不十分な者は無い、無論多くの場合に於て皆家憲に夫が制定されて居るのである。酒田の本間家が神社佛閣に多大の金圓を寄附するのも、詰り其の家の富が今日まで安全に保たれ子孫が安心して不自由なく此の世を

送り得ると云ふことは、祖先の御蔭御國の御蔭であるが、又此の御國を守護する所の八百萬の神々幷に各菩薩の力に賴らなければならんとして居るのである。近來でも此の精神から或は奥羽の鳥海山、月山、羽黑山等の山々を始め、遠くは伊勢の大神、北野の天神、奈良の春日、攝津の住吉或は京都の本願寺、紀州の高野山、三州の同向院等に、喜捨寄附した所の金額も數十萬圓の多きに達して居ると云ふことである。尙今日まで代々の祖先が寄附建立をした事を擧げ來つたならば、實に數限りの無い程多額に上つて居ると云ふのを以て見ても、其の富を守護して呉れるものは獨り自分等の力のみではない、遙かに天祐と云ふものがあると云ふことを認めて居るのである。洵に人は敬虔の念慮を有してさうして勤勉にしたならば、必ず他の同情と云ふものを得て、其の身が幸福に平和に其の日を送られると云ふことは爭ふ可らざることであります。

忠君愛國の念を養ふこと

三　忠君愛國に關する事　元來家と云ふものは國があつて始めて安全に保護されるのである。國には夫々の法律とか國憲とか云ふものが定め

られて、さうして各家各人を護つて呉れるのである。それで我が日本の國と云ふものは三千年も前に建國されて、現今世界に獨立して居る文明國の中でも、最も古い所の帝國である。雷に古い所の帝國と云ふ許りではなく、此の國家人民を統率し給ふ所の君主は、皇統連綿として建國の始めより今日に至るまで、少しも血統が變つて居らないのである。何れの時代何れの國の歴史を見ても、我が日本の如く建國以來一統連綿たる統治者の下に組織されて居る國家と云ふものは發見することが出來ないのである。其所で我が日本國の文明と云ふものは、皆此の歴史の産出したものであり、又我々の祖先と云ふものが、皆天皇の祖先から分れて臣民となり、さうして天皇に仕へ奉りて來たのであつて、君主と臣民との間柄と云ふものは、眞に親族的關係があると云ふて宜しいのである。即ち現在の五千萬の臣民は、天皇を父とし皇后を母として居る所の一つの大なる家族と云ふても宜しいのである。此の樣な立派な關係を有して居る國は外には無いのである。斯う云ふ關係を有して居るからいざ國難と

臣民の權利

云ふ場合に當つても、我々の祖先は日本魂と名づけらるゝ所の忠勇義烈を以て自らの大家族を生死の巷より救ひだすが爲めに働いて居る。近くは日清戰爭にしても日露戰爭にしても、我々の同胞がどの位世界に此の精神と云ふものを示して居るか、夫を以て見ても日本の建國と臣民との關係は直ぐに判明するのである。君主も亦自分の家を富まし自分の家族に教育を爲すやうに、我々臣民の知識を擴め其の技能を導き道德を進め給ふて俱に御喜び爲されて居るのである。又二十年前に於ては憲法と云ふものを發布されて、特に我々に大いなる權利を與へ給はつたので臣民は一層聖恩に感泣せねばならぬのである。殊に世の富める者が今日安全に其の富を維持し自由に生活をして居ると云ふのは、詰り斯る國斯る君主に依つて統率されるからの事である。であるから國憲を重んじ國法に遵ふは勿論のこと、君の爲め國の爲めと云ふ事になれば、積んである所の資財を散じ分に應じて義を盡さなければならぬのであると云ふことを、充分に子々孫々に知らしめる爲めに、家憲に之れを加へて置かなければ

國家の恩惠と富者

ならないのである。今日の富豪が、或は軍費や海防費の獻金、製艦費の獻納等の事に盡すと云ふものは、皆此の精神から出るのである。又富める者は慥に貧しき者よりも國家の恩惠をより多く受けて居ると云ふ事を深く考へなければならないのである。

勤儉の必要

四 勤儉に關する事　家が段々と富み榮えて來ると云ふと、兎角其の子孫が安逸遊樂に耽けると云ふのが人情の常である。若し之れが安逸遊樂に耽けるやうな事になつたならば、富を作り出した祖先の苦心は直ちに水泡に歸し、巨萬の財産も一朝にして雲散霧消と云ふやうなことになつて仕舞ふのである。

富も亦朝露の如し

小澤蘆菴の歌の如く人の世の富は朝の草葉に置く露の樣なもので、人生朝露の如しと云ふと共に富の光りも亦朝露の如く風が吹けば失せて仕舞ふものである。既に積み重ねた富であれば之れを堅固なる基礎の上に置いて、飽迄も其の富を增殖し祖先の賜はつた所の家道の隆盛を計らなければならぬ、即ち子孫は家業に勤勉でなければならない。

勤務と修業

夫で家憲には是非とも此の勤務時間の事や或は營業修習の事に

衣食住の制限

就いて、充分なる法則を定めなければならないのである。之れは無論積極的の方ではあるが、又一方には極めて儉約を行ふやうに衣服、食物、住居にも大いなる制限を加へて、子孫をして必ず夫を遵奉せしめると云ふやうにしなければならないのである。今日世間で知らるゝ所の酒田の本間家或は安田善次郎、濱口吉右衛門等の富豪家は、孰れも衣服は平日は必ず木綿の着物と定めてある。夫から又自分の住居する所の家の如きも、安田氏は純資産の十分の一を程度とすると云ふやうになつて居る。さう云ふやうな工合で食物は粗菜を食し、衣服は木綿の着物を着し、家屋は質素といふやうに皆制限と云ふものを定めて居るのである。眞に彼等の用意は周到と云はなければならない、家憲には必ず此の勤儉を最も尊ぶと云ふことが定められてあつて、子孫は其の式に依つて行くやうにしなければならないのである。

慈善心の必要

五 慈善心に關する事　慈善心と云ふことは畢竟同情から起ることで眞に善美なるものである。之れは敢て富豪に限つた事ではない、縱令貧

富を分つは富を守るの一策なり

人類平等の意識を養ふべし

しい者でも身分相當の慈善と云ふことをする、特に富豪としては、慈善と云ふことは理窟上から言ふて是非とも爲さなければならないといふのである。彼等が慈善事業に金を投ずると云ふことは、本人にそれだけの慈善心があつて爲と云ふ意味よりも、慈善をせよと云ふ家憲に依つて其の富を貧しき者病める者に分つといふものが多いのである。畢竟他の嫉視をさけて富を安全に保つ策と見てもよいのである。

元來人類と云ふものは平等である、神が此の世に人間を發生せしめた思召は、富も必ず平等に得られ幸福も必ず平等に得らるべく致した者であらうと想はれる、併し漸次其の同類が繁殖すると共に、互に衣食住の生存競爭が行はれ精神上にも身體上にも甲乙が生じ、勤儉なる者遊惰なる者健康なる者不健康なる者怜悧な者遲鈍な者と云ふ懸隔が出來、又天災地變の災厄からして、或る者は非常の不遇に陷ると云ふやうなことも出來て來て、今日の如く貴賤貧富の階級が現出したのであるから、富める者の義務として常に自分等は同胞人類の不幸を救濟すると云ふ心を充分

富の占有と社會組織

に養ふて呉れなければならない。之れは義務として云ふばかりでなく、眞正の同情心を持つといふやうにして貰はなければならぬ。一般人類に向つて慈善心が無くてはならぬと云ふことは當然であるが、生活の困難なる者は其の慈善心が如何にあつても自ら人に施すと云ふ事は出來ないのであるが、富める者は慈善心さへあれば幾らでも施すことは出來るのである。慈善心は一方には同情の念慮を深からしめるやうに仕向けると共に、一方に於ては富める者の義務として遣らせなければならんと云ふ强迫的の教も必要である。元來社會の組織の仕方さへよければ、富と云ふものは今日の如く占有することは出來ないのである。それが占有されてゐるから其所に嫉み怨みの來たると云ふことは當然なことである。夫故に富める者は勞働者や貧民救助の爲めに盡すと云ふことが、其の家の富を維持する上に於て必要なる事となるのである。「彼は一身にのみ榮耀榮華を極めて居つて、さうして人の困難を救はぬ」と云ふ怨みを懷かるれば、卽ち其の富める者の自身の禍になるのであるから、其の點から言ふ

ても充分に此の慈善と云ふことを致さなければならない。即ち酒田の本間家が一ヶ年の利益の四分の一は之れを公益慈善の爲めに費せと云ふ家憲を設けてある如く、必ず其の富の幾分を割いて慈善事業に盡させるやうにしなければならないのである。之れが即ち其の富を維持する上に於て必要なのである。

公益心の必要

富を私する者は亡ぶ

六　公益心に關する事　家憲には又慈善と相併んで國家社會の利益となるべき事に向つては、矢張り相當なる義捐をしなければならないと云ふことを定めるの必要がある。或は學校を建設するとか病院を建設するとか、其の他公益團體に對する所の寄附喜捨と云ふものが、矢張り又自家を保護する所の一つの方法である。如何に自己のみが富んで居つても、如何に自己のみが自己の富を大切に仕やうとしても、一般の社會に對して何等益す所がなければ、其の者は唯其の富を私すると云ふだけにしか過ぎないのであつて、多數者から見れば何等の效能の無い富である。既に公衆一般に何等の裨益を與へない者であるとすれば、此の社會は個

富の破壞分配

人よりも公衆一般即ち國家の利益を先きにすべきものであるからして、場合に依れば其の富をば國民の意思に基いて壓制的に破壞分配しても是れ亦止むを得ぬものである。夫は即ち世の中に謂ふ所の社會黨社會主義なるものは、さう云ふ所から起つて來るのであるが、幸に我が國にはかかる不吉のことなきは洵に喜ぶべきである。夫故に富める者は公益の爲めには充分なる金を投じて、世人を敎育し貧き者を治療し交通の不便なる所には道を開いて交通を付け、農事であれ商業であれ各種の便宜を計れば計る程、其の富者を德とし之れを尊敬して其の富者をば社會が之れを守つて與れて永久的にしてくれるものである。故に家憲には是非とも斯う云ふ事を規定して其の純益の何分は必ず公益に使用せよと云ふやうにしなければならないのである。

敎育の必要

七　敎育に關する事　此の敎育に關することは最も必要なる事であつて、如何に折角立派なる家憲が出來て居つても、澤山なる富を作つて置いても、其の子弟子孫に敎育が完全に行はれて居らなければ、富をして

安田夫人の教育思想

有益に使用する事も出來ず、眞に寶の持腐れとして終らなければならぬのみなすず、遂には折角の家憲も教育の仕方が惡ければ破壞されても亦止むを得ない事が來たるのである。夫であるから其の富を永久に維持しやうと云ふのには、又子孫に道德的教育を施して能く其の家憲を重んじ夫を實行するやうに、家庭に於ても學校に於ても注意して教育して行かなければならぬのである。安田家の夫人が勤儉に勤儉を重ねて、日に若干の貯金を拵へてさうして子弟の教育は自分の任務として、嚴格に子孫に家庭教育を施し、深く奢侈を戒め、子供と雖も祝日祭日の外決して絹布を經はしめず、極く寒い時でも着物は必ず褞袢に袷に羽織と云ふ三枚に限りて、未だ曾て綿入れを被せた事が無いと云ふのでも分る。さう云ふ風にして優柔惰弱の精神を去つて活潑なる勇氣を皷舞すると云ふことは、眞に結構なることである。之れは一般富者に止まらぬことで、どうか全體に社會が惰弱なる子弟を造り出し國家に何等の裨益の無いやうな人間を拵へ出さぬやうにして貰はなければならぬ。殊に安田家で注意し

教育は人物をつくるにあり

知識技能は末なり

本間家の子弟教育法

て居ることは、都會の土地は子弟を教育するに適當でないとして、小學校を卒業した後に清潔醇朴なる地方の中學へ入學をさせる、さうして夫に相當なる監督者を附して遣ると云ふことを聽いても、能く行屆いて居る事と思はれる。之れ畢竟其の家を長く持續せしめる上には斯の如き教育の仕方が最も適して居るのである。殊に夫人は常に子供を戒めて家內に於ては仲を好く氣樂に暮せ、兄は弟を愛み弟は兄を敬はなければならぬ、忌日命日には必ず手向けをしなければならぬと云ふやうな工合に、祖先を崇拜すると云ふこと、夫から兄弟睦じく暮すと云ふこと、質素儉約でなければならぬと云ふことを旨とし、遊惰奢侈の風に流れてはならぬと云ふ風に注意して教育して居るのである。又酒田の本間家に於ては、其の家憲の實行が立派であつて、他に修業に出て居る學生が本一冊欲しいと云ふても現金を與へると云ふ事はない、一々幾多の人の手を經て其の書物を買求めて、更に又之れを小包にして本人の手許へ送ると云ふ事にするので、時とすると品物よりも運賃の方が高い費用を要する事があ

る位にまで嚴重に家憲を實行して、子弟に自由に金錢を費消せしむる事は無いと云ふ事である。又或る人はどうも富と學とが何時も一致しないと云ふことを憂ひて、特に志操堅全なる學者を迎へて自分の家督を相續させたと云ふ事もある。また酒田の本間家では、家庭は何處までも武士的美風に富んで廉恥節操を重んずると云ふ所からして、子弟の教育も文武兩道を磨くと云ふ方針になつて居る、さうして忠孝の道を勵まさせるのである。現在に於ても最も注意の行屆いたものであつて、前主人は態態自分の孫を師範學校に入學させて、卒業の後は之れを酒田の學校へ奉職させ、さうして自分等の子弟も最初は邸内に學舍を設けたが、文部省の學校設立の規則に基いて其の不可なるを知り、學校に通學さして居る、更に又充分に我が子弟に善良なる教訓を與へやうとして、他にも優良なる成績を以て師範學校を卒業した者を、一二名同家一門の内に養子として之れを又酒田の學校の教員にしてあるのである。夫故に酒田の學校は所謂本間家の子弟の教育所であつて、本間家の家憲の充分に實行の出來

家庭の如何は夫人にあり

るやうに教育しつゝあると云ふことである。是等の教員は皆家庭に於ては其の教育顧問となつて居ると云ふことである。

八　婚嫁に關する事　家庭の良否は其の主人の如何にも因るけれども、多くは其の家の夫人の如何に因るものである。家庭が面白くないと云ふと隨つて其の家の衰滅を來たす者である。例へば商人であるとすれば其の家庭の不愉快は常に主人の頭を痛め、夫が爲めに活潑なる商業上の働きが疎略になると云ふのである。嘗て大阪朝日新聞が懸賞を以て、二十世紀日本商人の座右の銘と云ふものを募集したことがある、其の中に當選したものは無論唯一つである、其の一等に當選した座右の銘は十箇條であつて、其の一箇條に「勤儉にして同情に富める良妻の内助を得て、其の樂を俱にせよ圓滿なる家庭は商業家唯一の慰藉である」と斯う云ふ箇條が載つて居る。之れは獨り商人の座右の銘のみではない、世の中に處して働く所の人は何の仕事を爲すに拘らず、此の良妻の内助と云ふことが無ければ働けるものではない。男子は外に向つて活潑なる活働を爲し、

日本商人の座右の銘

常に一家を留守勝に爲すものである、夫が其の一家の內事に付いて憂ふべきことがあつたとしたならば、迚も外部の活働を活潑ならしむることは出來ない眞に恐るべきことである。家庭の如何は婦人の德操に非常なる關係があるのである。夫であるから妻を娶るとしても、其の妻が眞に驕奢に耽ける者であるとか、或は虛榮心が極めて强いとか云ふことがあれば、折角の身代も遂にそれが爲めに貧困に陷ると云ふことが來たるのである。また其の婦人が品行が良くない淫婦であれば、家產を滅らすは勿論、常に夫の頭を傷ましむると云ふことが來たるのである。凡そ家庭の紊亂程苦痛なることは世の中に無いのである。例へば藝人に接近するとか己れに諛ふものを悅ぶとか、遊藝や芝居見物を好むやうな淫靡な妻でも迎へた日には、家庭の面白からざるが爲めに有爲の男子が自暴自棄に爲つて、さうして遊冶放蕩を極めると云ふことが起つたり、或は又苦悶の結果として全く厭世的の念慮を起して家業に熱心しなくなるとか、甚しきに至つては血を流し其の身を喪ふと云ふやうな悲慘なる出來事が

婦人と色魔

起るのである。さう云ふ場合にどうして其の一家の資產が滿足に保つて行かれるわけのものでない。要するに平和なる家庭を造り、質素なる家庭を造ると云ふことが、富を維持する上に於て、又生命を長からしむる上に於て極めて必要なることである。其所で嫁聟の選擇と云ふことが其の結果として起つて來るのである。

緣組は自分よりも資力の低い所と爲すが宜しいのである。富豪なる家庭に生長して驕奢なる者を娶ると、遂には如何なる質素なる家風があつても夫を破滅させて仕舞ふのである。又其の嫁の里が同等以上の富豪であるとすれば、交際上無益な費用に要すると云ふことは免れない事である。夫であるから其の富を維持し家庭を平和にするには富める者から嫁聟を取ると云ふことは宜しくないのである。然らば如何なる所の家から貰ふたならば宜しいかと云へば、縱令ひ貧しくとも能く人間の道を重んずる清潔にして嚴肅なる家庭に生長した者を貰ふが宜しいのである。又遣るにしても同じくさう云ふ家庭に遣ると云ふのでなければ宜しくない。此

嫁聟の選擇法

清潔嚴肅の家庭

善良なる家庭
善良なる遺傳

方より資力が少なく嚴肅なる家庭に生長した所の者を迎へれば男姑の間も自然と能く參るので家庭の風波と云ふやうなことも起らない、夫唱婦從和氣藹々たる家庭が形造られるのである。夫れのみではない善良なる者を其の家に迎へれば、其の子孫の身體上精神上に優秀なる遺傳を貽すものであるから、其の門閥と血統と相幷んで代々不肖なる子供はなく、又虛弱なる子供は無いと云ふことが出來るのである。さうして殊に道德的精神は堅固であるから、家憲を尊重して何所迄も行けるので、即ち萬代不變の家と爲し得るのである。偖て此の嫁聟が一代限りのものであるならば、我慢も出來ますが、之れが遺傳して其の身體精神に非常なる關係を及ぼすと云ふものであるから、此の婚嫁の事程忽にしてならないことは無いのである。之れが正しい家庭に生長し正しい道を敎へられ、健康なる身體でさうして勞作して生長した者であつたならば、必ず身體に於ても精神に於ても立派なる者であるから、其の子孫も自ら立派なる性質と身體とを有するので其所で始めて其の家と云ふものが長く續くと云

家族制度と嫁聟との關係

ふのである。如何に巨萬の財寶がありまして家憲を立派に作つて置いても、其所の家に生れる所の子供が虛弱であつて皆夭死するとか、或は貰ひ受けたる所の嫁聟が贅澤であり淫亂であり不規律であるとか云ふやうなことであるならば、決して其の家は永く續くものではなく、遂には其の家が斷絕して仕舞ふと云ふやうな不幸に陷らなければならぬのである。此所で一言致して置くことは此の嫁聟と云ふことである。日本は元來家族制度の國でありまして、嫁を迎へ聟を迎へると云ふことは單に妻せると云ふ所の息子や娘の爲めにのみ迎へるものではない、西洋では家族制度と云ふことは無いのであるから、嫁聟を迎へると云ふことは全く當人同志の爲めであるが、日本では家の爲めに迎へると云ふのと當人の爲めに迎へると云ふのとが、何れも同等の力を有して居るのである。又一代限りの家であれば妻は其の夫にさへ仕へれば夫で宜しいと云ふのであるが、今此の富を永く維持して即ち一家を永く維持して行かうと云ふ上には、先づ其の家の爲めに盡す所の嫁を迎へ聟をとるといふのである。近

女子に對する教育思想の變遷

來歐米の風が益〻日本に這入つて來て、夫が爲めに女子の教育思想にも非常なる變化を與へ、女子自身の思想界にも人に嫁するのは其の人に嫁するのであつて、其の家に嫁するものでは無いかの如く考へる者が增加して來たのである。これは眞に日本の國情に反したるものである。元來日本は家族制度の發達して來たもので、其所に即ち言ふに言はれない善美なる點があるから、其の家族制度を何處迄も維持して行くでなければならない、隨つて人に嫁すると云ふ事は、其の夫に嫁すると同時に其の家に嫁するのであると云ふことを頭にあきらかに置かなければならないのである。又それが最も責任ある大いなる意味ある結婚となるのである。若し夫に嫁するとしたならば夫が亡くなれば其の妻たる者は如何に身の振り方をつけやうとも自由である。或は其の家を去つて他に婚嫁しやうとも、或は其の財產を自分が隨意に費消しやうとも宜しいと云ふ譯になるのである、併し日本の家族制度に於てはさう云ふやうな心驕けの者は、固より歡迎する所ではなく立派に排斥して居るのである。既に女子と云

日本の家の維持者

ふことを第十章に於て述べた際にも、日本の女子の尊ひのは犧牲の念の發達して居ることであると云ふ位で、其の家の爲めには我が身を犧牲として顧みぬと云ふことが日本の女子の眞に立派なる所である。貞操の如きも、能く舅姑に仕へると云ふ如き義、其の家に一度嫁しては再び其所の敷居を跨いで出ないと云ふ即ち貞女兩夫に見えずと云ふ教へも、單に夫を思ひ慕ふの念から言ふのみではない、其の家と云ふものを維持して行く上に必要な所から起つて居るのである。其の家と云ふものには老祖父母もあれば兩親もあり子供もあると云ふのが日本の家である、西洋のやうに夫婦を主としてゐるのとは大いに違ふのである。夫故に女子は夫が亡くなつても、まだ〻其の家と云ふものに對しては大いなる責任があるので、老父母をも養はなければならぬ子供も育てなければならぬと云ふ程の責任がある、故に之れを娶る者も家に娶ると云ふ考へがあるので、嫁に行く者も亦其の家に嫁ぐと云ふことを考へなければならないのである。西洋には結婚と云ふことはあるが嫁に行くと云ふことや聟をと

西洋には嫁聟少なし

るといふことは滅多にない。夫は何から來たるかと云ふと家族制度で無いからの事である。然るに日本に於ては家族制度と云ふ事があるので、新たに家を持つと云ふ者は先づ少ない方である。今日では餘程西洋の主義が這入つて來ては居るけれども、それでも次代は矢張家族をつくるのであるから、之れと結婚する所の婦人は常に嫁すると云ふ考を持つて居らなければならないのである。夫が卽ち日本の善美なる所であつて、日本の國家も夫に依つて安全に維持されるのである。それ故此の婚嫁に關しては、前申したやうな意味に依つて家憲と云ふものを作らなければならぬ。斯う云ふ意味に因つて出來たる家憲であつたならば、其の子孫は必ず永久的のものである、必ず親に恥ぢざる所の善良なるものであると看てよいのである。

長幼の序を正しくすべし

九 長幼の序に關する事　家庭に風波の起ると云ふ事は我欲であるとか、又は他人が這入つて和合せぬとかいふ二ッである。其の風波が他人が這入つた爲めと云ふやうな場合であつたならば、必ず婚嫁の事を疎略

禮儀正しければ一家は平和なり

に致したものである。それ以外に於て起る風波と云ふものは、互に長幼の序を正しく致さないからである。親子の間に於ても夫婦の間に於ても又親族近親の間に於ても、其の序を正しくすると云ふことが最も大切なることであり、また必要なることである。坐席に於ては勿論正しくなければならぬ、朝夕の禮に於ても必ず其の順序を正しくすると云ふやうにして行き、上下の區別と云ふものは最も嚴重に秩序が立つて居ければならぬのである。さう云ふ風であれば兄弟の爭ひも起らず夫婦の爭ひも起らず、又主從の關係に於て親戚關係に於ても常に立派にあつて、さうして其の家庭と云ふものは圓滿になつて行くから、其の爭ひ風波の生ずべき餘地が無いと云ふことになるのである。本家分家のあるやうな場合に於ては、分家は本家に對する所の禮と云ふものを確乎と定めて居つて、其の序を決して紊さないと云ふやうに致さなければならない。夫で家憲に於て是非ともさう云ふやうに長幼の序に關する權利義務や禮儀作法のことに付て叮嚀なる敎へが無ければならぬの

其の一例

である。酒田の本間家の家憲の第十條にも其の事が規定されてある。即ち家庭の靜肅は長幼の序を嚴にするに在り決して紊ることあるべからずと云ふてある。其所で本間家に於ては來客があつて若主人が之れに應接をして居る時に其の親が其の部屋に這入つて來ると云ふと、若主人は直ちに坐を立ち其の親御さんに席を進めて恭く禮をして自分は其の席を下がる、又其の親御さんの老親が夫に參れば同一なる禮儀をなして引き下がると云ふことである。其の他親疎近遠の別に因つて必ず次の室に順次に坐席を定めて端坐すると云ふ事である。配膳のことに至つても御客に接する禮でも、皆其の場合は下から上に對することは家來が君に對する禮と同樣なる禮を用ひると云ふ事である。之れは東京に於ても老舗と云はれる所の見世に行つて見ると、其の家庭に於ては長老の序と云ふものと誠に正しいのである。小僧が番頭に接する所又一番々頭から二番三番と云ふものゝ間の總ての禮儀と云ふものは眞に嚴肅なるものである。是等の者が主人に對して爲す所は實に臣民が君主に對するよりも尙嚴格な

投機事業の禁止

る所があるのである。之れが正しくないと相互に不義不正なる結託抔と云ふことが起り、遂に男子が女子に狎れ女子が男子に狎れると云ふやうな、一家の紊亂も來たるのである。總て男女、長幼、父子、夫婦、兄弟、親戚其の他の禮儀秩序と云ふものを正しく守ると云ふやうにするのが、即ち其の一家を永く維持し得る所の一つの原則であると云はなければならない。

十　投機事業に關する事　今日の富豪の中にも隨分此の投機に因つて一代の富を造り出した人もある。酒田の本間家に於ても先代の或る者は盛に江戸大阪に出て、米相場を遣つて巨利を得たと云ふことである、現在東京に於ても幾多の富豪は株の賣買抔は隨分盛に遣つて居るけれども、投機のこと程危險なることは無いのである。一文無しの者が投機を遣るのは之れに賴つて一攫千金の富を作らうと云ふのであるから、極めて冒險的であるが幸に其の富が得られたならば愉快此の上もないことであつて、得られない所が元の木阿彌であるから一向差支はないが、既に造り

上げた所の富を有して居つて投機の業に手を出したならば、或る時は一握千金の愉快も得られるであらうが、又或時には今日まで先祖が辛苦して貯蓄した所の資産を皆種無しにしなければならぬと云ふことが來たるのである。夫故に富豪の家憲を見ると何處のにも投機事業に手を出してはならないと云ふことが必ず書いてある。即ち何處の家憲に於ても此の投機事業に手を出すことは嚴禁せなければならぬのである。一方から言ふと父が投機事業に手を出して金を儲けた者が、子孫に投機に手を出すなと云ふ事を言ふのは矛盾のやうに想はれるけれども決してさうではない、其の父が其の富を造る前に於ては無一文の人間であつたのである、其の造り上げた富を維持するが爲めに投機に手を出したのではない、既に造り上げたものは之れを永く維持して行きさへすればよいので何にもそのやうな危險を冒かす必要はないのであるから、此の規定は家憲中には必ず置かなければならぬものである。

十一　財政に關する事　此の財政に關する事に就ては色々の方法があ

會計を嚴にすべし

家の爲めに主人の自由を束縛すべし

りまして、或は同家一族の合資的組織もありまするし又全く君主專制と云ふべきやうに主人が自由に資産の出納を爲すことが出來ると云ふのもあるのである。合資であるとすれば勢ひ其の一家同族の者が協議の上でなければ一文の金も左右することが出來ないのである、一家の主人が自由に我が財産を動かす權利があるとて夫を動かし得るやうな仕組みになると云ふと、其の主人の人と爲り如何に因つて隨分危險なる事に其の資本を投じ若くは資産を費消すると云ふ樣な事が來たるのである。夫故に富を永く維持しやうと云ふには其の財産を濫りに誰も使はれないやうな方法を立てなければならないのである。之れは今日安田家の家憲を見ても澁澤家の家憲を見ても、又三井家などの家憲を見ても瞭然たることであつて、皆勝手に費消することの出來ない組織になつて居る。本間家の家憲の如きは全く立憲政體であつて、丁度本家の主人は君主の如く各分家の主人は大臣又は議員と云ふやうな關係を有して居る。其所で銘々の財産は皆自分勝手に分家と雖も使用することは出來ないので、同族會議

處理を一人に任すべからず

の決議を經ずしては一文も之れを使用することが出來ないやうな仕組みになつて居る。其所で其の同族等はどう云ふ工合に爲つて居るかと云ふと、皆本間家に出て夫々の役目と云ふものを持つて居る。さうして日々本間家に出勤して居ると云ふことである。此の組織は最も良い組織で、出來得るならば各一家の相談役と云ふものは一ヶ年の其の家の諸經費の豫算と云ふものを立てゝ、さうして其の豫算以外に於ては一文も支出の出來ないと云ふ方法にし、又夫等の者は皆一つの事務所に集まつて業務を執り、夫等の人々の賢愚若くは教育の如何に依つて各事務を分掌させて遣ると云ふやうにしたならば、誰人も自由勝手に使用すると云ふことは出來ないやうになる。本間家の如きは一個の倉庫にも數個の錠前が附してあつて、必要な場合に倉庫を開くとしても、主人が第一の鍵を開けば一番々頭が第二の鍵を開くと云ふやうな工合に、數人立會の上でなければ一つの倉庫を開き金庫を開くと云ふことの出來ない組織になつて居るのである。夫で是等の多數の家々に於て何か必要なる物が要ると云ふ

利益の處分法

ことが起ると云ふと、必ず其の事務所の許可を經て爲さなければならない、其所で事務所に於ては是等の者に金錢で渡すと云ふことは無いので、總て之れを買つて品物で渡すと云ふ組織になつて居ると云ふことである。さうして一ヶ年の收得を四分して一は之れを生活上の費用に充て、一は貯蓄すると云ふやうな工合に皆限度が正しく立つて居つて、一錢と雖も餘分の支出を爲したりすることは出來ないやうな組織に爲つて居るのである。之れは最も良い事であらうと思はれる。

家憲の運用實施法

十二　家憲の實施法　以上述べ來つた所のものは約十一ヶ條である、卽ち家憲には是れだけの事柄が具はつて居なければならぬと云ふ事を述べたのであつて、之れを實施する所の方法に至つては、更に巨細なる細則と云ふものがなければならぬのである。總て其の實施方法は極めて簡短に言ふて見れば萬機公論に決すると云ふ主義で、同族會議若くは一家全部の相談でなければ何事をも決することが出來ない、其所で其の最後

の裁決者を以て主人とすると云ふことである。本書に於ては固より其の紙數に限りがあり詳細に亙つたことは茲には述べないが、要するに富を造り出した者は何人も其の一家を永く持續しやうと云ふ觀念が無ければならぬ、又小なる財産でも其の財産の處分は一人で勝手に爲すことの出來ないやうにすれば、自ら其の家は其の習慣に依つて漸次に膨脹して行く者である。身代が僅かであると云ふても夫が爲めに家憲の必要の無いと思ふのは間違である。如何なる僅かなる財産でも其の財産に對して又其の家庭の總ての仕來りと云ふものを定める上に於ても、家憲は極めて必要なるものであるから、宜しく一家を組織したならば必ず其の家の習慣紀律と云ふものを規定して置くがよいのである。

第十九章　吉凶に關する作法

世の中に立つて行けるのは常に他人の同情同意と云ふものが我々を助け

同情の缺之

て呉れるからのことで、この同情といふことは一刻も忘れてはならない事柄である。兎角世人は此の同情卽ち思遣りと云ふことに缺けて居るのである。夫には色々の原因もあることであらう、自己の生存競爭の爲めに仕事をしてゆく上に必要な許りではなく、普通同一人類として持たねばならぬ天則があるのである。夫で又此の思ひ遣りと云ふものは、單から來る者も隨分あることゝ思はれる。此の思ひ遣りと云ふものは、單卽ち生活難の爲めから來たることが先づ第一であらうが、中には性質上びに對しても無論表はさなければならぬ事であるが、人の不幸に對しては尙一層强い同情を持たなければならぬのである。吾々が世に立つて居る永い間にはどのやうな不幸に遭遇せんとも計られぬ、のみならず吾々が今日滿足して居るにも拘はらず、世に其の滿足を得る事の出來ない不幸なものは實に多いのである。天は其の初め人間に對しては同一なる幸福を得られるやうにして呉れたものであらう、されば一人が幸福で他の一人が不幸であるとすれば、其の幸福なる者は最初の造物者の思召に

吉凶に對する同情の厚薄

依つて不幸なる者に分ち、不幸なる者を助け、不幸なる者に向つて慰めなければならぬものだらうと思ふ。然るに如何なる所以であるか、幸福なる面白い事芽出度い事に向つては、人は大層賑やかに御祭り騒ぎをするが、不幸なる事に向つては案外に其の同情が行屆いて居らぬのである。御祭り騒ぎも國民の元氣を引き立てるに必要であるから宜からうけれども、どうかその費用の一半をそいで不幸なるものに多大の同情をよせるといふやうに致したいと思ふ。

今茲には社交的年賀の作法を述べると共に特に會葬のことにも一言いたして置かうと思ふ。年始と云ふと古來よりの習慣として、人は盛に自らも祝ひ他も亦回禮に廻つたり懇意な者は會食會飲などもするのである。平日顔も出さぬ所へも年に一度の顔を出すと云ふので出掛ける、之れが果して慶賀の意味を有して居るのであらうか、又單に平日御無沙汰をして居るから此の休みを利用して無意味なるものに意味を附けて顔を出すといふ社交的公式であるか、夫等も甚だ分らぬ話である。しかし年始と

東京に於ける年賀の作法

云ふ場合に於ては日本全國孰れも皆回禮と云ふものを爲すやうな事に何時の世からかの習慣になつて居るのである。

東京に於ても年始の回禮と云ふことのあるのは當然であらう、併し此の東京の年始の回禮抔の有樣は、昔と現今とは大變に變つて來て居る。勿論宮中に御慶を申上げる儀式作法に於ては今も尙變らぬのでありまするが、先づ社會の上中流を通じて今日では頗る妙なものになつて居る、第一に中流以上から先づ相當なる紳士と云はれる家々には、玄關に名刺盆と云ふ物が出て居る、御名刺受と書いて之れに札を下げてさうして名刺を受取つて居るのである。唯玄關に夫がある許りで屏風を立て若くは障子を閉めて何人も其所には居ない、夫で面識ある人、交際ある人は名刺を持つて行つて其所に置いて歸つて來るのである。實に妙な作法であるが併し東京其の他の大都會に於ける現在の年賀と云ふものは斯樣なものである。從つて回禮する所の人も、印半天を着て居らうとも、或は烏打帽子を被つて居らうとも、又は車夫人足を代理に出しても、小僧を代理

地方に於ける年賀の習慣

に出しても一向差支ないと云ふやうな有樣になつて居る。要するにこちらの名刺を向ふの名刺盆へ一枚載せて來さへすれば夫で年賀と云ふものは濟んで居るのである、之れは都會と地方とは確に違つて居る事であらうと思ふ。地方に於ては新年と云ふものは、眞に芽出度い祝祭中の最も芽出度いものとして、此の時に當つては貧富を問はず身分相當なる酒肴を用意して年賀の客を待つと云ふのが例である。又年賀の人も其の意味を承知して出掛けて行くのである。眞逆に酒の振舞を受けやうと云ふ譯ではあるまいけれども、顏を赤くして此の三ヶ日を歩き廻らなければならぬと云ふことが殆ど禮の如くに考へて居られ、醉つてゐなければ何だか正月の芽出度さが發表出來ないと云ふやうな工合に、見る人も亦見られる人も醉はぬければ耻かしい、醉つて居れば立派であると云ふやうな工合に成り來つて居るのである。東京にはさう云ふ事は先づないと云ふて宜しい。前に言ふ通りに玄關には、唯名刺盆に名刺があると云ふだけのものである。眞に御粗末千萬の話であるが、併し之れは世の中が複雜

家庭の娯樂日

になり生存競爭が盛になればなる程斯くならなければならぬのである。決して東京の人が人情に於て輕薄であるからと云ふ譯ではない又東京の人が決して地方人種よりも儉約であるからと云ふ譯でもない、生活上斯くせねばならない理由があるからどうしても斯うなつて來るのである。其所で東京の新年と云ふものは、如何に解釋したら宜しいか。三ヶ日と云ふものは地方に於ては互に相賀し相慶し相親むべき日であるが、東京に於ては表面は社交的意味であるが內實はさうでない、勿論餅も搗いて居る、屠蘇も買つて居る夫々の料理も拵へて居るのであるが、知人朋友誰れにも年賀に來たからといつて御馳走するといふ譯ではない。夫で先づ今の所で之れを解釋すれば正月と云ふものは、正月といふても三ヶ日であるが之れは主として家庭の娯樂日であると解釋しなければならぬのである。改年は生活上の一寸の段落であつて此の時が家庭の娯樂日であると斯う看たならば差支なからうと思ふ。勿論親類は互に面會して慶び合ふ事もあらうが、概して言へば東京の人は田舍の人のやうに近所に親

類のあると云ふ者は少ないのである。既に新年を以て内實之れを家庭の娯樂日であるとした以上は、年賀の客は強いて其の家庭に迄進入して家庭の娯樂を妨げると云ふことは宜しくないと云はなければならないことになる。これは尤も生活階級の如何にも依ることであつて、町人官吏下層の裏店或は華族等皆夫々多少の違ひはある、正しく禮服を着た玄關番が居て名刺を受けて主人に代つて禮をして居るのは多くは立派なる紳士か華族である。主人が自から出たり家族が自ら出て御芽出度の交換をして居るのは先づ何にも構はぬ勞働社會や裏長屋に多いのである。概して東京に於ける紳士幷に中流以上にあつては新年は全く家族の娯樂日と看て宜しいのである。然らば回禮を爲す者も亦其の心得を以てせなければならぬのである。如何にも殺風景のやうであるが其の心得を以て回禮しないと云ふと、東京に於ける今日の習慣に反するやうな事が來るのである、折角年賀の好意も夫が爲めに失敗するやうな事が能くあるのである。地方出の人は義理堅い爲めか、年始に廻る玄關に名刺盆が出て居るにも

賀客の心得

拘らず、御主人は御在宅かと云ふて尋ねる人が往々ある。之れ誠に至當な事である、年賀を申上ぐるには直接に主人に面會して申上くべきもので至極尤もな話であるけれども、前にも述べた如く直接面會すれば禮として屠蘇も小皿盛も出さねばならぬ、それが一人か二人ですめばよいがさうは行かぬ、隨て經濟上その樣なことは許さぬ。卽ち止むを得ず社交上は禮のみに止めねばならぬところから名刺盆に代理を仰せ付けるのである。夫故に今日では御主人は御在宅かと云ふて尋ねると云ふと居る居らぬに拘らず、唯今は出て居りましてとか云ふて酒的交際を避けるのである、之れは獨り主人が避けるのみならず家族のものが、お正月だけもゆる〳〵と仕度いといふて氣支なものは通さぬやうにするのである。隨つて御主人は御在宅かと云へば、女中小僧に至る迄彼の人は年始に來て御主人の居るか居らぬかを尋ねて居ると云ふて笑ふ位のものである、是れが卽ち自然家庭の娯樂日と認めなければならぬ所であらう。其所で始めて東京に來た人は實に不愉快を感ずる、「怪しからぬ話である、

生活難と振舞

田舍出の賀客

「年始に行つたのに居りさうだが面會をしないと云ふて不愉快を感ずるが、之れは所謂東京に慣れない卽ち東京學を知らぬ者と云はなければならないのである。之れに對して不愉快を感ずるといふは今日の東京生活を味はないからのことである。又夫を以て東京人を輕薄であるとか尊大である抔と思ふのは矢張り間違ひである。元來が古來からの習慣として年賀は互に非出度いものとして賀客が來れば一杯の屠蘇を振舞ふと云ふ事は殆ど習慣になつて居つたのであるが、之れは生活に餘裕ありし時代とか又餘裕ある人々のすることで、幾ら禮だからとて餘裕がなければ出來る筈のものでない、今日の東京に於ては其の生活難の爲めに左樣な事は殆ど出來ないのである。一杯の水すらも價を拂はずには得られない處で、縱令多少の餘裕ある生活をなし居る人でも來る人毎に三杯は愚か一杯宛の屠蘇を振舞ふと云ふことは容易に出來得べきことでない、自然振舞ひが出來ない所からして、唯名刺を受けるやうな略式なる方法に、退化したと云ふて宜しいか、或は進化したと云ふて宜しいか、まあさう云ふ風

名刺交換會

になつて來たのである。其所を察しなければならぬのである。

近來は地方に於ても同じ事である、追々に物價が騰貴して嗜好品卽ち酒畑草などの價の非常に高くなつたばかりか日常なくて適はぬ鹽まで非常に高くなつた位で、却々以て來る客毎に伊丹樽を拔いて馳走する抔と云ふ事は殆ど無くなつたやうである、從前の地方に在つては、先づ新年であると云へば大鮪の一本位は臺所につり下げて伊丹樽を飾り込んで、來る客毎に立派に馳走をして歸したものであるが、當時は地方と雖もさう云ふことは出來ない。其所で平日常に往來して居る者、或は營業上に於ける同業者としての交際、若くは同職者としての交際も、名刺交換會と云ふものに依つて同慶を濟される、田舍ならば寺に集り或は堂に集つて年賀の儀式を爲すと云ふ事が近頃益〻多くなつて來たのである。東京に於ても或は名刺交換會若くは極めて親密なる者で財政上左程苦しからぬ人たちは新年宴會と云ふものを開いてそこで濟ますといふやうになつたのである。

年賀は對等以上に向つての禮なり

又此の賀禮と云ふものはどうであるかと云ふと、下から上に爲すべきものであつて相對的の方は餘り重きを置かぬ、常に世話になつて居る人に御禮にまゐるので、歳暮の禮と同じやうな工合である、其の點から申せば特に酒饌を賜はると云ふやうな事は之れは特別の場合である。先づ名刺受けを置いて名刺を受けると云ふ事だけで成程至當の事であるやうにも思はれる。そこで自己にとりて取持ちおかなければ他日に不利益であると思ふ人をば、日を定めて招いて馳走をするのである。其の他に於ては殆んど無い、之れも段々考へて見ると、今日では眞に實利主義で、詰り利益から打算されたものになつて仕舞ふたのである。御互に參圓五圓と出し合つて飲む所の新年宴會は別として、矢張り招待して宴會を開くとか何とか云ふことは、平日何等か其の者が自己に取りて利益のある交際をされたからであると云ふやうな工合になつて來たのである。茲に皮肉な可笑しい事は、例へば下に使はれて居る者が上役の所へ年始に行く、さうすると上役は大變に取持つ場合がある、けれども幾十人の屬僚に何

實利主義の馳走

學生の無頓着

人にも酒を出して取り持つと云ふことは出來ない、自分が直接に監督して居る所の人間に向つて特に日を定めて招んで馳走をすると云ふ事である。之れも我が身が可愛いからのことである、即ち恩をきせるやうなわけのものである。又學生が三ケ日の内に能く先生方の所へ年始に廻はる、之れは最も善い事であるが、先生方と雖も之れに一々此方へ御上りと云ふて屠蘇を出し雑煮を出して御馳走する譯には行かぬが、其の内の重もなる者に向つては、或る必要上馳走もせねばならぬと云ふことがある。學生も亦之れを深く考へなければならぬ、學生の身に取ると云ふと年始に行つて御馳走になるとあの先生は良い先生であるとて實に愉快がるけれども、校長や教頭は御馳走は餘り致さない、多くは地位の卑い所の教員が、學生の歡心を買ふが爲めにすると云ふ、一種の利益的から來るやうな馳走があるのである。學生の語るところを聞けば、或る教師の所へ行つたら、唯名刺盆が出て居つただけで面會もしない失敬だなどと言ふが、夫は無理と云ふものである、一々來る人毎に面會し切れるものでも

なく又自分にもそれ〴〵他に盡さねばならぬ義理もあつて面會出來ぬ場合もあるが普通である。然るに或る教師の所へ行つた所が大變に御馳走になつたが、或る教師の所へ行つたら面會もしないと云ふて不平を言ふ者があるが、人に御馳走になつたならば必ず夫だけの報酬と云ふものをしなければならぬ、御馳走をする教師は多くは獨身者、所謂未だ家庭を造つて東京生活の困難を知らない下宿屋住居か、左もなければ何等か學生の歡心を買ふて己れの野心を遂うしやうとする人であるのである。

實業界の安息日

要するに新年は先づ家庭の娯樂日である、一家の者共が打揃ふて愉快に遊ぶと云ふ日と看て宜からう、東京人士は平日皆多忙で却々一家揃ふて愉快に遊ぶと云ふことは出來ない、官吏若くは教員會社員等の如き日曜抔と云ふ特別なる休暇を與へられた人はいざ知らず、其の他の業務に從事する者は、打ち寄つて一家團欒の樂みと云ふ事を爲す遑が少ないのである。それが三ヶ日と云へば金融機關の銀行も會社も取引先きも總て休む、それで三ヶ日だけ伸び伸びとして家に樂しむことが出來る、これが

新入京青年に對する警告

實業社會の狀態である、夫故に此の日に於ては、極めて近い親戚等でなければ往復しないでも一向差支ないのみならず成るべく氣樂に一家團欒をゆるして貰はねばならぬのである。それを平日さしたる往來もせぬものが此の三ヶ日の間に主人に面會を求めやうと云ふことはチト無理かと思はれる。

それから田舍出の人に一言して置きたい事は、年賀に行けば必ず馳走のあるものであると云ふ感じを有して東京に這入つて居るから困る、それは田舍の極めて悠長なる生活をして居る土地でこそ行はれる事であつて、東京では夫は出來ない事であるから左樣の考へを持つて東京の知人に接してはならぬ。自分も曾てさう思つた事がある、田舍から來た時に田舍で同校に居つた先生が東京に赴任された、此の人は田舍に居つたときは正月四日には學生教師誰れにも行けば御馳走をするのであるから、今日は先生の所へ出懸けて行つて一杯の屠蘇にありつかうと思ふて出掛けて行くと、豈圖らんや名刺盆が出て居る、唯名刺を置いて歸るのも殘念で

あるから、大聲一喝「頼む」とやつつけた、すると書生が不思議な顔をして遣つて來た「先生御在宅か」と尋ねると、暫く躊躇して居たが頓て何處かへ出懸けたやうですと答へられた。其の時には餘り良い心持はしなかつたが、今日より考へて見れば、自分が慥に東京學を知らないで斯う云ふ失態を致したのであつて、少しも先方に對して不愉快を感ずべきものではないことが判つた。

夫からもう一ッは、地方では御正月の夜分には何れの家でも歌留多など取つて盛に賑やかして遊ぶものである、夫故に顔を知つて居る人ならば何所の家庭へでも飛込んで、歌留多取りの仲間になつて遊ぶことが出來る、そこで東京でも矢張り人の家庭に飛び込んで歌留多取りの仲間になつて遊ばうと云ふ考へを持つて居る者がある。之れが抑も間違ひである。或る東北の田舍にては其の習慣がある、何等か土地の祭禮若くは御正月等には先づ一寸知つて居る家なれば何所の家へ行つても愉快に若き男女混交で樂むと云ふ野蠻な習慣の所がある、それ程でなくても地方中流下

流の家庭は取締りがゆるやかであるが普通なる所から其の習慣を以て東京でも良い家庭に割り込むことが出來ると思ふであらうが、東京紳士の秩序の立つた正しい家庭に、一介の書生流義で飛び入らうとしても夫は許すものではない。況や一月早々夜分に年始でござ候と云ふて酔歩蹣跚として遣つて來るなどと云ふことは其の主人公と平日兄弟以上の交際あるものはいざ知らず、普通に於ては無禮千萬なことで、今日東京紳士の間に於ては、左樣な作法と云ふものは全くないのであるから注意しなければならぬことである。

無禮なる賀客

凶事に對する心得

余はまた茲に凶事につきて、聊か注意すべきことをも序でに一言して置かうと思ふ。人は死ぬほど詰らぬことはないのである、死なぬ前こそは彼れ是れと人にも珍重されるが、偖て死と云ふことになつて來ると、殆ど總ての知人朋友も顧みて呉れると云ふことはないのである。それで眞に知己であるとか朋友であると云ふても、此處に至ると頼みにならないものである。それは畢竟世の中の多くの知己朋友と云ふものは、元來が

何等かの利益問題の方面からの知己朋友であつて、眞の知人とか友人とか稱するものは百中の一も無いのである、しかしながら同情と云ふことは不幸と云ふことに伴ふものであつて、芽出度い時に御祝ひに出ると云ふことよりも、先づ人の不幸に對して多大なる同情を持つと云ふことが極めて必要である。又これは文明人の道德であらうと思ふのである。しかるに此の不幸と云ふものになると、其所に親切に大いなる同情を持つものは先づ親戚くらゐのもので、其の他は普通一遍其の葬式に會葬すると云ふにとゞまるのである。固より家事向のことは家族親族のもの以外に分るわけのものでないから、家庭にまで立ち入りて世話するは家人全體の信用あつきものでなければ、手だしは出來ぬが當然である、そこで些かの香奠を贈り葬儀に連らなるので之れが東京一般の習慣である。香奠の多寡は平素交際により身分により異なると雖も中流社會にありては近隣知己は一圓以上五圓以下が普通の處である。田舍に於ては、地方によりもよるが、普通葬列に加はるは親戚の者のみなるも、東京に於ては死者

香奠に關する事

隣保に對する作法

香奠と引越蕎麥

に同情を表する爲めに知己朋友は何れも葬列に加はるので、之れは眞に結構なる事ではあるが、併し此の見送ると云ふことに就ても唯義理一片の見送りと云ふ傾きがあつて、充分なる同情を寄せて見送りをすると云ふ人は、何所の葬式を見ても甚だ少ないのである、中には柩の背後に在つて笑ひさゞめきつゝ送るもあれば、或は烟草を燻らし又は禮服も着けないと云ふやうな、隨分不作法なことがあるものである。是等は人に對して非常に不快を感ぜしむると云ふ事と、又眞に充分なる同情を表はして居らぬと云ふ事となるので、自然自己が社會に對する信用程度にも關係するものであるから、宜しく左樣な場合に於ては相當なる禮を守ると云ふことに仕度いのである。夫から更に又其の死歿した方に香奠を手向けると云ふ事がある、之れは東京に於ては向ふ三軒兩隣と云ふものは普通に香奠の遣り取りと云ふものはあるのである。然るに近來山の手邊では若手の學者や官吏はそんな事は平氣であつて、香奠どころか隣りに引越して來ても引越蕎麥も配らず顏も出さぬと云ふ始末である隨分世の中

が輕薄になつた。之れは將來の交際を感ぜぬ借家時代の人の常であらう。夫から友人として又事を共にしたとか又は其の人の生前に世話になつた事があるとすれば必ず香奠と云ふものを送らねばならぬのである。其所には又香奠返しと云ふて相當なる禮も先方に於て盡すのである。例へば身分に應じて或は菓子を配るとか、或は銘茶饅頭を配るとか云ふやうなことは相當にするのである。偖て斯う云ふ不幸の場合に於て悔みに行く時でも、普通には先づ强いて其の家の主人であるとか主婦であるとか云ふものに、面會を求めると云ふことは餘りないのである。極く特別なる熟懇なる間柄に於ては座敷に通つて死者の顏を拜すると云ふことは隨分あることである。宜しく其の交りの親疎に因て其所は考へなければならぬ、之れは詰り其の交際が家庭に迄及ぼして居る時に爲すことであつて、單に主人のみとの交際の場合抔には、普通客間に通され若くは死者の顏を拜すると云ふ樣なことは無いのである。最も先方が死者の友人で而も其の地位名望の高い人であれば、特に强いても座敷へ通すと云ふことは

あるが左も無い場合に於ては先づ近親の者だけで事を濟ますと云ふのが普通になつて居る。要するに人の家に不幸のあつた場合には、其の家人に不快を與へないやうに、充分なる同情を表すると云ふことが一番肝心であらうと思ふ。序でながら言ふて置くが、東京では永住して居ると云ふ者は至つて少ないから、中には自分の寺と云ふ寺の無い者も澤山ある、さう云ふ所で死者が出來たならば如何にするかと云ふと、夫は先づ大概は生前に於ける所の信仰に基いて寺を探し、何れへか行つて談判をしなければならぬのである。葬式にも幾らの葬式と云ふて大概價と云ふものが幾通りにも定まつて居る、夫に依て僧侶の數も多い場合もあれば少ない場合もある。夫から總ての事を葬儀社に任せると云ふこともあるのである、併し斯う云ふことは茲に精しく述べる必要は無からうと思ふ。

第二十章　醫者と患者

患者と醫師

精神上の醫師は牧師僧侶なり

尙序いでに患者と醫師との關係を一言述べて置きたい。

東京生活は最も困難であると共に醫者に見て貰ふと云ふことは却々容易なことではないのである。東京には名醫は澤山あるけれども、偖て此の名醫に診察をして貰ふ抔と云ふことは、多大なる金を要することであつて、立派な名醫があると云ふて見た所で、夫は生存競爭の優勝者のみに結構なばかりで一般の市民に對しては名醫も甚だ益に立たないのである。元來昔は醫者と云ふものは仁術であるとしたものであつて、精神上に於て宗教家が一ッの救濟者であると同じやうに、肉體上に於ては醫者は一ッの救濟主である。精神上の救濟主は現今と雖も定まつたる報酬を求むるのではない、眞に人を厄難の地より救ひ出し、人に安心を與へやうと云ふ、結構なる所謂宗教家の思想を有して人を救ふて呉れるのであるが、

身體上の牧師は醫師なり

昔の醫は仁術なり

今の醫は技師なり

現今の醫者はさうではない、人の患ひ悲しみに對して、眞に多大の同情を濺いで之れが治療救濟を圖ると云ふ意味は殆んど無いのである。若しあるとすれば醫者は宗教家と共に我々は常に上位に置かなければならぬ所の大恩人であるから醫者に對しては四季折々訪問をしなければならぬ、交際も繼續して行かなければならぬ譯のものであるが、今日の醫者と云ふ者は田舍は別として、東京では醫師を恩人として見ることは出來ないのである、恰も醫者は一つの職人と同樣に看做して差支ないのである。屋根が破れたから屋根屋に修繕を賴む、或は一個の器物を造らせる、固より職人は其の職に忠實にして何人でも人より善く造り完全に仕上げて遣らうと云ふ心はあると同じことで醫者も矢張り其の點は忠實であるに相違ない、詰り一個の技術である之れを旨く修繕しやう旨く造り上げやう旨く直さうと云ふことは患者に對する義務としてゞはなくして自分の技術に對する忠義の心として居るのである。夫であればこそ東京に於ては醫者に診察して貰ふて疾病が全治したと云ふても、其の醫者に生涯の

恩報しの手段を爲すと云ふやうなことはないのである、勿論醫者の方でも夫に對して直ちに診察料とか手術料とか藥價と云ふものを徴收するのである。而も單に人の身體の鑑定のみをするのでも多大なる診察料と云ふものを要するのである、東京の大多數の人は或る疾病に罹つて、良い醫者に診察して貰ひたいと思ふても、其の生活上の經濟が、其の良い醫者に診察して貰ふことを許さないのである。又一ッの治療を受けるとすれば其の手術料も實に或る場合に於ては眼の玉の飛び出る程要求されるのである。之れは眞に東京生活に於て優者とならんければ、善良なる醫者に診察して貰ふことが出來ない、夫で醫者は東京に於ては一ッの仁者ではない患者が醫者を以て恩人と目することはないのである、詰り器物の修繕を賴み製作を依賴するのと同じやうに價がきちんと定まつて居るのである。故に二百萬の市民には特に此の慈惠病院抔と云ふものが十も二十も必要なるものである。世の富豪家にはどうか慈善の爲めに無料で中以下の市民が助かるやうな病院をどし〳〵造つて貰ひたいものである。

良醫あるも其の甲斐なし

都會には無料病院の必要多大なり

主治醫を要す

主治醫に對する務

幸に大學病院と云ふものがあつて、診察料と云ふものを徴せずして治療の實費を受けて患者を扱つて呉れるから是れだけは眞に結構な事と思はれるのである。

以上の如く申したからといつて我々は醫師の好意を忘れるものではない。人は何時如何なることで醫師の厄介になるかも知れぬものであるから其の居住地の醫師には得意を定めて疾病あらば必ず其の醫師にかゝるといふやうにして中元歳暮の禮をかゝぬやうにせなければならない。之れが主治醫である一般の醫師に對しては前項に述ぶるが如きものであるが、自家の主治醫と定めたものには恩人に對すると同樣に吉凶必ず禮をつくすと云ふことを忘れてはならないのである。

第二十一章　學校の內情

學校は教育の目的を達するに必要なる場所である建物である、といふ迄

學校の目的

のことならば、敢て此に掲げる必要はないが、學校といふは單に建物を云ふのではなく教師も生徒も設備も何にもかも含めて云ふのである。即ち教育の目的を達する手段の全體を云ふのである。其所で教育の目的は何であるかといへば、人として又國家の一人として申分なき人間を造り出すのが目的であるから、學校に於ても亦其の目的に離れないだけのことをせなければならないのである。そこで國家の一人としての人間と云ふのは其の人間が飯を食つて行く爲めの知識技能のみを言ふのではない、國家の成立幷にその社會の共同生活に必要なる所の一ッの鑄型に當篏つた人間でなければならぬのである。即ち道德的生活を爲して其の國家社會を維持して行くに適ふた所の人間を造ると云ふことが主たる目的なのである。本來知識技藝のみを授けるものならば、之れは特に國家の事業として文部省が其の教科教材に製裁を加へる必要も無く、又修身科の教授に重きを置くべき必要もないので、詰り學校は一ッの技術傳習所知識傳習所として事足るのである。併し今日の制度に於て學校と云ふ以上は、

國家の一人としての教育

求知心

如何なる種類のものでも其の國民の一人を造ると云ふ精神を離れることは出來ないのである。それであるから學校と云ふ以上は善美なるものであり善良なるものであつて、聊も惡からう筈は無いのである。然るに國家の成立上必要であるからと云つても、國民全體の求知心を滿たす程の設備をすると云ふ事は、到底國家の經濟が許さないのである。若しも全體の求知心を滿足させやうとする設備をなさうとしたならば、夫れは非常な費用を要するのみならず、國民全體は己れに左程の必要なきに多大の負擔を負はせられるので、到底國家の事業とすべきものでないのである。夫れで國家は普通教育以外には先づ此の位な人間が此の本旨に基いて教育されて行けば、國家の發達維持に差支ないと云ふ所の標準を立て又費用の點も此の位は國民の負擔として差支ないと云ふ程度を計つて、公立の學校と云ふものを置いてあるのである。然るに却々其の設備では個人としての各人の向學心を滿足させると云ふことが出來ない、そこで政府は其の定めたる學則に基いて私立の學校を設立することを許してあ

學校設立の目的

るのである。此の私立學校も固より教育といふことには公立の學校と異なる所はないけれども、其の成立の目的に至つては大いに違つて居るのである。眞に教育の善良事業なることを信じ、此の民を救ふて善良ならしめんが爲めに、學校を立てると云ふならば至極善美なることであるけれども、世の中には夫れ程の人は滅多に無いのである。宗教學校の如きものは其の點に近いのであるが、之れとても孰れかと云ふと人を其の一國の國民として善良ならしめやうと云ふのではないので、多くは宗教教義に一致したる所の人を造らうと云ふことが主となるのであるが、併し何れも眞面目に教育するが主であるといふことは確かである。夫で私に學校を設立すると云ふは其の主義を擴める爲め、即ち乾兒を作るが爲めとか、或は利益を圖るが爲めとか云ふことの二つに歸着するものであらう。福澤氏の慶應義塾の如きものは福澤先生の主義に依つて行つたものである、或は其の他の宗教上の學校とか獨逸協會學校の如きものであるとか、成瀬氏の女子大學の如きものであるとか云ふは、其の一ッであら

主義の爲めの學校

營利的の學校

うと思はれる。夫から又大隈伯が嘗て早稲田に專門學校を設立された如きは今日は兎も角も其の最初に於ては政治上の自分の味方又は乾兒を作ると云ふ事が主であつたかとも思はれる。其の乾兒を作るとか或は主義の爲めであるとか云ふやうな學校は何れかと云へば立派なものである。是等は教育を目的に設立されて居るのであるが、概して言へば世の中は名を善美なる目的に籍りて、自分の利益を圖ると云ふのが普通である、學校を設立するものにも、世の向學者の多きを見込んで一儲せんと計るものが多いのである。例へば一ヶ月に二圓宛の月謝で、四百人の生徒があれば八百圓の收入が得られる、其所で教員の給料を一人平均三十圓として、九人を雇ふものとすれば二百七十圓を要する、之れに事務員小使其の他の諸給與が百圓、家屋幷に學校としての設備の損料が先づ百二十圓と看て、支出合計が四百九十圓、之れを收入より差引けば一ヶ月三百十圓と云ふ利益が擧がるのである、それが若し生徒が五百人來たとすれば、收入が千圓となつて利益が四百圓も擧がる。斯う云ふ計算から成立

つた學校が多いのである。其所で又教育と云ふ事業でも仕やうと云ふ者は、就れかと云へば固より教育上の趣味を有した者であるが、多くは學者若くは教育者の上りであるから金の無いと云ふことは分り切つて居ることである。夫等の者が學校を設立するには寄附金を募つて夫でやるか又は借金をして夫で起すかの二途である。寄附金を募ると云ふことは、其の學校の設立者若くは學校の今日迄の經歷に於て、充分に世人の信用を得て居るものでなければ出來ないのである。例へば早稲田大學の如き慶應義塾の如き女子大學の如き、多大の金圓を募集して夫で立つてゆく、此の外多年の歷史により相當の維持の出來てゐる立派なものも二三はある。是等の學校は眞に主義によつて是非今日斯う云ふ教育をしなければならぬと云ふ確信の下に成立つて居るとか、又は特別專門の學科を教へるので、世人も亦能く認めて居るのであるが、其の他營利的の學校は、何人かゞ金主にならなければ設立が出來ないのが普通である。其所で其の金主と云ふのは高利貸であるとか、又は內々自分の富を利殖しやうと

私立學校の概數

云ふ金滿家が金を出して居るのである。

現今東京に私立として立つてゐる各種學校幷に中學校は二百五十校ばかり、其の外に三百以上の小學と五十以上の幼稚園とがある。其の中で眞に安全なる學校と云ふ者は指を折る程しか無いのである。他の多くの學校は所謂學校屋とも云ふべき商賣である、借金をして立てゝ學生を食ひ物にして居るのである。隨つて其の學校の利益の大部分はどうなつて仕舞のかと云ふと、高利貸や其の金持の所得になるとか、又既に學校か銀行に擔保に爲つて居つて其の授業料の大部分は皆銀行の利子として仕拂はなければならぬ抔と云ふ所もあるのである。其所で前に述べたやうに目論見通りに旨く行けば宜しいが旨く行かなかつた時には、遂に其の學校は負債の爲め非常の困難を爲さなければならぬと云ふことに陷るのである。又夫等の學校の教師はどんな者であるかと云ふと、先づ切賣教師とか潛り教師とか云ふ者が多いと云ふ事である。切賣教師と云ふのはどんなものであるかと云ふと、私立學校は設立上の資本が概して不充分で

切賣教師
潛り教師

あり、或は又借りた金であると云ふことから、公立學校のやうに一人の教員に向つて多大の俸給を支出して行くことは出來ない、一人位はさうも出來るが先づ學校と名が附けば夫々專門の教師を雇はなければならぬから、數人に充分なる俸給を與へると云ふことは出來ないので、自然僅かなる俸給で雇ふと云ふことになる。然るに僅かなる俸給では其の教師が生活が出來ないから其所で終日其の學校に勤めて居る抔と云ふことは出來ないのである。或る時間だけ其の學校に行き他の時間は他の學校へ行つて教へると云ふ譯で、甲の學校から十圓乙の學校から十五圓と云ふやうな工合に働くのである、ひどい切賣先生になると三校も四校も駈け廻はると云ふことを聽いて居る、夫から又自然高い給料を出すことは出來ないので、學力の淺薄な教師や潛りの教師を使用すると云ふことである、潛りの教師と云ふのはどう云ふものであるかと云へば、例へば相當の免許狀を持たぬ者であるとか、又は相當の學識は有して居つても不德な事をして公立學校の奉職が出來なくて表立つて教育者として立つこと

教師と內職

教授の不品行

が出來ないと云ふやうな人を安い給料で賴むと云ふのもある、又教師の名前だけは隨分相當な名が書き列ねてあるが、其の實は只名許りで以て其の人は出勤して居らぬ抔と云ふこともある、或は又半ヶ年も一ヶ年も前に既に去つて地方へ行つたとか、又は他の業務に轉じたとか云ふ者の名前までも書き列ねてあるのがある、かくの如く表面上如何にも立派なる教員の顏揃へであるが、其の內實に立ち入りて見ると出勤しない者さで名を列ねて居ると云ふやうなことがあるといふは商賣敵の同じ私立學校の連中が言ひ合ふて居る。それからそれ等教師の品行の如きも固より人の師表たる所の價値の無い者が澤山であると云ふことである。或る教師は教師が內職であつて相場が本職である抔と云ふ者もあるし、又或る者は金貸が本職であつて教師は片手間であると云ふやうな者もあり或は妾を持つてゐるといふのもあると云ふが如きに至つては驚かざるを得ない、現今はそんなものもなからうが當局者は須らく注意すべきであらうと思ふ。併し乍ら官立學校ですら教師と生徒とが相携へて待合ばいりを

するといふ噂さへある今日であるから、私立學校の教師の不始末位は止むを得んことであらう。其所で生徒はどうであるかと聽くと、私立學校と雖も公立學校と雖も別に變りはないのであるが、如何にせん今日の學生の多數者の總てを公立學校に收容すると云ふことは出來ないので、競爭試驗と云ふものを行ふ、其の競爭試驗の結果として公立學校へ這入れない多大の者が私立の學校に流れ込むのである。固より生徒の頭腦に於ては公立學校の生徒に劣るものでは無からうけれども、其の教ふる教師幷に其の設備の完全でないと云ふことが遺憾ながら公私の優劣を生ずるといふことになるのである。併し特別認可學校と稱する文部省の認可の學校は私立學校中に於ても良い學校であり、從つて生徒も先づ訓練がよいのであるが、如何にせん學校商賣と云ふ營利的の方面を離れることは矢張り出來ないので、一人も多く月謝を納める者のあらんことを望む所から、生徒中には徴兵遁れに其の學校に籍のみを置いてさうして毎月々謝を仕拂つて居ると云ふ者が多數あると云ふことは新聞紙抔にも屢〻見

公私學校生徒の優劣

徴兵遁れと私立學校

える、又成績不良の者でも墮落せるものでも構はず收容して月謝の收入を多からしめるといふ事は免れないのである。斯う云ふやうな工合であるから概して云へば教育上の成績に於ては完全であり滿足であると云ふことは遺憾ながら認めることが出來ないのである。併し乍ら今日では高等文官たらんとするには、官立學校を出たものも私立學校を出たものも甲乙なく、孰れも競爭試驗の結果に依つて採ると云ふことになつたので、私立も官立も同じ地位にあるから、私立學校だから必ずわるいとか官立學校だからよいとか斷定することは出來ない、唯比較的に夫等卒業生が若し官立學校の同數の卒業生と共に試驗を受けたならば、夫は官立學校の方が及第者が多からうと云ふことは誰れも否認する力はなからうと思ふ。翻つて官立學校はどう云ふ工合であるかと云ふと、之れは道理上良くなければならぬ譯であるけれども、亦弊害のないわけではない。其の設備が良いとか教師が位勲官等を有して居るとか云ふやうな所で、自然に生徒も夫を鼻に掛けて威張ると云ふ傾きがある、其所で他日夫々の道

學閥の弊

に使はれる時に於ても、私立學校の卒業生は蹴落されて官立學校の卒業生が得意の地位に立つと云ふ一種の學閥を免るゝことが出來ないのである。即ち出身學校の關係に依つて立身の上に、餘程の幸不幸があると云ふことは免れない、之れは何人も弊害を認めて居るのであるが、如何しても今日此の學閥を除き去るといふことは出來ないのである。夫と云ふものは社會に於ける私立學校の信用といふものがまだそれ程高まつて居らぬのと、官立學校の卒業生が有り餘る程になつて居ないからであらうと想はれる。此の學閥と云ふことは又同じ官立學校の間にもあることで、例へば帝國大學の卒業生對高等師範學校の卒業生とか、高等商業學校の卒業生であるとか外國語學校の出身であるとか云ふ差別によつて、夫々、又其の學閥があるので互に相排擠して居るのである。元來是等の學校は其の目的を異にして居るのであるが、夫にも拘らず何學士と云へば其の專門學科の如何を問はず教育家としても實業家としても豪い者の如くに世人が思ふ所から、自然に高商出身者や高師出身者の間に隔壁が出來る

階級制度と曲學阿世

と云ふことは免れないのである。畢竟高等商業學校で同校の同窓會が同校を大學たらしめやうとて、非常に熱心に奔走して、或は之れが爲め校長排斥運動或は全校退學などの騒ぎを惹起したと云ふのも、其の源は皆此の學閥の爲めであると云はなければならない。高商卒業生が常に何學士と云ふ肩書に壓倒されることを非常に憤慨して居る所から、高商を改めて大學としたいと云ふのである、是等は畢竟するに需用者たる民間の人士が何にも構はず、學士の肩書あるものを豪いと見る傾きがあるからであらうと思はれる。

それから又官立學校の教授中には、曲學阿世の譏りを受けるものがある。之れは慥かにあらうと思ふ、又あるべきやうに仕向けられて居る、畢竟國家が位階勳爵を授けて、豪いものであり國家に功勞あるものであると認める所以は、彼の輩が我が國今日の制度を謳歌讃美して如何にも眞理らしく說き、今日の國家の制度を維持尊重すべき人間を造り出す點にあるのである。元來學問は不羈獨立飽くまで眞理に追隨すべきものである

人格劣等の學者

ことは、彼等學者の常に口にする所であるが、其の實野心ある或る輩は口と心とは大ひに異なり居るのである、今日の如く位階勳爵を授ける制度のある以上は、人情の常として口には立派なことを言ひながら、心には學問よりも何よりも、此の制度が與へる所の名利を羨ふて、互に其の地位を失はざらんことを是れつとめるが普通である、そのなかには人格の甚だ劣等な如才のない學者があつて、どこまでも偏に位階の高きを衒はんとして、心にもなき曲學阿世的の說をなして恬として恥ぢざる手合がある、又或るものは他の學者を排擠して後輩進前の途を塞ぎ、己れ獨り永く其の講座を獨占しやうと計り、又博士の學位の如きも之れを己れに諛ふ門下に與ふることをつとめて賞揚措かず、他の方面の出身者にして博學卓見なるものあるも、却つて難癖をつけて之れを與ふるを吝むなどの誘りを受くるといふは、今日の制度に於ては到底除くことの出來ぬものと思はれる。

教育の必要なる二方面

國家より觀たる教育

第二十二章　男女學生の狀況

教育の必要と云ふことは其の一ッは國家と云ふ上から觀るのであつて、國家の生存上から教育と云ふものが必要なのである。夫は其の國家を維持する上に他の國家と競爭をしなければならないからである。何所までも他の國の文明に後れないやうにして往かねばならぬといふ、優勝劣敗の世の中であるから、其の結果として劣者は何時滅亡に歸するか測られない、それ故に何所までも自國の國民を善良ならしめ、强壯ならしめ、惻發ならしめると云ふ必要があるのである。尙又他國と云ふものが無いにしても、國家と云ふものを形ち造つた以上は、其の國特色の道德風俗習慣等がある、卽ち國柄と云ふものがあるのである。其の國柄を變更させないで漸々進步させて行くと云ふ必要から言へば、教育は國家事業として當然國家が定めた所を本にして行かなければならないのである。自

個人の上より觀たる教育

由勝手なものを造り出すと、其の爲めに國家の秩序が紊れる其の國體に不適當なる人間が出來て來ると云ふことになるのである。又一ッには個人の上からも教育と云ふものは必要なのである。

人は夫々教育さるべき天賦の能力があるが、此の能力は教育に依らなければ善良なる發達を遂げることは出來ないのである、夫れ故に其の天賦の働きを發達せしむると云ふ上から言ふても教育は極めて必要なのである。發達すべき天賦の能力がある以上は、何所までも之れを發揮し活動せしめると云ふのが、當然であり天則であると看なければならない。斯の如く國家と云ふ上からも亦個人と云ふ上からも、教育が必要であるから學校を設立して教育を行ふのである。そこで國家の必要と云ふ上から言へば、普通教育以外に於ては、或る必要なる人數だけを教育して行ければ宜しい譯であるけれども、人類の上から言へば孰れの人間をも十分に教育すべきものといはなければならぬが、國家が學校を設け教育をすると云ふのは普通教育以外に於ては、國家の必要上と經費の程度とにより

教育の力は偉大なり

限られて居るのである。併し乍ら世の中が段々と教育されたものが多くなり文明になるに隨つて、其の教育の範圍も亦廣くなり國家が設備する所の事業も年々歳々に擴張して行つて、多くの人材を養成すると云ふことになると、學生の數と云ふものも亦隨つて年々歳々に多きを加へなければならぬのである。元來國民が教育の力の偉大なるものであることを認めるやうになつて、盛んに其の子女を教育することになると其の國は富み且つ強くなるのである。曾てオートルローに於てナポレオンを破つたウエリントン公が、自分の母校たるイートン校を見て、今度の戰爭に勝つたのは、此の學校の運動場であると言はれたやうに、總ての富强は教育から生み出されるので、一般の人が教育と云ふものに重きを置くやうにならなければ其の國は强くならぬのである。併しながらそこには教育の必要を深く認めぬものもあるが、其の風潮にかられて我も我もと高等の教育を受けやうと爭ふ樣になる。勿論個人として教育すべきものであり教育されべき天賦の性能を有して居る以上は、自ら進んで其の身を教

風潮に驅られし教育

育し其の子を教育すると云ふことは何等の妨げの無いことであるが、風潮といふものは恐ろしいものであつて深く其の必要を感じないものまでも唯風潮に乘じて高等の教育を受けるとか、受けさせるとかいふ樣になる、從つて女子は普通教育があつて其の他家政とか技藝とかが出來さへすれば充分であると云ふ論者のあるに拘らず、女子の高等教育も必要であると稱して女子大學が興り、又其所に學ぶ者が多數に出來るのである。國家は今日の所では是れだけの學校を置けば充分であると認めるにも拘はらず、其の風潮に乘じて我も々々と高等の教育を受ける者のある爲めに、各種の私立學校と云ふものが興り、其所に學ぶ所の者が多數にあるのである。

今日の學生の多數は教育其のものが自身に大切であると云ふ其の根本上の考へよりも、甲の人が高等の教育を受けて立派なる地位に登り大いなる富を作つたから我も是非彼の人に及びたいとか、又甲の家では東京へ修業に出したから、我が家でも修業に出さなければ氣が濟まぬといふや

在京の學生

うな工合に、人眞似をして學問をさせると云ふやうなものもある、詰り虛榮の念から學問をすると云ふのが多いのである。そこで東京に於ける中學幷に其の以上の學生の數といふものは頗る多大なもので男子の學生に於ては六萬を以て數へ女子の學生に於ては二萬近くを以て數へる程に上つてゐる、卽ち男女の學生約七萬何千の大多數が此の東京に集つて居るのである。尤も此の數の中には東京市民の子女もあるが、大多數は地方のものである。

さて是れ等の學生が皆望む所の目的を達して、榮位顯爵を得るとか富を得るとか言ふた日には、遂には誰も衣食を供給し居宅を供給する爲めに働く者が無くなつて來ると云ふやうな結果を來さなければならない。然るに教育制度を施行して以來幾萬の學生が、年々續いて東京に上るけれども、其の割合に自分の思ふ目的を達して成功したと云ふ者は少いのである。其の多くは或は放蕩墮落に陷り、或は半途家計上の都合にて歸國をすると云ふやうなことで、先づ其の中の成功者と云ふものは眞に寥々

たるものと云はなければならないのである。是れ等の學生は孰れも其の郷里を離れる時には、男兒立志出郷關學若不成死不還埋骨豈期墳墓地人間到處有青山てふ立派な意氣を有して出たものである、親も亦其の爲めに汗水を流して働いて、我が子に學資を送ると云ふやうな譯合ひである、が、さて上京した學生の多くは初めの内こそ殊勝なれ、遂に都會の惡風に感染して滿足なる結果を齎すものゝ少ないのは、今日現に日々の新聞紙上に現はるゝ現象を觀ても分ることである。

學生の身體狀態

元來學生時代の身體狀態と云ふものは如何なるものであるかと云ふと、最も血氣の旺なるもので、從つて最も冒險的なる希望が充滿して居る、夫れと同時に青春の情慾も亦充滿して居る者であるから、其の爲めについ色情に溺れるとか遊惰に流れるとか、又既に墮落した者の誘惑に依つて、其の仲間入りをすると云ふものが澤山出來て來るのである。夫れから又此の學生時代に於ける精神狀態は如何なるものであるかと云へば、

學生の精神狀態

知力判斷の單純なるため思慮分別と云ふものは淺薄なものである。彼等

は極めて得がたい所の虛榮を夢みて居り、又近くは情緒的の五慾を滿足させやうと計つて居る、從つて肉體を支配する道德的克己の健全なる働きのあるものは稀れであると云はねばならぬ。未だ充分なる社會の空氣に觸れない爲めに、即ち經驗閲歷を積まない爲めに、今まで小學校や家庭に於て敎へられた道德的敎訓は甚だ薄弱なるものとなつて、兎角自然の情慾を滿足させやうといふ傾きに陷るのである。二十歲前後の學生は身體の狀態から言ふても精神の狀態から言ふても、花の爛漫たる如き時代で、又最も危險なる時代と云はなければならない。此の間に於ては最も嚴重なる監督者とか保護者とかを要するのである。夫故に學校には寄宿舍を設け舍監を置き、彼れ等の晝夜の行動を監督するやうなことになつて居るのである。併しながら之れは官公立學校に於てこそ行はるべきことであつて、私立の營利的の學校に於てはさう云ふ完全なる組織を取つて行くことは出來ない。そこで學校外に於ける總ての行爲の監督は、之れを其の保證人たる父兄若くは親戚若くは單に緣故に依つて保證人と

監督の必要

私立學校の學生

なつた人に打ち任せると云ふことになるのである。然るに幾萬の學生は完全なる教育者の監督を受くると云ふのでなく、多くは無監督の下に東京に留學して居るのである。夫れが爲めに夜分も自由に外出が出來、如何なる誘惑の巷にも出入することが出來、一方には又彼れ等青春の血の迸つて居る者を誘ふ所の各種の機關、即ち彼等學生の情慾を滿足させる所の誘惑機關なるものが備つて居て、是れが爲め何時しか學生の品行を亂らすといふことになるのである。縱令相當なる公立の學校に居らぬ者でも、家庭の教育は充分に行屆いて居り、本人の思想の健全なる者は能く其の四面誘惑の巷に立つて、夫れに迷はず惑はされずして勤勉する者も亦決して少くないが、孰れかと云へば日本の教育制度が施行されて以來日尚ほ淺しと云ふのであるから、學生の父兄に充分の教育が無く、從つて家庭教育も不完全であり道德教育も不充分であるので、唯本人は人眞似に虛榮心に驅られて修業せんとし、父兄も亦人眞似に上京せしめて空想なる虛榮を夢み樂みとして居る、其所で夫れ等の子弟は何時か此の

無監督と誘惑機關

無教育なる父兄

都會の惡風に感染して仕舞ふて、懶け者となり或は酒色に其の身を溺らせて墮落者となるのである。

さて學生が墮落の抑もの初めはといへば、皆先輩たる惡友の誘惑に因るのである、今まで田舍で見たこともない面白い物や綺麗な物、旨い物を味はされて、それからそれと遂に益ふ其の深みに陷るのである。さうなると今まで父兄から仕送られた所の學資では不充分であるから、或は斯う云ふ書物を買はなければならぬとか、今度學校で鎌倉へ遠足にゆくからとか、又是れ々々の準備をしなければならぬ抔と父兄を騙してさうして金を取り寄せる、又下宿にしても漸く立派な所へ移り十圓ですむべき下宿料は十五圓かゝるといふ口實で取りよせる、夫れは決して其の金で書物を買ふ譯でもなく何等の準備をする譯でもなく、徒らに之れを酒食や遊覽の爲めに費して仕舞ふと云ふのである。飜つて夫れ等の父兄を見れば、俺が今度東京の何學校に入學して却つて鄕里の縣立學校よりも一級上の所に昇つたので、今度は澤山本が要ると云ふので金を送つたと云

父兄を欺く方法

ふて人に誇り語つて得々として居る。さて其の父兄はと云はゞ、先づ中産の農家であつたならば、日々汗水を流して自ら勞働して得たる所の、僅かなる米を賣つて倅の詐りの遊蕩の資本に澆いで滿足して居るのである、眞に憫むべきものと云はなければならない。我々は屢〻三等汽車の中や或は地方へ旅行した時に、知らぬ父兄から大層な御自慢話を聽くことがある、其の談話を仔細に分析して考へて見ると、その子は確かに遊冶放蕩に身を持ち崩して、種々の口實を構へて父兄を繰つて居るなと云ふことが判る事がある、そんな時に東京の墮落書生の狀態や內幕を話して悟らせやうと思ふても、既に迷はされて居るのであるから彼等は空嘯いてゐるといふ淺ましい者である。彼等は我が子が其の土地の縣立學校に入學が出來ぬで、東京に來て私立中學の第二學年に入學したとなれば非常な滿足と喜びを有して居るのである、之れが卽ち親馬鹿と言ふべきものであらう。縣立の學校や官立の學校に於ては、尤も其の人間の實力と云ふものに重きを置く、實力の劣つて居るものは競爭試驗に於て決して

欺かれた父兄

入學は出來得ないのである、併し私立學校の多くは營利的のものであるから、或る範圍までは本人の望む所の學級に入學せしむるものである、假りに試驗をするとしても夫れ等は殆ど形式に止つて居る、何故さうであるかと云ふに、多く生徒を收容しなければ多くの月謝が得られない、卽ち營利の目的に反して居るからである。縣立の學校や官立の學校は營利が目的ではない實際の敎育が目的であるから出來ない者は入れない、縱令志願者が二百名あつても及第する者が八十名しか無ければ夫だけしか採らないのである、併し私立の學校は飽までも多く採る、瘋癲白癡にあらざる限り、又餘りに隔りのある履歷でない限りは何時でも入學させるのである、夫が學校商賣屋の普通と云ふて宜しい、尤も私立學校と雖も相當なる基本金を有し相當なる信用を博した學校では餘り無法なことはせないものであるが、それ等は僅かに其の一、二に過ぎないと云ふて宜しいのである。それを如何にも立派なやうに褒める所の父兄は眞に情ないものである、淺はかなものであると言はなければならぬ。併し彼等

不完全なる學校

が本來の目的と云ふものは、教育の必要を認めて我が子を完全に教育しやうと云ふのではなく、只同じ村の何の誰の倅が彼の學校に行つたから、自分の倅はもつと良い所まで遣らうと云ふ一個の虚榮的競爭からくるので、名義さへ良ければ夫れで宜しいと云ふやうな工合に陷るのである。彼等は遂に己れの淺薄な考への爲めに、其の子も亦確なる教訓を受けて居らぬが爲めに、遂に墮落して仕舞つて他日取り返しの出來ない苦勞を造り、我が子の爲めに涙を流さなければならぬやうなことに陷るのである。今日では其の割合も頗る少なくなつたであらうけれども、今より十年以前に於ては地方到る所皆さういふ狀態であつたのである。そこで學生は東京に在つて各種の誘惑に出逢ふて墮落する、それは一ッは遺傳にも因るであらうが、東京は田舍とは違ひ誘惑機關の設備が充分であるのと惡友がいくらもあるからである。

學生と飲食店

次ぎには飲食店と學生の關係である。此の學生と飲食店の關係と云ふものにも二通りある、學生が團體交際の爲め若くは己れが衛生上の爲めに

飲食店の種類

友人等と晩餐を飲食店で爲すと云ふのは、孰れかと云へば牛飲馬食で食物さへ澤山あれば夫れで滿足をして歸るのである、先づさう云ふ間は學生も確かなものであるけれども、既に墮落に傾いた學生が飲食店に這入るのは、飲食其の物で滿足するのではない、酒を用ひて己れの心を放神せしめ、己れの心を狂はしめると同時に、眉目の麗はしい女の子と戯むるゝと云ふことを樂みとして行くのである、之れは既に墮落學生と云ふて宜しいのである。又墮落と云ふ程でなくとも勿論品行の良い學生と云ふことは言はれない、さう云ふのが漸次に習慣となつて遂に眞正の墮落に陷るものである。夫れで飲食店にも二通りある、單に牛飲馬食に適するやうに旨い物を食はせる飲食店と、夫れから若い女でも置いて學生を迷はせると云ふことを以て目的とする者とある。牛屋にしても入り込みの廣間で飲食の滿足を與へるを主とする所があり、或は小さな間を幾つも造つて、婦人を澤山つかつて遊樂をさせると云ふものとある、鳥屋にしても西洋料理にしても皆さう云ふ風に男子のボーイを使つてゐる飲食

墮落學生と飲食店

店あり、女子のボーイを使つて居る飲食店あり、男子のボーイを使つてゐる所若くは入り込みの所に行く學生は、先づ間違ひない健全な思想を有して居る學生と看て宜しいのである、夫れ等の學生の目的は飲食に在り衛生的滋養を得ると云ふことにあるのである。

婦女子即ち若い女抔を澤山に使つて居る飲食店へ出入りする學生は、思想は極めて不健全なる者である、酒色の情慾に迷ひ易く女を相手に遊ぶことを樂みとするものであつて、既に墮落して居るのみならず他日大いに墮落すべき學生が重もにさう云ふ飲食店に出入するのである。夫れ等の飲食店に遊ぶ學生は、例へば大學の學生にしても、一二回は必ず落第するものと看て間違ひない、其の他放蕩なる各種の學生が、或は自分は何々大學の學生であるとか、自分の家は富裕であるとかいふて、婦女子を喜ばせて巫山けはして遊ぶのである。單に飲食をすると云ふ家に行く學生は、牛飲馬食しても速く其の場所を切り上げて歸るが、婦女子を多く置いて遊樂せしむる飲食店に出入する者は、牛飲馬食はしない成る

べく餘計な飲食はせないで長い時間を消費し、婦女子を相手に騷いで行かうと云ふものである、從つて店の收入は比較的少くして長い時間を獨りの御客に費されると云ふことになるのである。夫れ故若い女學生上りの者抔を置いてある店だからとて必ずしも繁昌し、入り込みだから男ボーイだからとて繁昌しないとか云ふやうなことは決して言はれない、勿論飲食店は其の場所にもよりけりであるけれども、先づ正しく遣つて居る飲食店の方が、却て繁昌をしてゆくと云ふことになるのである。

以上は主として男子の學生に就いて述べたが、女子の學生に就いても矢張り同樣である、最も嚴格なる監督を要すべきものは女子である。所が前申す通り、無知なる父兄が我が子を榮耀榮華に過ごさせやうとして、東京へよこす位ゐのものは、多くは適當なる教育ある親戚も無し、立派なる監督者も無い者である、又家庭の教育抔も不完全であつて女子に適當なる道德思想の鼓吹も不十分であるから、東京に來ると間もなく男學生に弄ばれて、さうして墮落の淵に陷るのである。此の墮落した所の女學

女學生の墮落

生は、甲の學校を退校させられゝば乙の學校に轉ずる、乙から丙と云ふやうに各所の學校を廻り廻つて歩くのである。男學生も墮落者は勿論さうであるが、先づ女子の學生で嚴格な學校に長く居ることの出來ないものは多くはもう墮落したものである。是亦父兄が充分に注意しなければならないことである。我が娘が今度は何處の學校へ轉じて何年級に這入つたと云ふ報告を聽いて喜んで居るやうな父兄は、實に慨嘆すべきである。殊に女子は虚榮心の強いものであるから、容姿を麗はしくし其の衣服を美にするが爲めに、色々の名義の下に親に送金をせまる、私のやうに惡い服裝をして居るものは無いとか、今度は皆が御揃ひで斯う云ふのを着るとか云ふて金を取り寄せる、夫れは勿論酒食の料に使ふ譯ではないが、虚榮心が益ゝ高まつて來て己れの身の風體髪容を飾ることにのみ骨を折ると云ふことになり、それから諸處物見高い所に出入りするやうになつて小遣も多分にかゝる、父兄は夫れも知らずして、言ふが儘に送金すると云ふ情ない惘れなものである。其の果ては如何になるか常に男

墮落の結果

子に弄ばれ、遂には名も知れぬ者の胤を宿すなど、其の身を自滅させねばならぬやうな境遇に陷り、或は妊婦預り所の厄介になつて其の子を流産せしめると云ふやうなものが隨分多い、それを父兄が知らずにゐる、愈ゝ大驕ぎになつて始めて眼が覺め學費の仕送りも途絶するとなると、止むなく知己の學生の下宿を泊り歩いて賣淫をするとか或は洋食店の女ボーイ烏屋の女中牛肉店の女中等に入り込むのである。殊に多いのは洋食店の女ボーイである、それは近時益ゝ盛なる傾向を有し從つて各種飲食店の女中酌婦と云ふ者の内には、所謂ハイカラと稱する女學生上りのものが澤山混じで居るのである。或る飲食店の如きは常に[illegible]學の、半墮落の學生を相手にして居つて、さうして多數の女中が皆學生上がりのものであると云ふ所すらもある。さうなると漸次に男女共に墮落の範圍が廣まつてくると云ふ情けないことである。又さう云ふ人間が少なかつたならば料理店の女中も不自由になり普通の下婢も不自由になつて困るかもしれぬが、普通の良家で女中を頼ひにしても能く女學生あ

がりの墮落ものが來ることがあるが、彼等は良家の女中としては最も不適當である、飯が滿足に炊けるではなく、洗濯が滿足に出來るではなく裁縫が出來るでもない、而して其心は驕り慢り虛榮心に長じて居るので、良家では左樣のものは家庭の穢れ家庭の紊れる本として、女學生上がりの墮落者は何處でも排斥して居るのである。

又男學生の墮落の結果はどうなるかと云ふと、學校も大概中途で止めて、ゆすり騙りや、又は良家の婦女を誘惑するやうなことをしたり、愈〻食へなくなると夜分路傍に立つて流行俗歌を謠ふとか、又は露店でも出すやうになる、又中には金にまかせて墮落女を相手に煙草屋を始めるとか、一品洋食店であるとか云ふやうなことをする、又生家の富裕なる所の墮落學生は、寫眞屋を出すとか自轉車屋を出すとか云ふやうな工合になつて結局有るだけの財產を蕩盡して仕舞ふのである。或は又自由結婚と稱して男女學生が一所になつて勝手な生活を營むとか、或は煩悶或は自殺等結局自分等の墮落のみでなく、社會に害毒を流さなければ止まぬので

墮落學生の害毒

ある。凡そ社會に害毒を流すものは何が一番恐るべきかと云ふと中等教育を受けたものの墮落した程恐ろしいものはない。近い話が電盜賊とか稱する者の如き其の一例である。彼れは自身が墮落すると共に多くの良家の婦女子までも墮落せしめたのである、其の手段の如きものは最も巧妙と云ふべきである。今日多くの婦女子が男生の手に掛つて墮落する方法手段は、孰れも彼の一例を以て說明することが出來るのである。卽ち女子の虛榮心の最も强い所に附け込み、最も富裕なるが如く見せ掛け、最も學問あるが如く見せ掛け、さうして遂に女子の獸心を買ふと云ふ工合になるのである。又貧民窟でも最も不善良なるものといふと、中等教育を受けた墮落者である。結局彼等は詐僞脅迫取財誘拐等の惡事の常に指導者となるので、當局者も之れには殆ど持て餘して居るのである。

墮落學生の疾病

近來學生風紀の紊亂甚しきことは、他にまた證明することが出來る。それは學生の疾病である。或る醫士の語る所によれば、近來女學生の疾病の種類は十中の八九迄異性より受けたる花柳病であると云ふて驚かれた

が、是れを以ても彼等社會が克己制欲の念乏しく、又如何に男性卽ち青年者に接する機會を有して居るかゝ思ひやられるのである。是れ畢竟父兄の愚昧にして東京を田舍と同樣に考へて、恐ろしい誘惑の鬼が手を擴げて待つて居ることを知らぬのである。嗚呼哀れなるかな地方人士よ。

教育と富との關係

更に地方人士の爲めに一言すべき事は、餘り富裕でもないのに其の子女に高等教育を受けさせることは、至極結構なる志であるけれども、既に自己が餘り富裕でない位であれば、自己も先づ相當なる教育を受けたものでなく、又相當の家に生れ相當の教育を受けたとしても、現在富裕でないならば、自己は祖先以來の財產を費消した所の田舍の墮落紳士と見なければならぬ。夫れ等のものが、我が子女を如何に教育すべきかと云ふ教育上の觀念も無く、又適當なる監督者もない地に遊學せしむると云ふことは、最も宜しくないことである。

成程我が子女は可愛くあらうけれども、教育なるものは子女の言ふがまゝ希望のまゝにさすべきものではない。親たるものが完全なる頭腦の力

人眞似の教育

を以て之れに干涉してさせなければならぬ。如何となれば青年否寧ろ二十歲前後の子女は、未だどれ程に此の社會と云ふものが困難であるか、如何にすれば宜いかと云ふ、社會の狀態と云ふものに暗いのである、其の社會の狀態については父兄が最も經驗閱歷を積んで居るのであるから、先づ多く經驗閱歷を積んだものゝ意見に賴るの外は無いのである。尤も本人の特質特性と云ふものが、何を好み何に長じて居ると云ふ場合に、其の方面に進ませると云ふことは敢て之れを惡いと云ふ譯ではないけれども、世間の多くは單に人眞似に止り誰さんは東京へ行つたから自分も東京へ行く、誰さんが何所へ這入つたから自分も何所へ這入ると云ふので、親も亦夫れを人眞似にすると云ふ傾きがある、夫れが爲めに黃金よりも球よりも何よりも大切なる寶の我が子を墮落せしめて、さうして社會からは爪彈きされ隣保からは笑はれる樣な事に立ち至るのである。併し親と云ふものは子の爲めに迷ふて居るもので、墮落して鄕里に歸つて、親の業も滿足に出來ず每日羽織を來てごろついてゐる子女を、我が子は

斯うであるさうであると云ふて、大いに自慢し大いに立派なるものゝ如くに人に語つて居るのは、憫れとも思とも評しやうが無いのである。殊に東京に學生を寄越して中學程度や高等女學校程度のものを無監督なる下宿屋に置くなどは我が子に石をつけて海へ投げると同じことで實に危險千萬なことである。即ち汝は墮落せよと言ふに同じ事なのである。さうして之れに墮落するなと云ふことは無理な注文と云はなければならぬ。

學生と下宿屋

近時は下宿屋抔にしても學生を多く下宿させやうとして、皆な眉目容貌の美しい女子を看板に使ふと云ふことが多いのである。夫れ等は田舍の父兄は殆ど知らない。男生すらも誘惑され墮落するに女子を下宿屋抔に置くと云ふことは實に言語道斷のことである。是れ等は先づ我が子を東京に棄てたものと云ふてもよい。近時素人下宿屋に多く女學生が宿泊して居る、さういふ無法な父兄があるから、正しい學校では下宿屋に居る學生は自分の學校に入れないと云ふ程になつて居る、殊に保證人と云ふものを八釜しく言ふやうになつて居るけれども、一旦男生に弄ばれた墮

素人下宿と貸間

落の女子は、窮屈な所には居らず、下宿屋に居ることを最も面白いことであり氣樂であるとして居るのである。

此の素人下宿と云ふものは眞に怪し氣なるものである。間貸しとか素人下宿とか云ふやうなものは、寧ろ學生墮落の媒介所と云ふても宜しいのである。東京のやうな物價の高い所で、明き間抔を備へて居るやうな家はあるものではない、若しさう云ふ間があるとすれば、親類緣者の止むを得ない人に貸し與へるとも、之れを見ず知らずの緣故も無い者に貸し與へる筈がないのである、それがあるのが既に怪むべきである、新聞種の多くはかゝる處から出るのである。又素人下宿と云ふ樣なものは、大概其の主婦たり主人公たる者がいろ〳〵の失敗的の事をしたり墮落的生活を送つた揚句のはてである、是れ等のことも地方人は殆ど知らないで平氣で安心してゐる。

中學程度の學生は出京修業の必要なし

故に若し我が子を修業させやうと云ふ位ならば、必ず地方に於て女子は高等女學校に入れ、男子は尋常中學校に入學せしめるといふやうにして、

中學程度の學科は總て地方において遣るが宜しいのである。今日は教育の設備が完全になつて來て居つて、到る所に縣立の中學校あり縣立の高等女學校がある、夫れに入學させるが宜しいのである。若し無ければ止むを得ず他に出すとしても、直ちに東京に出さないやうにして其の土地の縣廳下の學校に送るとか或は隣郡隣縣の學校に送ると云ふやうにするが宜しい、同じ縣内であるとか同じ國内であれば、自然と知人も多からうし又預けるにつけても監督をするにしても、其の便宜は頗る多いものである。それが東京のやうな個人的制裁の乏しい全國幾百萬人の集合地に之れを置くと云ふことは、自分も監督することが出來ず、又監督を依頼された者も完全に監督することは出來ないと看なければならぬ。それから又土地の中學校や高等女學校には入ることの出來ない位の低能者であつたならば、學問は廢して仕舞ふて直ちに實業につくがよい、地方の學校にすら入學の出來ぬ不優等な人間が東京へ來て、優等なる結果を得て優等の地位に昇らうとすることは、今日のごとき生存競爭の旺んな

劣等の學生は直ちに實業につくべし

特殊の學科を學ぶもの

東京の私立中學と地方の縣立中學

る場合には到底出來得べきものではない。夫れ等の人は宜しく學を廢して實業に就くべきものである。乍併又或は特に獨逸語を研究させやうとか、藥學を研究させやうとか、商業を研究させやうとか云ふ場合に於ては、其の鄕里に適當なる學校の無いことは勿論である、親が既に其の位の識見を有して居るものならば、東京に出して夫れ等の專門の學校に入學せしめるが宜しい、夫れ位の識見を有する者であつて、特殊の教育を施さんとするならば、親に於ても相當の教育あり監督法ある者と看て可なるも、普通の中學や高等女學校は日本到る所に在るのである、夫れを東京まで態々送り出して修業させねばならぬと云ふ必要は少しもないのである。其の地方に於て競爭試驗の爲めに落第したと云ふ位な者ならば、先づ其の人間は力が乏しいのであるから、宜しく更に一ヶ年も其の土地の教育者に附けて修業させ、翌年の入學試驗の際に其の土地の學校へ入學させるが宜しい。東京に出して一ヶ年早く修業するよりも一年遲れても、其の間に自修すれば腦も確かになり惡風にも染まず、經濟上から言

ふと非常に利益なことである。それを東京に出して同じ程度である同じ名前であると云ふて、私立の中學に入れて見た所で名だけよいのみで、それを一年早く卒業して見た所で、其の結果に於て決して縣立公立の學校を卒業したと同一なる待遇は受け得られないのである。近時私立の學校も大いに改良せられ善くなつたとは言ふものゝ、まだ〳〵世間の信用が其所までに至つて居らぬのである。殊に同じ中學卒業と言つて見た所で私立のつまらぬ學校を出たものは實際使つて見ると役に立たない。設立者自身或は私立學校の教員は言ふであらう、完全である立派である我が校の卒業者ならば何所へ出しても申分は無いと云ふて居るであらうが、我々の經驗ではさうはまゐらぬ、又世間一般も未だ公立學校と同等に看ては居ないのである。然らば一年遲れて其の土地の縣立學校に入學せしめても更に遲れたと云ふことは無いのである、卒業をすると同時に縣立學校の卒業生たる資格を有して、人が使傭人として採用しても安心が出來るが、私立學校の卒業生であるといつてもそれに重きを置く者はない

優等の學生

のである、又進んで高等學校に入らうとしても、實力が乏しければ入學試驗に落第して居ると云ふ間に、直ぐに一ヶ年位は經過して仕舞ふものである、夫れ故に我々は地方に於て空氣の清潔なる民俗の醇樸なる誘惑の少ない所で、中等教育を受けさせると云ふことを飽まで主張するのである。夫れから上は勿論既に本人に於ても相當の年齢に達し、自分が爲すべき所の方針と云ふものも立つのであるから、夫れは高等學校に入らんとするものは東京なり又はその他の都會に出なければならぬけれども、之れも亦腦力の問題である。自分が立派に卒業し得られないものであつたならば、寧ろ其所で實業の方面に轉じた方が宜しいのである。又自分の長所たる特殊の教育を受けて、特殊の業務に從事する方が宜しいのである。今日では必ずしも高等學校を出たから豪いとか大學を出たから豪いと云ふものではない、夫れ等の學校の卒業生でも、優等生でなければ世間は相當なる待遇はして呉れないのである。幾多の大學卒業生即ち何何大學の卒業生と云ふものが、自分の衣食の途を求めつゝ奔走してゐる

も尙ほ且つ得られずして毎日ぶら〳〵して居る者が非常に澤山あるのである。夫れを以て見ても最も頭腦の宜しい者でなければ、幾ら學問に永き時日を費して見たところで、それが爲めによい地位を得られるといふわけのものではない。資產の乏しいにも拘らず强ひて學問するとか、己れの頭腦が餘り優れて居らぬに拘らず、頭腦の良い人と競爭して進まうとか云ふことは、却て自分の身を損傷する本であつて、又他日適當なる衣食の途を得られるものでもないと云ふことを能く考へなければならぬ。社會の解釋が未だ不完全である時代とか、世の中が非常に急劇に人材を要するといふ場合に於ては、少々成績の惡い者でもどし〳〵採用するが、既に今日に於ては先づ普通の學士と云ふやうなものすら、有り餘ると云ふ位になつて來たので、唯優等なる善良なる人物は乏しいと云ふことはあるけれども、其の他に於ては有り餘るのである。夫れ故に優等なる頭腦を有して居るものでなければ、寧ろ高等學校や大學抔には這入らないで、直ちに特殊の學校か又は實業見習に移るやうにする方が却て宜しい

のである。

下宿屋の發達

第二十三章　下宿屋の內情

下宿屋は極く歷史の新しいもので、學制が布かれて東京に中等以上の學校が續々出來たので、地方から遊學するものが多くなり、そこで下宿屋と云ふ營業が始まつたのである。今では大概の都市に下宿屋があるが、到底東京のやうな宏大な立派な下宿屋は他に見ることが出來ない。東京で下宿屋の本場とも云ふべきは本郷と神田とである、其の他牛込にも小石川にもあるが、別けても本郷には最も高等なる立派なる下宿屋が多い、其の外京橋にも本所にも淺草にも下谷にも芝にも何所にもあるけれども、神田を除いて外の下だ町の下宿屋は概して會社員であるとか、或は工場に通勤する所の職工であるとか云ふ客種が多いのである。小石川邊の下宿屋は最も此の職工が多い方である。夫れで下宿屋と云ふ營業

は誠れも素人の貸間とか同居とかから發達して來たので、手に是れぞと云ふ職の無い者でも出來る所から、官吏上りとか、或は勞働も出來ぬといふ輩が盛んに下宿屋を始めるやうなことになつたのである。

元來下宿屋は其の始まりが、儲けて金滿家にならうなどといふわけではないのであつたが、今では之れで大に利益を得やうと計つて居るやうになつたのである。下宿屋は自分で家屋を所有してやるのでなければ利益がある抔と云ふ譯には行かないものである。そこで家屋が自分のものでも間數が少ければ矢張利益は得られない、卽ち段々と學生が多くなり下宿屋が多くなつて來るに隨つて八間や十間の小規模では儲けどころか家族の食ふことも出來ぬといふ所から、自然に大規模の下宿屋と云ふものが出來て來なければならぬのである。扨さうなると自分で家を建てゝ下宿を始めると云ふやうなことは困難になる、其所で又能くしたもので、大きな下宿屋は大概金主が之れを建てゝ營業人に貸すと云ふことになつて居る、夫れであるから一戸にして何萬圓と云ふ金を費した立派な下宿

大規模の下宿屋

屋が出來る、夫れを一ヶ月百圓とか貳百圓とかで借受けて營業すると云ふのである。勿論之れは下宿屋商賣の經驗のあるものが金主に謀つて建てゝ貰ふものであつて、借り手の有無に構はず金主の方で建てゝ之れを誰にでも貸して遣ると云ふ意味のものでは無い。

近頃東京で殊に目立つて立派になつたのは、此の下宿屋幷に湯屋である。湯屋の如きは警察の干渉が頗る八釜しい所から、止むなく自然に立派になつて來たのである。此の湯屋も矢張り下宿屋と同じ樣に、大きな金主があつて幾つもの湯屋を建築して之れを貸すのである。營業人の多くは加賀であるとか能登であるとか、越後であるとか云ふ方面の者であるけれども、其の家を建てる湯屋の持主の大半は東京の相當なる金主である。彼の有名なる實業家高田某の妻の如きは幾多の浴室の持主であると聞いたならば呆れるであらう。さうして一ヶ月幾らとか或は一日幾らとか云ふ上りの歩合を以て之れを貸して居るのである。夫れで湯屋にしても株の賣買があると同じやうに、下宿屋の株と云ふものゝ賣買が行はれるの

下宿屋の金主と湯屋の金主

下宿屋の株

である。下宿屋の株の賣買と云ふことは何であるかと云ふと膳椀である。僅かに十人前か二十人前の膳椀も之れを株として賣買する時には、看板と共に夫れが參百圓とか五百圓とか云ふ相場になるのである。夫れ位であるから十人以上の客があればまあ一家は食つて行けると云ふことは確かなものであらう。併し下宿屋でも始める位の者は、孰れかと云ふと手に何等の職も持たない、他に又經驗も有して居らぬと云ふ傾きがある所からして、自然と眞面目に細かに遣つて行けない、そこで遂に持ち切れないで之れを賣りはなすと云ふやうなことになるのである。其の内には又客の取扱ひを知らぬが爲めに豫想外に客が減つて來る、客が減つて來ると今度は愈〻持ち切れなくなる、或は又近所に立派な下宿屋が多數に出來る所からして、少し家屋でも古くなるとか、光線の工合が悪いとか疊でも汚して置くと云ふやうなことであると、是亦御客は段々に減つて來るのである。

客の取扱方

夫れで下宿屋商賣をする者はどう云ふ風にすれば御客が附くかと云ふこ

とを考へなければならぬ。其の第一は何かと云ふと、家屋の善悪よりも食物の如何である。下宿屋の食物は宿屋の食物とは大いに趣きを異にして居る。宿屋であるとか料理屋であるとか云ふ、一夜の御客を相手にする所の食物は、人の前に出した時に美しくて體裁さへよければよいそれが第一の主眼である、其の食物の内容に至つては、滋養分が甚だ乏しくとも分量が少くとも唯之れを綺麗に見せると云ふだけのもので價格の極めて安い物を使用すると云ふのが普通である。併し下宿屋は一夜泊りの客を相手にするのでないから一時の体裁では客足を止めることは出來ぬ。其の上下宿屋住居をする者は未だ一家を成すまでに至らぬ青年者で血氣旺んな人間であるから、殊に食物は澤山無ければならぬ、それが又學生であれば尚以て滋養分は澤山に採らなければならぬのが普通である。夫故に宿屋のやうな流義で下宿屋をしては客が附かぬのが普通である。その點から下宿屋で能く人が失敗するのである。下た町邊りから本郷邊に來て下宿屋を始めると學生の嗜好と云ふものを知らない、其所で食べさ

下宿屋の食物

せるものが體裁ばかりよくて牛や豚なぞを食べさせるといふことはなく、何時も定まつた御肴ばかりたべさせると云ふやうなことが來たるのである。併し學生は夫れでは滿足はしない、偶にはコロッケのやうな物を拵へて食はせるとか、又はシチウやうなものを拵へて食はせるとかでなければ嬉しがらないのである。勿論高價な肉類を使用することであるからして多量に使用する譯には行かぬから、そこは如才なく僅かな肉でも夫れに澤山なる馬鈴薯を混じて拵へるといふやうにすれば都合好く行くのである。即ち日常の調理が和洋折衷風に出來るだけの文明思想を有さない者が、下宿屋を始めたのでは學生の受けの惡るくなるのは當然である、何時も同じ肴の切身ばかり食はせると漸く客が苦情をいふて出てゆく、それから自然に其の家には客が來ないと云ふことになる。先づ多くの客の來るやうにしやうとすれば、食物に於て以上述べたるやうに常に注意しなければならないのである。

下宿屋と女中

次には甚だ露骨に言ひ惡いことではあるが、女中が美しくなければならない。女中の美しいのを置けば學生は多く其の家に下宿すると云ふやうなことになるのである。之れは又一方から言ふと甚だ弊害のあることで、固より一種の淫賣婦的に傾き易いものであるが、其所は下宿屋の主人たる者は非常なる警戒を以て取締らなければならぬのである。嫌でも青年を相手にするには、食物を良くし働く所の女中が綺麗でなければ滿足はしないものである。夫れで良い女中を置くと云ふことは、唯青年が容色を好むと云ふばかりでなく、夫れが爲めに色々と散財をさせる一策なのである。下宿屋では其の人の食膳ばかりでは至つて利益の少ないものであるから、成るべく客から其の他の注文を受けるやうにせねばならぬ。何か餘分の注文があれば、そこで頭をはねる、それが多ければ隨つて利益が多いと云ふことになる。勿論茲に言ふ所の下宿屋は職工などを下宿させると云ふやうな中以下の所ではない、職工抔に至つては朝から晩まで勞働して居るので、下宿屋はほんの夜分寢る場所として居る位であるが、今言ふ所の下宿屋は多く青年の學生、即ち親から仕送られて東京に

出て居る者を相手にする下宿屋に就いて言ふのである。

下宿の客として一等割りのよいのは高等教育を受けて居る大學生である。之れは一番割合が能く當たるのである、割に合はぬのは中學時代の者から高等學校の初年程度のものである。その年輩の人は身體も發育する眞盛りであるし、夫からして精力も盛んで勉强時代の頂上にあるから食物抔も極く荒いので又滅多に他所へ行つて飲食すると云ふことはなく、大概宿で飲食する、食物に就ても八釜しければ飯を食ふ分量にしても御菜の分量にしても成るべく多くせなければならない、其の上御客の餘り物などゝいふものは出ないといふ樣な譯で、却々割に合はぬのである。大學生に續いては、有福な出京者であるとか月給取りであるが、之れは長く下宿住居を續けると云ふ見込みはない、多くは一時のものである。學生に至つては東京に出た時から卒業するまでも、一箇處に下宿して居ると云ふやうな有樣である。下宿屋の商賣とすれば其の長く居る所の學生が本統の目的である。尤も女中で客を引くといふやうな下宿屋の中には、

如何なる人を客にすべきか

親切なる下宿屋

必ずしも客の長きを望むではなくて、金のある學生の懐を搾るが目的であるのもある。正しい下宿屋では極めて客に對して親切で食物にも能く注意する、其の爲めに女中抔は綺麗といふよりは、心がけのよいのを置くから、著實な立派な學生が長く居付くと云ふことになるのである。或る下宿屋は親切なので大學入學の當初から其の下宿に居て卒業したものが二十人もあるといひ、又或る下宿屋では其の主人が親切であるため、其の家に下宿生活をした大學卒業生、而も何れも名譽と地位とを得遂げたゝめに、それ等の人々が集まつて下宿屋の主人に對する謝恩會を擧行したといふ事さへある。

下宿料

それから下宿料のことである。現今は物價の騰貴して居るが爲めに一般に下宿料と云ふものは高い、職工とか貧書生などを下宿させる所は割合に高くはないが、併し一ケ月八圓以下の所は無い。又自炊的の所であつて見れば、四疊半一ト間は一ケ月の間代が二圓位が普通である、尤も是れ等は下等なる下宿屋である。良い下宿屋となると月に十八圓位から三

十圓位までいわる。其の位の下宿屋になれば、電燈も點じて居るし電話も架設してあつて、始終使用せられるので非常に便利なものである。夫れであるから若し田舎の人が何か用事があつて東京に一週間以上滯在せねばならぬと云ふやうな時には、宿屋に泊るよりも普通の下宿屋に泊る方が割りがよいのである。

下宿料以外のもの

前に述べたる如く下宿屋と云ふものは單に下宿料許りでは却々旨く行かない、夫れ故に其の他に何や彼や小物にて利益を取るのである。例へば一回御茶を入れて貰らへば二錢取られる、炭は小さな炭取りに一杯が十四錢、油は一合弱が三錢と云ふのである、夫れから御菓子を買つて貰らへば、十錢に付て二錢は頭をはねるに極まつて居る。もう一つには客膳である、此の客膳が無ければ下宿屋は割に合はない、下宿人の所へ度々客來のあると云ふことが下宿屋の利益である。客膳は普通の所では一食十五錢である、高等なる所では二十錢位まで客膳の代として下宿人から取るのである。併し夫が唯御飯の御膳許りでは濟まない、多くは牛肉を

客膳と小物

持つて來い麥酒を持つて來いと云ふことになる、大學程度の學生を下宿せしめるとさう云ふことが度々ある、其の上に能く留守勝ちになるものであるから下宿屋の方では大學生を置けば儲かるのである。麥酒は一本に付いて四錢位づゝ儲ける、其の外に牛肉を取れば一斤に付て五錢は頭をはねる、其の他葱とか砂糖とか醤油とかを小物と稱して普通十錢づゝ取るのである。斯くの如く客來があるとか、或は本人が贅澤に食膳以外に何か食べるとか云ふことになると、下宿屋は普通の飲食店のやうに儲けが出て來るのである。其所で又或る下宿屋になると、其の外學生に金を貸すと云ふことをする。既に大學にでも這入り親元の事情も能く分り、是れならば安全だと認め或は又其の學生が遠からず卒業をすれば相當なる收入のある者と認めるから、是等の學生に金を貸すのである。その利子も亦却々御安くない、日歩は大抵百圓につき十錢から十五錢乃至二十錢三十錢と云ふひどい利を取つて金を貸すのである。百圓二百圓と溜まれば金貸商賣と下宿屋とを兼ねて居るやうなもので、其の方の收入も面

下宿屋と金貸

白くあがるのである。さう云ふ工合になると下宿屋と云ふものは大層儲かるやうであるが、又却々決してさうではない、多くの下宿屋は家を持たずに借家であるから、其の家賃すらも滿足に仕拂へない、自分自身が高利貸に責められるし出入りの炭薪屋或は酒屋醤油屋抔の拂ひが何時も滯つてゐるのが先づ普通である。獨り下宿屋のみが良い生活の出來ると云ふ譯のものではない、一般の商家と同じことに隨分内幕は皆困つて居るのである。殊に下宿屋に慣れない内は、客種の良否を見わけることが出來ないで、飛んでもないものを下宿させて、食ひ逃げされたり下宿料が取れなかつたりするやうな酷い目に遇ふこともあるのである。

客の見そこなひ

此の營業をなさうとするものは、その初めに餘程注意しないと、飛んだ無頼書生を置いたりすることになるから、充分に注意するがよいのである。

第二十四章　花柳社會の一斑

花柳社會といへば文字は綺麗であるが、其の實は人間の情慾を恣にする所、又其の情慾から起る所の諸の罪惡の釀造機關を指して云ふのである。所謂東京は誘惑の巷であると云ふ其の源は此の花柳社會である。其の花柳の巷と云ふものは、何物から成立つて居るかと云へば、人間の五慾を滿足させる酒肉歌舞管絃である。尚露骨に言へば女と酒とである。即ち遊女とか料理店、待合、船宿等、概して人間の情緒的慾望を滿たす爲めの、酒色の設備一切を指して言ふて居るのである。

昔の遊女

遊女と云ふものは餘程古い歴史を有して居る、即ち萬葉などにも所々に見えてある、其の一例を擧げて見れば、天平二年の冬十二月大宰師大伴卿が、京に上ぼる時に娘子が別れを哀んだ歌がある、此の娘子と云ふものは今日から觀ると遊女としか想はれない、尤も或る書物には其の時の

娘子は兒島と云ふ遊女であつたと云ふことが書いてある、併し淺學な吾吾は近頃の本で其の名を見たといふに過ぎないのである。それ等の歌を始めとして住江の娘子とか池田廣津の娘子抔の歌もある、又上總の末の珠名の娘子の歌もある、夫れから勝鹿の間々の娘子手兒奈の歌抔もある、夫等を見ますと云ふと、或は手兒奈が非常な美人であつて能く男の機嫌を取つたとか、或は珠名が夜の夜中でも尋ねる者さへあれば、出迎へて夫れを優待したとか、非常に夫れが美人であつたとか、或る者はその娘子に迷ふて今までの妻を離緣して仕舞うて、夫れに大切なる鍵までも預けた抔と云ふやうなことが書いてある、手兒奈の如きは今は美の神として祭られてある位である。夫れで萬葉に在る所の娘子は大概先づ船着の入江、詰り今日の港と云ふやうな所に多く居つたものである。例へば間間の入江であるとか、また上總の末と云ふのは安房に屬するか或は木更津邊りか、其の時分は未だ安房と云ふ國は出來なかつたのであるが、孰れ此の海岸の船着きである。それは昔は陸上の交通が極めて困難であつ

て、旅行には舟が一番便利であつたからである。殊に攝津灘波の地は、奈良朝時代に於ても奈良から近いところの船着場である、平安朝時代から云ふても京都から最も便利なる船着きの場所であつたから、夫れで江口であるとか住吉であるとか神崎であるとか云ふ船の發着點には、人が輻湊するところから、旅の徒然を慰ひる遊女と云ふものが出來たのである。

然るに當時は別に宿屋と云ふものはない所から、海の模樣がわるければ幾日も舟の中に起き臥ししてゐる、そこで遊女が孤舟に棹し御客の船に近づいて來ては、鳴り物を鳴らしたり歌を謠ふたりして興を添へ、さうして又枕席を勤めると云ふのである、當時の王公貴人でも夫れが面白くて態々さう云ふ所に遊びに出掛けたと云ふことは、萬葉集の歌抔にも其の後の物語類にも出て居るのである。この娘子は先づ孰れも遊女と看て差支ない。即ち今で言ふ賣春婦とか娼妓とか藝妓とかを引きくるめたものであらう。

此の遊女のことは、今を去る約一千二百年ばかり前の奈良朝の終り時分から現れて居る、無論其の前からもあつたであらう。夫れから段々星移り物變りして鎌倉時代となつて靜の如き白拍子と進化し、一方には大磯の虎の如き遊女となり、江戸時代となつては女郎と云ふものになつたのである。特に此の歌舞管絃だけを以て世を渡つたと云ふものは中頃途絶したやうで大概枕席も共にして居つたのである。現在の藝者と云ふやうなものは、之れはほんの近代卽ち寶曆年中で今から百四五十年許り前に、始めて吉原に出來、洲先(今の深川)に出來、夫れ以來段々進化して、天保の初年頃に町藝者と云ふものが出來て、普通の民家にも招かれるやうになつたのである。料理屋は明曆の大火後卽ち二百四十年ばかり前に出來たのである。最初は唯蕎麥切であるとか、或は天麩羅であるとか、或は祇園豆腐のやうな類のものであつたが段々進んで來て、遂に一軒の見世で二種も三種も料理を作ると云ふやうなことになつて、其の料理屋が段段發達して、飲食だけでなくつて、遂に藝者を揚げて夜の夜中までも遊

昔の藝者

昔の料理店

興すると云ふ場所になつたのである。

夜會と飲食

夫れで今の料理屋と云ふものは、どうしても飲食店と云ふものと區別して觀なければならない。西洋では夜會と云ふものと夫れから普通の食事をする壹、晩餐會と云ふものは別になつて居るやうな譯である。それに對して日本の料理屋と云ふものは就れかと云へば、夜會の場所である飲食をするが主ではないのである。酒を飲んで藝者を揚げて思ふ存分に愉快に騷いで其の歡興を盡すと云ふことが主になり、從つて唯御腹が空いたから食べると云ふものは普通の飲食店で宜しいが、料理屋となると名は飲食であるがそれが唯飲食を供すると云ふ意味とは違つて來て居るのである。隨つて其の設備の如きものも頗る完全して居る。建築からして

料理店の設備

上等の材料を用ひ、壁と云ひ柱と云ひ或は床に掛けたる幅物、又は床の間に飾つた置物、總て夫れ等が如何にも人に快感を與へるやうに出來てゐる。卽ちあらゆるものが人間の情緒的快樂をよび起すやうに一方ならぬ費用を投じて設備されて居るのである。

祝儀と料理代と茶代

其の他給仕に出る者にしても時好に適した裝束をさせ、又如何にも垢抜けた美形を集めて、客の快感を惹くやうな工合になつて居る。實に料理屋と云ふものは却々費用のかゝるものである。夫れであるから普に食膳の費用さへ取れば宜しいと云ふ譯には行かない、各種の設備や席料と云ふものも考へなければならぬ。夫れであるから今日料理屋に登つて一醉を買はうと云ふ者は、唯飲食に行くのでないと云ふ考へがなければならぬ。遊びに行くのである、遊びにゆくのであるから夫れ等の諸の設備の損料に當るだけの御金は費して遣らなければならぬのである。料理にしても三品以下は料理屋に於ては應じないのが普通である、先づ料理屋に行つたならば其の料理を取るのは主でない、藝者を招んで遊ぶと云ふ考へを持たねばならぬ。其所で料理屋の方でも藝者を招んで遊ぶやうなお客とか、又大勢で來て呉れると云ふやうになれば色々な點から其の收入が增加するのである。藝者の繩頭にしても女中の繩頭にしても、皆料理屋が其の頭をはねるのである。夫れ等が卽ち其の設備の費用の足し前と

なるのであるから、心ある所の客は料理屋が持つて來る所の附け許りを拂つて歸るものではなく、必ず茶代として相當の心付けをする、勿論五人以上の客が行つて遊興をすると云ふならば一圓や二圓の茶代を帳場へ遣るは當然である。女中の繩頭の如きものも從來は僅かなもので、今から十年許り以前に於ては第一流の料理店でも女中一人五十錢位で濟んだものであるが、今日では五十錢許りの御金は實に恥かしくて出せない、先づ一圓が普通である、極く下等なる料理店でも女中が御酌をするとなれば五十錢は投じなければならぬ。隨つて藝者の繩頭の如きも矢張り同樣に多分に遣らなければならぬのである。女中でも料理店でも、彼等社會にはそれ相當の交際と云ふものがあつて其の出費は多大なるものである。衣服の如きものも其の季節々々に依つて數奇屋を着なければならぬとか、御召を着なければならぬと云ふやうな工合に、又諸藝人の交際として芝居の替り目に配らるゝ手拭に對しては相當なる返禮もしなければならぬ、或は總見物もしなければならぬ夫れは女中も料理店も皆同樣で

ある。藝者に至つては一層交際が張るのである、其の外御座敷着と云ふものは仲間に劣らぬだけの立派な物を具へて置かなければならぬのである。隨つて線香代抔と云ふものは彼等の收入の一部分の足し前と云ふ位なものである。夫れであるから澤山な纏頭を貰はなければ、彼等は外見を張つて滿足の顏つきをして御座敷に出ることは出來ないのである。今日の場合に於て普通藝者の纏頭は二圓である、金持とか投機者流とかは五圓も十圓も出すがそれは特別である。又非常に親密なる場合か毎夜の遊びか何かは夫れは一圓でも宜いかも知れぬが、普通に於ては二圓である、或は藝者に關係をつけると云ふやうな場合に於ては夫れは十圓百圓限りの無いことであらう。夫れから料理店の女中の稼ぎ高であるが、それは多い女中は月に六十圓も七十圓もの收入があるけれども、それは特別の顏役で普通は三十圓位である、併し彼等は又一方には其の料理店の設備の費用を負擔しなければならぬと云ふことがあるのである。夫れは例へば疊替をするとか或は膳椀を新調するとかいへば、其の費用も女中が

藝者の祝儀

女中の收入

幾分の負擔をせなければならぬ。苟も御座敷に關したものゝ設備の費用の出る場合に於ては、其の半ば女中の懷中から出るのである。尤もさうなければ女中も無責任なことをして困るし、隨つて料理店は却々成立つものではない、元來が遊ぶ所であるから飲食して呉れる者は至つて僅かであつて、立派なる設備をした場所を數時間も占領されて、或は酒を溢され疊を汚され座蒲團も汚れると云ふ始末である、さうして却て收入の多い者は女中であり藝者であると云ふやうな次第になる、其所で料理店に於ては彼等から割前と云ふものを出させ、其の上に客室に關した所の設備の新調改良の費用の一部を負擔させると云ふのである。夫れは又皆お客が負擔するのと同じである。勿論遊びに行く客は決して金錢を客むべきものではない、金錢が客しい位ならば決して料理店へ行かないが宜い。かく云ふと料理店にゆくものは遊蕩者のやうだが決して左樣ではない。料理店とか待合とかに遊ぶ客の中にも各種の營業上の運動の爲め止むなく行くものもあり、政治上の運動のためにゆくのもある、何れも酒

遊興には金錢を客むべからず

杯談笑の間に其の話をまとめるといふ事が今日一般の風俗になつて居るのである。乍併料理店の方の側から觀れば他まで來客に快感を與へて、さうして其の家の繁昌を期するのであるから、極めて新鮮なる物を手際よく調理し、又女中の如きものも腕きゝの美人を置くと云ふやうになるのである。さう言ふ所から商業上其の他の運動の爲めでない遊蕩客も隨分澤山にあるのである。卽ち出來得るだけ人を誘惑し、出來得るだけ客に快感を與へやうとして居るのである。尤も料理店と云ふても夫れには階級のある者で、今言ふ樣な所は學生抔の多く出入する所ではなくして、申さば第一流の紳士を客とする料理店である。然るに左樣な料理店許りが東京に在るのではない、階級の低い社會を相手にする料理店も澤山ある。又多數の學生及び青年の店員であるとか會社員であるとかといふ青春時代の人を相手にする料理屋と云ふものも亦澤山にあるのである。夫れ等になると設備は左程に完全を望まないのである、第三四流の料理店になると隨分甚しい設備の所もあるのである、けれども十人幷以上の女

第二流の料理店

下等の料理店

中は澤山に置くのである。所謂酌婦と云ふものに相當な容貌の好いものを置いて來客の足を引くのである。勿論青春時代の彼等は食ふよりも飲むよりも何よりも夫れ等の婦人に戯れ遊ぶのを主として行くのである。夫れで學生抔にしても色を漁さると云ふやうな墮落の學生は多くさう云ふ所に出入をするのである。同じ洋食店にしても男ボーイの所あり女ボーイの所あり、併し女ボーイの店が繁昌して、男ボーイの店が繁昌せぬかと云ふと、決してさう云ふ譯ではない。春を買はんとする所の墮落人間も多からうが、饑を充たすため滋養を得んが爲めの客も亦頗る多いのである。そこで學生の氣風や其の他の者の氣風が分るのである。男ボーイの洋食店に這入つて食事をして早速と去る者は多忙なる奮闘的の人か又は善良なる青年と看なければならない。然るに女ボーイ抔の洋食店に這入つて、嬌冶て長い時間一皿か二皿の食事をして戯れて遊んで居ると云ふやうな者は、多くは墮落の人間であるか、又將に墮落せんとし、或は人を誘惑し自身も誘惑される所の人間である。

青春者を相手とするもの

男ボーイと女ボーイ

待合

夫れから待合と云ふものである、之れは昔は船宿と云ふものがあつて、專ら遊興や或は枕席を備へてさうして客を遊ばしたと云ふことがあるので、今でも河岸つきには殘つて居るが、今日では多く待合と云ふ方になつて居るのである。從來の待合と云ふ者は眞に簡單なるもので人を待合はせるとか貸席の如きものであつたらうと思ふ、夫れが遂に今日のやうに男女が密會する場所と云ふものになつて仕舞つたのである。其の待合はどう云ふ人間が營んで居るかと云ふと、多くは御茶屋の女中をして居つたとか或は藝者をして居つたとか云ふ、花柳社會の婦女子のなれの果である。そこで夫れ等は顔役の妾とか紳士の外妾とかであつて、多くは刑事に懇意を結んでゐてよい工合に法律の下を潛つて居るのである。若し其の行き渡りがわるいと待合は何時刑事に蹈込まれて一場の騷ぎを惹起すか分らないのである。元來表面上に於ての待合と云ふものは、飲食の費を省いて用談を濟さんための者で、席料を拂らへば事足りるのである。夫れであるから待合では勿論飲食と云ふものは備へは無いのである。

待合の主婦

席料以外の收入

特に酒を飲みたいとか或は料理を食ひたいとか云へば、夫れは他の仕出し屋料理店から持運ばれるのが當然である、即ち待合は席料を得てそれで生活をして居る筈のものである。待合の席料と云ふものは普通は一圓である、縱令長かれ短かれ其所に這入ると一圓であるけれども、今日の待合と云ふものは用談以外に藝者を招き、遊興をする所となつて居るから、啻に一圓の席料では濟まないのである。彼等も澤山な稅金を取られ各種の派手な交際もせなければならぬ所から其の內幕に這入れば矢張り火の車の生活をして居るのである。夫れ故に四五人位の客の時には二圓乃至三圓位の茶代は無論として、夫れ以外に食料の費用と云ふものを拂ふのである。其の食料の費用と云ふものは料理店で食するよりも更に更に高いものである。元來が食事をすべきでない場所で食事をするのであるから、高く取られるのは之れは當然のことである。其の外に女中の心付けと云ふものも五十錢乃至一圓は當り前のものである。所が又待合にも二通りあるのである。立派な紳士としてさうして藝者を呼んで遊ぶ所

待合は罪惡の醸造所なり

の待合もあり、或は素人相手と稱して祕密なる一般男女の會合を目的として遣つて居るものもある、小さな待合は先づ多くは夫れと看なければならぬ。立派な實業家の妻君が藝人と密會するとか、教授が女學生を連れこむとか、未亡人が番頭や書生を咬へ込むとか實に斯る者が澤山ある。『嗚呼、罪惡なるかな、世はかくして罪を作り、罪の爲めに其の身を亡ぼす。凡そ道德を離れて、男が女に狎れ女が男に狎るゝことなかれ、その之れあらんか、迷ひ、狂ひ、悲み、嫉み、怨み、神を汚し、名を汚し、有らゆる惡毒を自他にも及ぼし、其の極は、血を流し、刑戮にふれ、祖先を辱かしめ、子孫を苦しめ、家をも身をも共に滅し、之れを大にしては國も傾き城も傾くに至らん。嗚呼禍なるかな、吾人共に共に、恐れ、愼み、以て平和幸福を道によりて求めん。神は道に從ふ者を愛護す。』喝。

藝者屋のある所として、待合のない所はない、待合には藝者は附きものである。さうして待合には必ず枕席の備へがあるのである。東京には藝者の數は實に多大なものである。然るに夫れ等の者の中で料理店の御座

藝妓の多數は賣春婦なり

敷に招かれて、客に藝を賣つて生活すると云ふものは、實に夥々たるものである。然らば多くの藝者は何をして生活して居るか、之れは卽ち待合と云ふものがあつて、其の待合と云ふものが彼れ等の生活をする魔窟である。例へば新橋に行かうと上野に行かうと藝者を呼ぶとなれば皆誰しも名の有る藝者を呼ぶ、名の有る藝者と云ふものは三百人の中に十人か十五人位しかない、然らば他の二百八十五人まではどうであるかと云ふと、夫れ等が卽ち待合に行つて客に枕席を進める所のものである。御座敷に出る所の立派な藝者は、妄りに枕席に侍するものではない、又皆相當なる旦那と云ふものを持つて居るのである。例へば御客と共に待合に行くとしても、夫れは特別なる關係があるか、然らざれば其の場を切り揚げて自分は早く歸つて、別に抱への子供を寄越して枕席に侍ぜしむると云ふことである。夫れ等の價と云ふものは又決して安いものではない、併し聞く所にては二圓乃至五圓位が先づ普通のものである。之れを以て見るも花柳社會に這入つて遊ばうと云ふのには、却々金が無ければ

出來ることでないといふことは了解されなければならぬ。世間で能く彼の人は却々通人であるとか、能く花柳社會の狀況に精しいとか云ふが、さう云ふ人は決して通人と云ふ者ではない。或る人が斯う云ふことを言はれた、知らずして遊ぶ者は野暮である、知つて遊ぶ者は本當の野暮である、知つて遊ばない者は通人である、知らないで遊ばない者は本當の通人であると。此の花柳社會と云ふものは恐ろしく且つ馬鹿げたものである。併し人間の中には隨分動物的情慾に富んで居り、又其所までに墮落したものが多數にあつて、夜の寢覺には噫詰らぬことをしたと噫惡いことをしたと後悔しながら、翌日は復其の遊びに耽けると云ふやうな者が澤山にあるのである。余も亦全くそれを知らぬものではない、今は即ち通人の一人といふてもよい位である。呵々

通人と野暮

幸にさう云ふ墮落せる青年及腐敗せる政治家實業家があるが爲めに料理店も待合も下つては遊廓と云ふものも繁昌して行くのである。

前にも申す通り眞に飲食を欲する者ならば敢てさう云ふ所へ行かぬでも、

最も旨くて最も廉價で濟む所の飲食店と云ふものが幾らも在るのである。墮落なる所のものは元來が飲食が主でないのであるから、さう云ふ所に深入りをして遂には自分の身も誤り人をも泣かしめ、或は鄕里の父兄が汗水を流して働いて仕送る、申さば父兄の膏血を搾つた所の學資金も、皆是等の中に注ぎ込むと云ふやうなことになるのである。世の父兄たる者が教育が乏しい所から教育と云へば唯文字を覺えると云ふやうな考へのみを有して、眞に人間と云ふものを健全に作つて行くと云ふ觀念に乏しいが爲めに、我が子が遊蕩の費用をも其の僞りの手紙に誤魔化されて嫌でも貢がなければならぬ始末に立至るのである。實に憫むべきものと云はなければならぬ。其所で又多くの墮落青年や學生を相手にして居る所の料理店の女中には、是れ亦甚々しい墮落なものがある、中には地方から來て親の仕送りの下に相當の女學校に這入つたものが、中途で墮落して遂にかゝる女中にまでなつたといふものもある、夫れが又一層青年を墮落せしめて、互に墮落の同類を擴めやうとかゝつて居る、實に情な

女學生上りの女中

花柳社會と道德思想

いことゝ言はなければならぬ。

それから花柳社會に於ける所の人間の道德思想はどんなものであるかと云ふと、本能のまゝといふて宜しいのであらうか、其の社會に於ける互の間に於ては勿論正直である、其の正直なる取引を爲し、又さう云ふ仲間内は義理づくといふ一言で保たれて居る。夫れを失へば勿論自分の營業が成立たないからである。然らば之れが道德かと云ふと道德と云ふものは決してそんな者ではなからうと思ふ。花柳社會の業に從事する者は、固より人を誘惑し人を墮落せしむると云ふ事の大罪惡を犯して居るのである、彼等に言はしむればそれは墮落するものが馬鹿なので、自分たちの關する所でないと澄しこむのである。全然罪惡感もなく道德觀念もないのである。同じ仲間の間に於て正實であるとか義理を重んずるとか云ふことは、之れを以て道德的行爲の一部分を本能的に盡して居るといへるが道德的の人間とは言はれない、泥坊も泥坊の仲間に於ては正實である。掏摸も掏摸の仲間に於ては義理が堅い夫れを以て彼等は良い人間で

あると云ふことは出來ない。一方には夫れ以上の罪惡を犯して居るのである。夫れ以上の惡い計畫をしたり人を泣かせたりして居るのである、彼等は最も不道德なる人間と云はなければならぬのである、少しの範圍の唯先天的に正直である位のことは、犬も正直であり猫も正直であると云はなければならぬ。犬にも禮儀あり猫にも禮儀ありと云ふのと、彼等社會の禮儀や正實や義理づくは是等と選ぶところはないのである。酌婦や藝者や娼妓乃至賣春媒介者は客に對しては勿論大概は良い人間と見える。少くも客をして愉快に飲ましめ愉快に歌はしめるだけ、其の客の目より見れば良い人間で、惡い人間だとは見えないのである。乍併夫れは其の人間を良くせないまでも惡くせないと云ふ譯のものではなくして、どうか快く御遊び下さつて度々御出で下さい、さうして澤山に御金を撒いて下さい、あなたが他日乞食になりましても夫れは私等の知る所ではない、と云ふ精神より外には何にもないのである。固より彼等は遊びに來る所の客の親戚にならうと云ふ譯でもなく、家族の一人にならうと云

ふ譯でもないのであつて、又決してさう云ふことは出來ないのであるから望んでも居ないのである。彼等は自分の身が自墮落で自分等が斯う云ふ賤業に從事して居ると云ふことは彼等自身が能く知つて居るのである、知らずに遣つて居るものは一人でもない。縱令半玉のやうな子供でも自分等の營業は賤業であると云ふことは能く知つて居るのである。其所で世間で言ふ道德上の制裁と云ふものは、彼等は知らんではないのである。女は操を正しくしなければならぬとか、それは罪だとか位は彼等と雖も皆能く知つて居るのである、けれども夫れは唯鸚鵡の口まねであつて、決して夫れを行ひ得るものではないのである。彼等と雖も最初は固より生眞なものであつて、眞に白い紙のやうなものであつた、夫れが其の社會の一ッのヒントと云ふて宜しいか、何かに染められて仕舞つて、到底善良なる家庭を形造るとか正しい一家の家族となることの出來ないやうな始末になつて仕舞つたのである。それ故之れに迷ふとか迷はせるとか云ふは、眞に恐の骨頂と云はなければならないのであるが、青春時代に

道德教育の缺乏

遊廓及び銘酒屋

於ては常に彼等の甘言に絆されて、さうして遊興を恣にし他日の大いなる後悔を買はねばならぬのである。畢竟今日の青年が未だ教育ある者の腹に生れて、教育ある所の父兄に養育せられたのでなく、又家庭の教育に於ても不充分であるところに、加へて青春時代に受ける教育が專門に傾き、人間を作ると云ふことよりも知識技能を授けると云ふことが主となつて居るが爲めに、つひ〳〵克己制欲が疎になつて狂ひ廻はるやうな次第に陷るのである。

此の外に東京に於ては銘酒屋と云ふものが又澤山にある。此の銘酒屋であるとか遊廓であるとか云ふものは、先づ下層社會のものを相手にして居るのである。そんな所に遊ぶ者は割合に職人であるとか勞働者であるとか、下級の會社員抔である、隨つて其の相手となる所の女中も亦最も卑賤なる身分のものが多いのである。遊廓はどこにある位の事は誰れでも知つて居るであらう、銘酒屋は澤山にあるが、一箇所や二箇所は知つて居らうが、中以上の人は知らぬが普通である。一寸東京見物で表面を

見ただけでは夫れは知ることは出來ない、大概雜踏の表通りをそれて、直ぐ横町から三尺四尺の路次を這入ると云ふと、幾らでもさう云ふものがある、我々は東京に永く住んで居ながら淺草以外には何處に在るかと云ふことは、頓と知らなかつたのであるが、併し此の頃の雜誌を見ると邊鄙な小石川にも芝にも神田にも京橋にも日本橋にも下谷にも何所にも銘酒屋がある。其の路次に這入ると幾軒も戸を連ねて賣春婦が客を引いて居ると云ふことである。迂濶にさういふ所へ立ち寄ると非常な病毒をひきうけて生涯不幸を見るのである。

自分は花柳社會のことを述べるに當つて知らぬと云ふと恥かしいことであるけれども、多くは知らない方である。夫れ故に是れ以上に亙つて充分に述べることは出來ないし、又さう深く之れを知らしめる必要も無からうと思ふから是れ位にして置く。唯茲に參考の爲めに藝者營業組合の規約と云ふものがあるから、夫を一つ茲に出して置かうと思ふ。彼等の中にも色々の規約があるものである、此の規約も古いので三十五年頃の

規約であるから、今日は餘程改正された所もあらうと思ふが、先づ昔から名高い柳橋藝者屋の規約を參考に載せて置かうと思ふ。全文は三十七箇條であるが今其の重もなる條項を記して見ると斯う云ふことが書いてある。

第二條　當組合は營業上の惡習を矯正し、同業者間の圓滑を旨とし營業の隆盛と安全とを圖るを以て目的とす

第五條　當組合は左の役員を置く、取締役三名、協議員十二名、事務員一名

第七條　協議員十二名は之れを十二ヶ月に區分し毎月一名宛其の月に關する事項を取締役と共に協議するものとす

第十二條　當組合は毎年三月組合總會を開くものとす

第二十條　當組合は藝者一人毎に日々收得する玉代金の内より玉一本に付壹錢宛を組合の積立金として出金せしむるものとす

之れは今日ではもつと增して居ると云ふことを聽いて居る、無論さうで

せう、段々物價も騰貴して來るし致しますから玉代も高くなつて居るから部合も當然高くなつて居るだらうと思ふ。

第二十一條　前條の積立金は組合一同に關する費用に充つるものとす

第二十二條　新たに當組合に加入し藝者屋營業を爲さんとする者は加入金壹百圓を差出すものとす

之れは詰り看板金と稱するもので看板を買ふのである他人の株を買ふのは別である。

第二十三條　當組合員に於て廢業するものは加入金を事務所に預け置き新たに此の組合に加入し營業を爲さんとする者に金五拾圓以上の價格を以て其の權利を賣渡すことを得、但し其の賣買は事務所に於て爲すべきものとす

第二十四條　前條廢業者は賣買成立まで一ヶ月金五拾錢宛組合の費用として差出すものとす、但し六ヶ月以上怠りたる者は賣買權を失ふものとす

第二十六條　當組合員の抱へ藝者にて三ヶ年以上無事營業を繼續し抱主より營業名義の分讓を申出でし時は第二十三條の加入金を徴收せず當組合に加入せしむるものとす

第二十八條　當組合員は營業名義を借り其の家に起居し營業を爲す者の賄料は一ヶ月金拾貳圓と一定す

之れは今日では大變に上ぼつて居りませう。

第三十三條　當組合の藝者玉代は左の如し

一　一時間を以て一本と定む

二　約束の玉代は夜十二時まで六本と定むる事

三　遠出の玉代は夜十二時までは八本と定むる事

四　御酌の玉代は一本金貳拾錢と定むる事

五　約束及遠出にて夜十二時を經過する時は第一項の割合を以て增玉を要求する事

第三十四條　玉代、紙、繩頭等は其月分を翌月二十日までに客筋の勘

定如何を問はず料理店又は待合遊船宿よりは仕拂を受くるものとす

但し毎年七月は十日まで十二月は其月々末限り仕拂を受くる事

第三十五條　如何なる都合あるも前條の期日に至り仕拂を得ざる料理店又は待合茶屋遊船宿ある場合に於ては爾後當組合員一同は其の仕拂を爲さゞる方よりの招きに應ぜざる事

第三十七條　當組合の規約に違背したる者ある時は直ちに除名すべし

まあさう云ふやうな事になつて居る。其の他或は赤坂藝者の組合であるとか、又新橋であるとか、日本橋であるとか、數寄屋町であるとか、皆夫れ〳〵あるが大概似寄つたものである。

次に犯罪とか藝人とかのことに就いて少し述べて置かうと思ふ。

全體藝人であるとか藝者であるとかいふものは、獨り墮落人間のため許りでなく、終日奮闘をする都會人種の勞苦を慰めるには適當である所から繁昌すると云ふやうな譯になつて居るので、單に日本の東京に在る許りではなくして、世界到る所の大いなる都市には自然に奮闘的の人が集

まるので、又それ等の慰安物たる娯樂の設備がそれ〴〵に出來て居るのである。夫れが單に一時の娯樂に止まれば宜しいけれども、深く之れに迷ひ込むと云ふことがあると、夫れが爲めに社會の生產力は非常に減じて來るし、風紀は倍〻紊亂して來ると云ふことになるのみならず犯罪者と云ふものが非常に增加するのである、都會の犯罪者は多くは生存競爭上の貧苦から起るものであるが、又其の一面には酒色の爲めに起ると云ふことは既に第一章に於ても述べたやうな次第で、此の女狂ひ藝人狂ひの爲めに罪惡を犯すと云ふことは實に烈しいのである。貧困の爲めに犯す所のものは、極めて憫むべき者であつて全く飢ゑて食を盜み、着る物なくして衣を盜むに止まるけれども、酒色の遊樂に耽るが爲めに犯す所の罪は、そんな小罪ではないのである。或は殺人、强盜、詐欺取財、さう云ふことは、總べて生活難より來たるよりも酒色に溺れたるが爲めに犯すものである。多くの强盜抔は人の財寶を奪つて之れを何に費消するかと云へば、或は遊廓に遊び或は料理店に遊んで酒に女に費して仕舞ふ

花柳社會と犯罪者の關係

犯罪の豫防は情慾の根を斷つにあり

のである。さうして見れば此の花柳社會と云ふものは犯罪者と非常に深い關係を有して居るものである。今日の制度では出來ないけれど、若しこれが出來得るものとしたならば、極惡なる犯罪者を防ぐには刑罰卽ち今日の法律の規定に依つて防ぐよりも、先づ酒色に耽る所の情慾の根を斷絶すると云ふことが一番に良い方法であらうと思ふのである。彼等は監獄に投ぜられ苦役に從事して見た所で、さう云ふ苦みを受けるほど、娑婆の快樂卽ち酒色の快樂を想ひ出し、其の樂みは夢寐の間にも忘れることは出來ないのである。大いなる苦痛を與へれば與へるほど、曾て自分が經驗した所の快樂を夢見るものである、夫れ故に極惡なる犯罪者を防がうとするならば、先づ彼等よりして情慾の念慮を取り去るより外には仕方がない、併し乍ら女が姦通せる爲め、其の夫たるものが其の女に對し殘酷なる刹戮を敢てする場合があるが、之れは自然の人情であつて社會を荼毒する惡人と見ることは出來ない、寧ろ惡はその姦婦姦夫にあるのであるから、例へ今日の法律が惡人として罰するも之れは別と見な

ければならぬ。其の他の場合に於て、其の情慾の念慮を去ると云ふ事は敎育に依るとか宗敎に依るとかするのであるけれども、既に夫れが中毒に陷つたものは敎育や宗敎では救ひ得られるものではない。現今世界の各國には行はれて居らぬのであるが、彼等より情慾の念慮を去らうと云ふは、彼の動物に施す所の脫睪法を罪惡を累ねたる人間に施すのである。彼等は夫れが爲めに僅かに一時の苦痛のみであつて生涯罪惡を犯す憂ひもなく又本人に何等の苦痛なく世を送られるのである。さうして又其の犯罪者たる所の惡い遺傳を此の世に遺さぬと云ふだけでも、大した公益のあるものと云はなければならない。社會政策の一ッとして多くの犯罪者を生ぜしめない樣にするには、花柳社會が無くなるやうにするより外に仕方が無いが、此の花柳社會と云ふものを全く絶無にすると云ふことは、血氣旺盛なる奮闘時代の人間の此の世にあらん限りは到底出來得べき事でない。一方に之れを絶無にしやうとすれば、又一方に祕密に各種の弊害が起つて來るのである。先づ夫れよりも多く罪人卽ち敎犯以上の

花柳社會の上流に及ぼす弊害

大罪を犯して、夫れが多く酒色に原因するものであるとすれば、之れを死刑に處するよりも多年の苦役に處するよりも、先づ鷄豚牛馬に施すと同じやうに脫睪法を施すが一番に良い方法であらうと思ふ。即ち社會改善を圖る一つの良い方法であらうと想はれる。

次には花柳社會の上流に及ぼす弊害である。維新當時社會の秩序が破壞されて建設未だならざる無秩序時代には、藝者であらうと女郎であらうと身分ある人が之れを妻に娶ると云ふのであつたが、夫れが今日も尙社會に害毒を流して居るのである。今日の元老と稱する者の夫人には是等の賤業婦であつたといふものもある。而して又彼等は多數の男性を操つた習慣があるので自然交際が巧みである。夫れが先例となつて此の世の中に頭を出して事を成さうと云ふには、妻女の力を賴まなければならぬなどゝ考へて、今も尙ほ名譽あるものが此の藝者や酌婦と云ふ者を妻に持つやうなことがある。之れが即ち花柳社會が上流社會に及ぼす弊害の種子になるのである。尙ほもう一ッは既に數回述べたる如くに、今日の

上流紳士の待合遊び

實業家政治家は互に利益問題の爲めに此の待合這入りを爲し、或は藝者を揚げるとか藝人を招くとかして自然と花柳社會に昵懇を結ぶのである。

家庭の紊亂と花柳社會

此の二つが何時も上流社會の家庭を紊亂し、上流社會の風俗が常に花柳社會の風俗に支配されると云ふやうなことに陷るのである。此の家庭の紊亂と云ふことは、畢竟清潔高尙なる家に成長した所の淑女を妻としないで、花柳社會のものを妻とすると云ふ所から來るのである。即ち曾て道德的なる生活の何物たることを知らぬ所から起つて來るのである。

花柳社會と藝人

花柳社會に於ての彼等が最も面白いと考ふる所のものは踊や芝居である。彼等は知力に於ても道德力に於ても最も卑ひが爲めに、己れに最も解し易い所の芝居や踊が直覺的で面白い所から、從つて之れを演ずる藝人と云ふものは彼等の最も愛慕する所となる。彼等の想像力は其の技術から率いて其の人間を非常に戀ひ慕ひ又豪いものと思ふのである。其所で藝人と云ふものは思想の卑くい婦女子社會に、甚だしく歡待されると云ふやうになつて來る。即ち男として最も賤しい河原乞食と稱されるものが、

婦人の眼には最も面白い美しい優美なるものとして映ずるのである。殊に近來歐米思想の輸入の烈しい所からして、彼等俳優の爲すことは立派な藝術である、音樂、美術、文學と相幷んで、ともに立派なる藝術として社會に重きを置くと云ふやうな傾向になつたのである。曾て西園寺侯が首相であつたときに、藝人を招いて晩饗を供したと云ふやうなことを以て見ても、役者を藝術家として重んずる傾向が著しくなつたことが分かる。我々は今日の日本の社會に於て、此の藝人と云ふものを尊重すると云ふことは大早計であつて、半世期以上進み過ぎたことゝ思ふ。一國の堂々たる首相が、東洋の道德を無視する男地獄を招いて賓客として扱ふと云ふことは、藝術を重んずる點からは宜いか知れぬが、社會の風紀を紊亂すると云ふ上からは眞に歎くべきことであると思ふのである。幸に社會が其所まで進歩して、藝人が藝術家たる責任を思ひ其の素行を正うして居るものならば獨り首相のみならず吾々も進んで優待するのであるが、遺憾ながら今日は其所まで堅固なる道德と云ふものは築かれて居

藝術家と役者

藝人と男地獄

らぬのである。夫れが爲めに藝人は藝人自ら私窩を以て任じ、社會も亦彼等を藝人として男子が藝者を揚げるが如くに、女子が藝人を金錢づくで自由に招んで弄ぶことが出來るのである。かゝる社會に於ては彼等は之れを藝術家として重んずるとか優遇するとか云ふやうなことは、却つて社會の秩序を紊亂するものと言はなければならない。婦人は既に第十一章に於ても述べたる如く虛榮心の強いものである、さうして富を得やう地位を得やうと云ふことは彼等の望む所である、彼等は富を得又地位を得ると漸く慢心を來し、其所で社會に活動する良人が常に待合這入りをしたり、待合の女將が其の家庭に出入したりする所からして、其の內に夫人や合嬢が好奇心半分に花柳社會の遊びの祕訣などを聞き遂に煽動に乘じて藝人を弄ぶと云ふことになるのである。卽ち立派なる合嬢が淸操を破り、夫ある婦人が姦通罪を犯して家名を辱かしめるといふ恐ろしい一家の紊亂を釀すのである。之れは男子も甚だ宜しくないが淺薄下劣の婦女子の罪といふべきである。昔の如く河原乞食として卑下してさへ

夫人令嬢と役者の關係

も娘子供が俳優に迷ふと云ふので世間は何所までも警戒を加へられたのに、今日では彼等を藝術家として扱ふといふ傾向になつて、それ慈善演劇だとか園遊會だとかいふて、今まで賤しめた者が邸内に入り込むとか、今まで接近しないものに接近するとかする、そこで上流なる婦人まで墮落させると云ふやうな次第になる。

婦人の活動と墮落

又一ッ惡いことは婦人の活動と云ふものが矢張り婦人を墮落させる原因である。今日の日本の幼稚なる文明、而も習慣、教育、遺傳に於て、女子の教育は頗る不充分であり又世間慣れぬのである、知力も道德も皆それである。其の婦人をして急劇に男子同樣に外部に立つて、社會的活動に奔走せしむると云ふことは時節が早いと言はなければならぬ。日露戰役の際に貴婦人抔が何々會であるとかいふて、軍人の送迎の爲めや何にかに出掛け、幹旋の紳士と打ち交り談笑終日なるところから、夫れ等婦人の中には實に見るに見兼ねるほどの癡話狂ひや待合入りが出來たと云ふことは、其の當時の當局者の直話である。／彼等貴婦人が或は慈善演劇

であると稱して、名を慈善に籍り、或は何々夫人を訪問すると稱して男性と密會したり、又は役者買ひをすると云ふことは、實に今日は公然の祕密になつて居るのである。人は「濡れぬ前こそ露をも厭へ」である、今日まで深閨に鎖されて居つた所の婦人が、始めて社會に出ると物珍らしく感ずる所からして、又異性の男子に接するとチヤホヤ取持たれる所からして、急に社會のことが面白くなる、その内に藝人などゝ談話をかはすといふことになつて、何時か彼等の魔力に魅せられ、夫れが爲めに知らず識らず其の深みに陷つて遂にはあられもない婦人が待合這入りをしたり役者買をしたりして姦通罪を犯すといふことになる。總て今日の上流社會の紊亂と云ふものが斯う云ふことからして起つて來るのである。

人は境遇により性行に變化を來す

元來善良に立派に教育された貴婦人でも、境遇が變ると云ふと性行にも亦自然と變化を及ぼすものであつて、殊に淺薄な女の心からして飛んだ事になるのである。男子と雖も亦境遇が變れば今まで立派なる所の宗教家であり廉潔なる人であると云はれた人も、收賄をして牢に這入るとか

待合遊びをするとかいふことになる。況や意志薄弱なる虚榮心の強い婦人が、今まで深閨に閉籠つて居つた境遇が、一變して社交場裏に出て男女一緒になつて仕事をすると云ふことになると、世間には幾くらも良人以上の好男子もあれば、嬌冶男もありて優待至らぬ所なく、それが爲めに慎みもゆるみ性行も亦一變を來たして、さうして遂に救ふ可からざる墮落に陷り自らも泣き人をも泣かしむるのである。去ればと云つて今日藝人や好色漢を全く社會から除き去つて仕舞ふと云ふことは勿論出來ない、併し乍ら上流の婦人をしてさう云ふ者に接せしめない樣にする事は何時でも出來るのである。吾々は今少し道德的の敎育が充分になり、婦人も男子と拮抗して世に立たねばならぬと云ふ、所謂男女の生存競爭が盛になつたら、始めて婦人も立派な行動を取るやうになるものであらうと思ふ。夫れは却々容易なことではない、夫れが容易な事では無いとすれば、藝人を尊重したり或は藝人に接せしめたり、又は待合の女將を家庭に出入さしたり酌婦や藝妓を妻にしたりすることを止める外は無いのである。

風紀を紊るものは上流社會と花柳社會となり

中流の家庭

今日の所では最も平和なる立派なる家庭と云ふたら、中流以下に存して居ると言はなければならない。何時も世の中を紊るものは上流社會と花柳社會である。中流の家庭は眞に平和にして清潔なるものであると言ふて宜しいのであらうと思ふ。今日立派な紳士にして己れの妻或は己れの妻が墮落して藝人を買つたり姦通罪を犯したりする所から、言ふに言はれない苦悶をして居る者も多數あらうと想はれる。而して彼等は其の大苦悶を胸裏に畫いて居る時に、何時も其所に後悔として出て來ることは何であるかと云ふと、噫彼の時にあんな者を家へ入れなければ宜かつた、彼のやうな墮落女を妻にしたから斯う云ふ悲慘な思ひをしなければならぬと後悔して居るに相違ない。それ故に先づ此の上流社會を清潔にすると云ふには、上流社會の主人公自らの行ひを正しくする上に、妻としては必ず立派なる道德敎育を受けたる嚴格なる家庭に成長した所の者を娶るが宜しい。又人の妻たる者も、嚴格なる人格正しく品行方正なる者を夫に持つと云

紳士の苦悶

如何なる人を夫人とすべきか

ふ心懸けを持たなければならぬ。富の爲めや地位の爲めに迷ふやうではならぬ。此の二點に重きを置かぬ以上は何時迄で過つても社會の改善とか一家の平和圓滿とか云ふことは望むことは出來ないのである。

第二十五章　東京の貧民窟

人が能く貧民の狀態がどうであるとか、或は貧民救濟である抔言ふが、凡そ此の貧民の狀態ほど分らぬものは無い。夫れで貧民はどんな生活をして居るであらうか、貧民はどの位の收入があるであらうか、何故貧民となつたのであらうか、夫れ等の者は何時貧民の境遇を脫し得るであらうか、貧民の境遇は又眞に憫むべきものであらうか、貧民の職業はどんなものであらうかと云ふことに付ては、到底滿足なる答の出來るものはないのである。ほんの彼等の狀況の一部分を切れ〳〵に調べ得るといふに過ぎないものである。夫れ故に此の章で東京に於ける貧民窟と掲げて

はあるが、必ずしも是れで其の貧民窟の狀態の全部が、說きつくされたと云ふ譯のものではないことは豫め承知されんことを願ふておくのである。唯ほんの大體につきて東京の貧民は斯樣なものであると云ふことを言ひ、夫れと同時に朦朧げながらに自分の斷案を下だしたに過ぎないのである。

貧民窟

東京に於ける貧民窟と云ふ中の最も著しい所と申せば、下谷の山伏町萬年町、芝の新網町、四谷の鮫ケ橋、深川の靈岸、麻布の新網町、淺草の玉姫町、本所の三笠町等が先づ其の重なるものである。殊に山伏町萬年町の如きは繁華な市の眞中と云ふても宜しい位なもので、東には淺草あり右には上野あり、北には入谷あり、前と脇とは電車通りで交通頻繁なる其の間に位して居ると云ふやうな有樣である。

全體貧民の職業はどう云ふ風であるかと云ふと、之れは無論普通の職業と別に異つた所は無いのである。矢張り大工もあり左官もあり、畳屋もありブリキ屋もあり、建具屋彫刻師魚屋靴屋等皆具つて居るのである。

貧民の職業

その中でも特に貧民の職業であらうと思ふのは、アサリ賣とか納豆賣とか、ヨカ〳〵飴屋であるとか、「おでん」の行商であるとか、或は鍋燒饂飩であるとか、古足袋商、紙屑買、殘飯商、空俵商と云ふやうなものは、如何にも貧民の商人と云ふても宜しいのであらう、其の他何職でもある、唯極めて其の程度が低いと云ふに過ぎないのである。夫れであるから職業はと云ふことを貧民窟に向つて聽く必要はない位である。矢張り表面上は就れも立派なる職であり商であるが、併し其の內幕に這入つて見ると、花簪屋であつても一日に僅に五錢か十錢しか工賃を得ることが出來ない、ブリキ職であつても何職であつても、其の收入が極めて乏しいのである。即ち本人の働きが普通の所までに行かぬ、到底立派に一家を糊するだけの職業をすることが出來ないと云ふのが多いのである。夫れから又もう一つには、其の立派なる表面上の職業は、唯看板であつて、其の裏面は强盜數犯の者もあり、或は賊品、牙保、詐欺、泥坊、掏摸、ぼん引と云ふやうなものが澤山にあるのである。それ故に表面上の職業の

裏面の職業

みを聞いたのでは、貧民窟だからと云ふて特別なものではない。各種の職人或は商人の外は、大抵は人力車夫、車力、人夫、日雇である。その外に羅宇のすげ替とか研屋であるとか、蟲人とか按摩とか云ふものである。尤もそれ等の家族がマッチの箱貼りをするとか、其の他種々雜多の內職があつて、之れが斯うと云ふて統計的に擧げると云ふことは頗る困難である。

貧民の收入

そこで彼等の收入がどうであるかと云ふことも、之れも亦却々分かるものではない。貧民窟へ行つて直接にお前の收入は幾らあると云ふて尋ねて見た所で、正直に言ふ者は先づないといふてもよい、或は憫みを乞はうとして非常に少なく言ふものもあり、或は昨日は幾ら得たが今日は一文もないとかいふやうに甚だ不定のものもあり、或は嘘八百をならべ立てゝ誇大にいふものもあり、迚も彼等の收入が幾らあるからとか、斯くあるとか云ふ事は、社會學者が熱心に其の境遇に這入つて調べても充分には分からぬのである。併し先づ概して言へば是れ等の貧民の仕事の內

で收入の一定して居るのは、人夫、日屋、車力と云ふ樣な者で其の方の收入は無論分かる、一日三四十錢から五六十錢位まで取れるのである、併し夫れが一人取る許りではない、貧民共は一家共稼ぎで妻は子を相手にマッチの箱を貼るとか、或は亭主が車力で出掛ければ女房は工場に出て煉瓦洗ひをするとか、或は橋杭の打込みに雇はれて行くとか云ふ樣な工合で、老弱男女を問はず、十歳以上にもなれば皆相當の內職をして居るのである。唯夫れ等の仕事の收入が甚だ少ないのである、例へばマッチの箱貼りとして見た所で、一千個貼つて三錢にしかならない、一日に三千個貼るものは最も手練なものであると云ふ位で、其の他の內職等に至つては推し測られるのである。又勞働の內でも女子供の仕事は烟草の工場へ通ふとか、或は活版工場抔へ通つて、幾分か家計の手傳をすると云ふやうな工合になつて居る。甚だ不精密ではあるが、彼等の一ヶ月の凡その收入と云ふものは十二三圓から二十圓位までゞ之れも一般とは言はれない、其の家族の多少或は老病人のある者や、又肝心の働くべき主

不正の收入

人が病氣であると云ふのもある、却々以て夫れ等の收入は分かるものではない。殊に泥坊の如き掏摸の如き或は夜淫の如きに至りては尙以て分らぬ。彼等の內には掏模の親分と稱するもあり、是れが其の窟內の子供を幾人となく使つて掏摸を働かせるのである、使はれて居る子供は毎日朝起きると諸所の電車乘りをして人の物品を掏り取つて歩くと云ふやうな次第である。併し泥坊や掏摸だから收入が多いと云ふ事も言はれない。今から二十年程前に、清水定吉と云ふ大盜賊があつた、彼は巡査の數人も殺し諸所を按摩の振り抔をして歩いて、樣子を窺ふては竊盜を働いたものである、彼の前身はと云へば上野の寺坊主で、其の時代の相當教育を受けて居て、さうして知識も相當にあり計算上の考へもあつた。彼が裁判所に於て白狀した時に、總て自分が是れまで盜んだ金高を其の年月に割り充てゝ見ると、一日の收入が僅に四十五錢にしか當らないといふ懺悔をしたと云ふことを聽いても明かである。泥坊だから澤山な收入があると云ふことは言はれない、併し今より二十年前に四十五錢の收入が

貧民と浪費

あつたならば、平均した生活をして行けば毎日相當の生活は出來たであらうが、既に左樣な人間と云ふものは浪費と云ふ所の性質を有して居るので、浪費性と云ふ一種不均衡の精神狀態になつてゐるから、金のあつた時にはどし〳〵飲み食ひ其の他に費消して仕舞ふて、無ければ食はずに居ると云ふやうに、極めて不權衡な釣り合ひの取れぬ生活をして居るものである。まあ貧民は概してさうであるかと想はれる。

貧民の家屋

又彼等が住居して居る家はどうであるかと云ふと、それは恐れ入つたものである。十年二十年東京に生活して居つても、此の文明の利器を應用した電車あり瓦斯あり電氣あり、煉瓦造や洋風石造の立派な家屋ある市街の五六間奥に、藁屋根の家のあると云ふことを知らないものが多からうと思ふ。それが貧民窟へ行つて見ると一年か其所らで腐つて仕舞ふやうな薄く藁を敷きのべた藁屋根の家があるのである。市街は表より見ると立派であるが三尺乃至四尺の路次の中を見ると、其所には藁屋根の倒れさうな家が累々として軒を聯ねてあると云ふやうな有樣である。さう

して又その藁屋根の家よりもまだ小さく汚ない低い長屋が幾らもある。まあマッチの中箱を背中合せに十も二十も聯ねたと云ふと餘り小さいやうであるが、さう云ふやうな類の家が一軒ではない長屋になつて、二百坪足らずの地面の中に五十一戸もある。さう云ふのが六十戸とか百戸とか、纏まつてあると云ふことを聽いたならば隨分驚くことであらうと思ふ。それ等の家はマッチの中箱のやうであるから、間口一間奥行二間とか間口一間半奥行一間半とかいふので入り口は唯一方である、さうして其のひどい長屋になると云ふと、屋根と床と柱とが木で出來て居るの外は、内部は總てボール紙で出來て居る、隣の隔てとなる壁はボールを一枚張つたのみと云ふ家である。是等の家は皆相當の家主があつて、其の長屋を建てゝ貧民に貸與へて居るのである。其の部屋と云ふのは一と間だけである、其の部屋には多少の廣い狹いはあるけれども、先づ半ば以上は大概四疊半一と間である、それが三疊乃至四疊は疊を敷いて一疊乃至半疊の所は板にしてある。其の一と間が客間となり臺所となり作事場

ボールの家

となるので、中には三疊敷の聯らなつた長屋もある、稀には五疊六疊敷の長屋も亦二階附きの長屋もあるけれども、勿論夫れは二階と云ふた所で頭の閊へるやうな二階であつて、矢張り同樣な小さな家で是亦一と間一戸である。夫れも家族が一人か二人位であるならばまだしも滿足が出來るけれども、貧乏人の子澤山で、夫婦に子供の三四人もある。夫れであるから三疊か四疊の間に家族が五人も居ると云ふのが普通である。少し廣い五疊か六疊の間に居るものは、同居人の二三人も置いて居ると云ふやうな始末である。勿論一と間で間切りはないから、同居させるにもそれに都合のよいものをさせるのである。例へば同居人は晝間寢て居て夜分稼ぎ、借家人は夜分寢て晝間働くと云ふやうな工合にして、一軒の家を夜と晝と交代に宿と定めて居る、さうして彼等は自分の家に同居させて置きながら、其の名は八さんであるとか熊さんであるとかは知つて居るが、其の姓氏も知らなければ何國何所の人間であると云ふことも知らないのである。夫れで其の家賃の如きものはどうであるかと云ふと、

家族及び同居人

家賃

長屋の內部

月々の計算ではない毎日の日拂である。大抵がまあ三疊一と間で一日が五錢內外である、その又疊と云ふたら丸で醬油で煮たやうな色で何にやら分らぬ位、汚い著物や汚い身體で寢起きをして居る次第であるから、丸でしと〳〵として濕氣を含んで居るのである。夫れも一つの病氣の原因である、光線はどんな工合であるかと云ふと、晝間でも燈火を點けなければ三疊の奥が見えないと云ふやうに間口の狹い上に長屋と長屋との間の路次が狹いのである。

貧民の被服

次ぎに著物はと云ふと、夫れは同じ貧民窟に居るものでも、商賣や自分の職業に依つて夫れ〳〵違ひがある。そんな汚い長屋の內に不相應な身裝をした娘などが居ることがある、是れは銘酒屋などに夜の奉公をして居るものである。之れは別物として普通の貧民は、之れを四季に分けて見れば、夏は比較的に綺麗であるけれども、其の他はもうぼろ〳〵に切れて汚なく、一種言ふべからざる臭氣のあるものを著て居る、夫れが又どんなに汚れても洗濯すると云ふことはないのである。又全然洗濯が出

來ないのである、何故出來ないかと云ふと著替の著物が一枚も無い、それで洗濯が出來ない、併し夏ならば裸體で一日の内に洗濯して著ることが出來るから比較的に清潔なのである。其の時候に行つて見ると、長屋の路次は隧道の樣に襤褸が洗はれて兩側の長屋へ四五尺の竹を渡したのに釣り下げられてあるから、其の路次を歩くときは跼蹐でゆくのである。

（寫眞參照）追々秋になつて寒くなると夏中著て居つた著物の下へ、何か色色なものを著込むのである。普通の人間は下に單衣を著てそれから上に袷とか綿入とか重ねて著るのであるが、彼等は單衣が割合に清潔であるから、其の單衣の下へ〳〵と著て行くのである。それ故冬でも白絣の單衣の下に、切れ汚れた袷樣のものを著て居ると云ふやうな始末である。愈〻寒くなれば綿入を著るが、其の綿入と云ふた所が、もう切れきつて中から綿がはみ出して居るのである。又足袋はと云ふと穿く者は最も稀れである、稀に穿いて居る者を見ると、底の無いやうな指の無いやうなものを穿き、又片方には白いぼろ足袋を穿き片方に紺のぼろ足袋を穿い

不潔を意に介せず

て居ると云ふやうな有樣である。それであるから冬と秋とになつては、彼等の貧民窟は一層見られたものではない、その内でも學校や工場に通ふ所の子供は、先づ割合に清潔になつて居るのである。今日では特殊學校と云ふのが出來て、彼等を無月謝を以て敎へ、書物學用品は勿論雨具其の他學校内に於ける履物までも總ての設備をして、彼等を善良に敎へ導いて居るのであるから、餘程清潔にはなつて居る。併し彼等の内には時々缺席するものがある、それを敎師が尋ねて見ると著物を洗濯したからといふ、それが生憎雨天であつて乾かないときには、著替の著物が無いのであるから、二日も三日も夜具の中に這入つて寢て居るといふ始末になるのが幾らもある、子供のものは先づさう云ふ工合に洗濯するやうになつたけれども、大人は穢れゝば穢れたつ切りで一切構はない、即ち不潔を何とも思はない、學校や工場へ行く子供は年に何度か洗濯もして遣ると云ふ樣な譯だが、大人になると夫れは汚れやうと黴が生えやうとそんなことには少しも頓着しない、縫ひ直しだとか或は洗濯だとか云ふ

貧民の食物

ことは更にしないのである、一度古着屋から襤褸着物を買つて來れば、其の着物が形ちの無くなるまで着て、愈〻着られなくなると夫れを罷めて、復古着屋へ行つて二三十錢出して買つて來ると云ふやうな譯である。食物はどうであるかと云ふと、之れも一概に惡いとも言はれないけれども、普通貧民として正業に在る者の食する物は大概定まつて居る。彼等は賃錢を得れば其の日〳〵に炭を二錢とか米を十錢とか味噌を一錢とか云ふて買ふのである。即ち其の日〳〵で、明日の計を爲すのではない。夫れで御菜はと云ふと無論家で煮炊きするのではない。又好い按排に夫れに相當した所の副食物を賣るものがあつて、一錢でも二錢でも三錢でも賣る、夫れを買つて食して居るのである。既に明日の計をなさないのであるから、御金が澤山取れた時には割合に上等の物を食して居る。却却普通の者が及びも付かぬ位な上等のものを食つて居るけれども、愈〻雨でも降つて働けないと云ふときは普通の人の食ふことの出來ないやうなものを食ふて居るのである。甚しいのになると、一度や二度は食はな

殘飯

いで居るのである。普通の人の食ふことの出來ないと云ふのは、學校や兵營の食べ殘りの殘飯と云ふものである。之れは麥飯であるが副食物にはいろ〳〵滋養分のあるものが這入つて居るが、之れとて一人分位のものを買つて來て三人位で食するのである、夫れも朝早く出掛けて行かなければ買はれない、少し遲く行けば賣り切れと云ふことになる、さうなると朝飯は食はんで居ると云ふやうな次第である。又もつとひどいのになると、家に家族があつて其の者どもが今夜食ふべき食物が無いのに阿爺は外に出て働いて幾らか御金を取つた、夫れを持つて來て家族に食はせると云ふ考へよりも、先づ夫れで以て彼等貧民窟の近所の繩暖簾の中に這入つて酒食に費して仕舞ふと云ふやうな有樣で、歸つて來て一文もない、家族は何にも食はれない、其所で喧嘩と云ふものが起る、甚しいときは一ッ長屋に一晩に三ッも四ッも喧嘩が始まるといふ始末である、それは皆日常の衣食の爲めに起る喧嘩である。彼の○坊主の如きは人に知られた惡人で隨分收入もあらうに、矢張り此の貧民の部類に屬して、

麺麭屑

豆腐屋や米屋の拂が出來ないでぴよこ〳〵御詫を言ふて居る。是等は決して收入が少ないからと云ふ譯ではないのである、收入があればあつたので矢張り浪費して仕舞つて、さうして貧しい生活をして居ると云ふのである、先づ其の性質が除けない以上は、到底貧民の境遇を脱することも出來ないし、又多少の資産ある者でも此の浪費と云ふことをするやうな者は何時か矢張り此の貧民窟に行かねばならぬのである。尚ほ食物の甚しいのになると、麺麭屋や菓子屋で製造の折りに屑や粉が出來る。夫れを集めて取つて來く、大きな菓子麺麭屋抔になると大分夫れが澤山ある、中には砂も混じて居るし生の粉も混じて居る、夫れを團子のやうに固く丸めて、一錢に二つか三つで賣るのである、夫れ等は軍隊の殘飯も買ふことの出來ない時に朝早くから買ひに出掛ける、夫れも遲れると無くなるのであるから、皆大騒ぎして買ひに行くのである。若し夫れが賣り切れになれば仕方がない、一日食はずに居ると云ふやうな工合に、不平均なる生活をして居るのである。隨つて其の血色と云ふものも甚しく

生活上の均衡を失す

貧民の疾病

眼病

疥癬

惡い、其所で病氣と云ふものが又盛んにあるのである。

貧民窟に特殊なる病氣といふは恰も地方病と云ふやうな工合に其の窟内に絶えることがないのである。夫れは何から來るかと云ふと、不潔と、濕氣の强いと云ふ二ッが原因して來るのである。即ちトラホームといふやうな眼病にかゝるものが頗る多いのである、それは少し眼が惡いとなると汚ない手で擦り廻すので一層惡くする。さうして其の手で子供の面部を撫で廻すから、一人眼病に罹ると一家中殘らず眼病に罹つて仕舞ふのである。その上に顔を洗ふと云ふことも毎日するものでもない、又顔を洗ふとしても一筋の手拭それも三年も醬油につけたやうなのを家内中で使用するのであるから眼病は絶ゆる間がないのである。又其の濕氣から來たる所の病氣は、何であるかと云ふと、疥癬とか濕疹とか云ふ疾病である。是れ亦手當がないから一家中が擧つて罹るのである。それから入浴の事である、是亦出來ない、否入浴せないのが普通である。彼等は清潔を希ふ觀念が少ないのである。或る所には湯屋が設けられて居る、

入浴

夫とても到底普通のものに行かれたものではない、路次の行き止まりの眞暗なところに湯屋がつて、一坪の場所に風呂もあり流場もある、一錢風呂と云ふのが卽ち夫れであるが、その一錢すらも入浴に費すものが少ないので到底營業にならぬ。山伏町の湯屋は旣に廢業して仕舞つた。之れを以て見ても彼等が衞生的の觀念の乏しいことが分る。

貧民の教育程度

次に彼等貧民の教育は如何樣であるかと云ふと、夫れは千差萬別であるが、中には立派な文字を書き、又我が子を教育しなければならぬと云ふことを知つて居る者もある。又或る貧民窟には以前師範學校を卒業して訓導をしたと云ふやうな者もある、また以前は立派な旗本であつたとか、槍一と筋の家に生れたと云ふ者もある、女にしても琴、三味線、茶の湯生花抔の出來ると云ふ者もあるのである。けれども概して言へば眼に一丁字が無いと云ふ者が多いのである。併し其の眼に一丁字も無い者で小さいながらも正業に就いて居る惘むべき貧民が、貧民としては誠に宜しいのであつて、多少の教育があるといふやうな貧民は、實は最も不良の

不良の徒

徒である、彼等は詐僞、竊盜、其の他あらゆる罪惡を、最も巧みにする所のものであつて、所謂貧民窟の風儀を紊り害毒を流すといふ實に仕方の無いものである。夫れで今日は市立の特殊學校が出來て、教育を受けさせるといふ結構な設備が出來て居るが、彼等が子供を學校へ出すのは學校の教師に依賴されて止むを得ず出すと云ふやうな考への者も隨分あるのである。自分の子供が若し學校に行く往來抔に於て、同じ學校の生徒に打たれた抔と云ふことがあると、直ぐと學校へ來て其の子を見付けて打ち返へす、さうして教師に向つては監督が不行屆だから、私の子供はもう學校を退校させると云ふて威張り散らす者もある。又此の教育の必要などといふことを聽いて見ても、よい人間にすると思ふて居るものが極めて少ない。多くは學校は字を習ふ所であると云ふやうな意味に取つて居る。夫れは又何の必要があるかと云ふと、徵兵に行つた時に困るから字を習はせるとか、又或る者は內證で何かする場合に手紙を人に頼んで書いて貰ふと夫れが知れて、親方や親などに怒られたり叱られた

貧民の學校に對する考へ

りするからである、先づ字の必要と云ふことは此所等に在ると云ふやうなものゝだと答へる位、然るに今日の如く此の特殊學校の設備が充分になつて來て、子供の惡戯もそれが爲めに改つて居ると云ふことである。又是等の學校で清潔の觀念を起させる爲めに浴室も設けてあれば理髮室も設け治療室も設けてあるといふやうなわけで、將來は餘程よくならうと思ふ。

貧民の性質

次に彼等貧民の性質はどういふ傾向があるかといふと、是亦充分の斷定は出來ぬ、併し乍ら大變に腹立ち易くその上に强情である、子供を叱るにも大きな聲を出して、此の畜生ぶんなぐるぞとか、或はぶつ殺して仕舞ふと云ふ樣な惡口を言ふのである。其所で子供の方も却々强情に出來て居るので、一度位大きな聲を出されたからと云ふてびくともしない、親の方では一度で聽かないと二度目には擧固でなぐると云ふ樣なことになる、さうなると子供も親に惡口を言ひ親に喰ひ付き中には親をなぐり返す、親の方でも亦なぐる、いよ〳〵敵はなくなると跣足で飛び出し夜

の十二時になつても歸つて來ない、其所で親は矢張り子を思ふから心配して尋ねあるくと何所に居るか分らない、翌日近所の者から彼所に居たとか此所に居たとか云ふて知らせて來る、行つて見ると公園の樹の下とか或は神社佛閣の床の下とかに寢て居ると云ふ始末、それが十歳か十一歳の子供である。眞に後世恐るべき者である。若し是等が特殊學校が無かつたならば、何所迄惡くなつて社會に害毒を流すか知れないのである。それから彼等社會に於ては又賭博を好むものが多い、中にはそれを商賣にして居る者もある。子供抔もそれに類した遊びを爲す者が多い、それが又巡査抔に見付かり咎められると、子供ながらに惡口を言ふて居る、巡査が通り過ぎると復始めると云ふやうなことも隨分ある。

救助の效果

又或る宗教家が彼等の窮困の不幸を憫んで、南京米を彼等に惠んだことがある、さうすると彼等がそれを有難く戴いて家へ歸つてから、斯んな南京米抔が食へるものかと云ふて、それを直ぐに米屋に賣つて而も上等なる白米を買つて來て食ふと云ふ始末である、しかも其の南京米は三日

分の食物であるのに、それを賣つて上等白米一日分を買つて來て喜んで食つて居つたと云ふことである。三日の生命を繋ぐべき食物でも、それが惡いとなると云ふと、それよりは良い物で一日の生命を繋ぐ方が宜しいと云ふ有樣である。それで彼等をば貧民扱ひをしては到底駄目である、貧民に惡い物を惠むは宜しくない、惠むとならば宜しく良い物を惠まなければならぬと云ふことを言はれた。又彼等はあれば有りつたけ費消してしまひ、無ければ食はずに居るといふ浪費的性情となつて精神狀態の上に均衡を保ち得ないのである。彼等が何所が常人と違つて居るかと云へば先づ斯う云ふ所の點であらう。尤も何處がどうといふて惡いところはないが何分にも働きが少ない爲めに貧乏して居るものも澤山にあるのである。

以上述べたる所は所謂貧民窟の狀態である。それで之れを聊か理窟的に抽象して論じて見やうと思ふ。

第一彼等貧困の原因は何處にあるかといふことである。之れは直接に調

貧困の原因

働きの乏しいもの

人口の增加と仕事の缺乏

べた所が統計的に數を以て示すことは吾々一人の力では解るものでないが、大概社會學者の示す所と同じやうに思はれる。元來貧民と云ふよりも、此の貧困の原因と云ふものは道理上より我々は知ることは出來やうと思ふ。貧困の原因と云ふものは何であるかと云ふことを調べて見ると、其の一は其の人間が生產力が乏しくて人幷の收入が得られないと云ふことである。

其の二は人間の增加すると云ふことである。東京にすれば、東京が年々歲々に膨脹して行く、即ち每年九萬餘の人口が殖える、隨つて一ッの仕事に就いて我も〳〵と其の仕事の奪ひ合を始める、即ち食物を互に奪ひ合つて食すると云ふやうなことが起つて來るのである。人口の少ない時には一人一圓の收入があつたが、人が多くなつたから五十錢しか得られないといふ結果になるのである。其の三は個人々々で遣つて居つた仕事が、各種の大機械が發明されると、今まで百人の手を要したものが一人の手で出來るといふ工合になつて、人の仕事が器械に傾分を奪はれて仕

器械の發明と事業の獨占

舞ひ、又個人の小事業は大資本家の獨占的事業に變じて仕舞つて、富の分配も不公平になり、或る者は澤山に利益を占め、或る者は手を束ねて之れを見て居ると云ふことになる、其所で今迄で安樂に食を得たものも食を得られぬと云ふことになつて、貧困者と云ふものが出來てくるのである。

浪費

其の四は浪費である。相當に自分の生涯を過せるだけの富を有して居る者が、之れを一時に浪費して仕舞ふて、僅かに一兩年の生活しか支へることが出來ないと云ふことに陷るのである。即ち其の以後生存して居る間は貧困の狀態に居らなければならぬと云ふことが來たる、丁度前に言ふた如く三日分の生活の食物を與へられたのに、夫れを一日に食して仕舞ふと云ふやうな生活をする、夫れが爲めに貧困に陷るのである。彼等と雖も數の觀念が乏しいと云ふわけではないが、情緒的快樂の習慣に抵抗が出來ないほどに、精神の均衡を失ふたからである。之れは社會の誘惑に陷つた結果であらうけれども、一方に於ては其の個人の性質と云ふ

不景氣と貧困者

と可笑しいやうだが、その境遇、習慣の爲めに、精神作用に變調を生じて一時の情慾的快樂を劇しく貪ると云ふ傾きに陷つた者であらうと思ふ。即ち言葉を換へて言へば一種の病氣である腦力の働きが平均を失つて仕舞つたものである。まあ貧困の原因と云ふものは此の四ッであらうと想はれる。即ち其の人間の低能のためなると、人口が增加したが爲めと、各種の機械が發明されて人手を減ずると共に大資本家に獨占されたのと、尙一ッは浪費の爲めとであらうと想はれる。此の貧困と云ふものも徐々に來る場合あり、又急劇に來る場合もある、其の急劇に貧困に陷ると云ふは、矢張り人口の增加即ち都會の膨脹とか、或は機械の發明とか云ふことに原因して居るので、一と口に申せば不景氣と云ふやつである、經濟界に非常な恐慌を來して、一般不景氣になつたと云ふ時に、急劇に貧困者が出來るのである。夫れは何故であるかと云ふと今迄での機械は一日に製造するものが十個だけしか出來なかつた、然るに今度新發明の機械は一日働かせると其の十倍も百倍も供給が出來ると云ふことが出來る、

さあさうなると今度は供給が過多になつて來て、物價が急劇に非常な下落を來たすと云ふ樣なことが來たるのである。其所で今まで利益のあつたものも非常に利益が無くなり、同時に一方には餘りに供給が過多になるから、一時其の製造をも中止しなければならぬと云ふやうなことが來たる、夫れが爲めに其の原料製造に從事して居つたもの、又は其の製造に從事して居つた者も、一時糊口の途を失ふと云ふことにならなければならぬ。また急劇に都會が膨脹する、例へば年々二萬人宛增加して行つたものが、急に十萬人地方から入り込んで來たといふ場合には、生存競爭の爲めに同一職業を爭ふと云ふことになるので、商人にしても今迄一町內に二軒であつたに、五軒も六軒も同業者が出來ると云ふことになるから、御互に商賣の不景氣と云ふことが來たるのである。是れ等は矢張り孰れも不景氣の原因になるのである。又或る大會社にしても此の供給上の過多なるが爲めに其の製品の價が低落すれば、會社の財產も夫れが爲めに減ずるのである。例へば株の低落を來たすとか工場の事業を休む

貧困と社會の壓迫

とか云ふ樣な譯で、矢張り恐慌を來すのである、此の不景氣の原因も隨分澤山にある、或は經濟界が一時に餘りに活動し膨脹し過ぎて、夫れが爲めに皆共倒れになると云ふやうなことがある。夫れは此の四五年前に各會社が非常に一時に勃興して、その反響として劇しい不景氣に陷つたことである。さうなると總ての事に手違と云ふものが起つて來て、今まで相當の生活をして居つた者、又は富を有して居つた者も一時に損失を來たすと云ふことがある。殊に諸株の暴落抔となると人の富と云ふものが夫れだけ減ずるのであるから、金を出すことにより以上の警戒を加へる、其所で不景氣と云ふものが又急劇に來たると云ふことになるのである。

偖て愈〻貧困に陷ると云ふと其所に社會の壓迫を劇しく受けると云ふことになるのである。貧困なるが爲めに今まで交際して居つた所の人も之れを顧みない、彼等が不潔なる衣服を纏ふが爲めに、人は之れを排斥して共に幷び立つを恥づる、彼等が金錢を有して居らぬがために良い食物

を食することが出來ないで、止むを得ず粗食になつて來る、住居も粗末な所でなければ居られないと云ふことになつて、社會の壓迫と云ふものが益〻加はつて行く、其所で其の壓迫からして一種の貧民の特徴と云ふものが出來て來るのである。精神上の變調も其の壓迫の爲めに益〻劇しくなり、身體上にも其の爲め一種の疾病と云ふものが來たり、斯くして身體上に變調を及ぼして來ると、亦精神上に同じ變調が來り、其の原因が浪費に在る者は、正しい計算上の分配の觀念と云ふものも無くなるし、さうなるから貯蓄を致さう抔と云ふ觀念は無い、今までの情緒的快樂を貪つた習慣に因つて、夫れのみを心に想ひ慕ひ聊かの收入があれば、直ちに其の方に浪費して仕舞ふと云ふことになつて、夫れが遂に精神狀態の常となり動かすべからざる性情に陷つて來るのである。其の他此の壓迫からして自然に彼等の道德念慮も衞生的念慮も全く消えて仕舞ふのである。即ち惡い事をしても一時自分の口を糊すれば宜しいと云ふやうになつて來る。夫れが又彼等の病疾となつて仕舞ふのである。彼等に貯蓄

貧民の特性貯蓄心の滅却

の念慮があるとか、或は明日明後日の生活を慮るとか、恥かしいとか汚いとかいふ念慮がある者ならば、彼等は間もなく貧民の境遇を脫出し得る方法も案出されるであらうけれども、夫れが無い所から貧民の境遇を脫し得ないのである。故に或る人は頻りに貯金と云ふものを勸めたり、或は清潔法を敎へたりするが、此の貯金も脅迫的に貯蓄せしめると云ふやうであつたならば多少效もあるけれども、それが幾らかの貯蓄が出來、貯蓄を樂むと云ふ念慮が來たる者ならば、勿論細民の境遇は脫し得るのであるけれども、既に其の病疾となつた者は些かでも溜まれば何等かの口實を附けて引出して、己れの一時の快を貪る爲めに費消して仕舞ふと云ふので、是亦根本的に貧民を救濟するの策とすることは難いのである。世の中に乞食も三日すれば罷められないと云ふ諺があると同じやうに、此の貧民の境遇に陷つた者も、亦其の內に自から樂みがあつて、さうして夫れに滿足して居るのである。傍から見るやうに憫れなものではないのである。若しも日夜其の悲慘なる狀況に泣いて居るであらうと思ふと、

貧民の境遇を脫し得ざる所以

貧民自身は悲慘を感ぜず

大いなる間違ひである。彼等は矢張り夫れに滿足して又其の中に愉快があり樂みがある、夫れが卽ち彼等を救ひ出だすことの出來ない一ッの原因である。彼等は二日も三日も寢て居つて食はずに居つても、それを常の事として、次ぎに得た時に非常な愉快を感じて一時に非常な快樂を貪るのである。さうして一食二食を廢して居る時にも、其の來るべき快樂を夢みつゝ忘れることが出來ないと云ふやうな、疾病的に其の境遇に於て樂みがあるのである。既にさうなつて來ると其所に一種の細民性が立派に出來上つて其の仲間同志と共に樂み、子孫にまでも其の性癖が遺傳するといふやうなことに立ち至るのである。夫を救ひ出すのが社會政策者や慈善家若くは敎育家の任務と言はなければならないのである。英國倫敦市に於てイーストエンドと云へば、實に有名なる貧民窟である。所謂救世軍のブース大將が、此の貧民を救ひ出ださんが爲めに其所に生活をして居ると云ふ位の所である、又米國紐育のウエスターと云ふ所も有名なる貧民窟である。併し日本のやうに此の市街地の中にはない。それ

貧民に對する社會政策

は歐米に於ては社會政策の一ッとして、貧民と云ふ者を市外の或る一箇所に纏めると云ふ方針を採つて居るからである。我が日本に於ては未だ此の事は實行されない、其のされないが爲めに市の眞中に言ふに言はれぬ汚い所の貧民窟が存して居るのである。表通りより僅かに二三間奥に這入れば其の邊り一面に貧民國の蠻地であるやうな譯である。どうか社會政策の一ッとして、市ば此の貧民を市內に置かぬやうに、或は左樣な汚ない家屋は家主地主に建てさせないやうにして、市內に建つべき家屋は斯う云ふ材料で斯う云ふ設備でと云ふ制限を加へるやうにして、貧民をして自からに市外に移らせると云ふことも亦一ッの方策であらうと想はれる。貧民をして市內に生活させると云ふことは、彼等をして貧民の境遇を益ゝ脫することの出來ないやうにすると同じことである。今言ふ通りに僅かの路次を出れば所謂榮耀榮華の花の都會である、隨つて彼等は常に肉的情緖的の快樂を、間がな隙がな貪らうとして居るのである。其所で幸ひに善良なる貧民許りあれば宜いけれども、其所には强窃盜、

拘摸、詐僞ぼんびき等色々の惡いことをしても、情慾を滿たしたいと云ふ精神が起り、それが其れから其れへと多くの貧民に感染して不正なる病疾となつて仕舞ふのである。若し之れを市内に居住することを得せしめないやうに、即ち市内に於てさう云ふ安價な家又不完全なる住居の出來ないやうにすれば、彼等は自から市外に移りて、清潔なる空氣を吸ひ完全なる日光に浴し、誘惑多き巷を離れて天然自然の感化を受けて、今日よりは一層善良なる者も增加し、また貧民の境遇を其の子孫が段々に脱出すると云ふことも出來やうと想はれる、前にも言ふた通りに、貧民の中にも全體の精神力の活動が乏しいとか、體力が乏しいとか云ふ低能者と云ふものがある、これ等の者は惡い事はせないが、朝から晩まで營營として働いて居ても、自分の知識技術が低いのであるから、外の者が一日一圓の生産力があるとすれば、彼等は一日に三十錢か四十錢しかの生産力しか無い、眞に憫むべきものであるが、是等にしても市外に移らば、自から生活上に左程の困みなく行けるのである。又斯う云ふ者ほど

低能者と市外

浪費の中毒

生活上の困みは深く感ずるのであつて、是等に對しては外部でも哀れと思ふてやるがよいのである、即ち之れに對つて外部が同情を寄すべきものである。浪費的低能者即ち精神作用の均衡を失つて居る貧民は、夫れが全く白癡であると云ふ譯でもなく相當の計算上の觀念があつて、今日此の全部を使つて仕舞へば明日は無くなると云ふことも能く知つて居るけれども浪費性と云ふものが出來て仕舞つて、精神上の動作に非常な不均衡を來して居るのであるから、斯う云ふ者には同情を寄すべき必要が無いのである。自分は貧民窟を數回見廻つたけれども眞に何等の得る所もない、漸く以上述ぶるが如き不完全なることしか言はれない。是れすらも貧民は斯る事情で貧民になつたと云ふことを分類して統計的に言ひ得る材料は得られないので、學者に對しては何等の參考にもなるものでない。併し東京生活の失敗者は此の貧民であるから、現在東京生活をする者及び將に東京生活を爲さうとする者の爲めには幾分の參考にもなり、又警戒にもならうと思ふ。

東京學 終

東京學
定價金壹圓參拾錢

明治四十二年六月十五日印刷
明治四十二年六月廿五日發行

著者 石川天崖
發行者 石川榮司
東京市本郷區森川町一番地

印刷者 手塚猛昌
東京市京橋區鉛屋町十五番地

印刷所 東洋印刷株式會社
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發兌元 東京市本郷區森川町一番地 育成會

不許複製

最新刊

鹽泉市川君

選

正氣涵養 愛吟愛誦

◎絶高の趣味と絶高の風教は本書の紙上に充溢し活躍しつゝあり。

菊半截美本
定價五拾錢
郵税八錢

本書は高雅雄壯なる漢詩。和歌。俳句。英文。英詩。金言。より通俗卑近の俚言に至るまで所謂古今東西の聖人偉人の高教道徳を網羅したるものにして殊に英文英詩に至りては原語を以て此を記述し加之其意義の難解なる箇所には一々正確なる註釋を施して讀者の便を計れり。

一度本書を繙かば一は以て修身資料となり一は以て作文演説の良資料たり、世の教育家は勿論何人と雖も修養の道程に在るものは必ず一本を座右に備へて高吟し高誦し以て理想の教育家たり、堅實なる大和民族となるに努められん事を切望す。

育成會發兌